

化け物は笑う

SAMUSAMU

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

舞台は現代。この東洋の島国、日本には古来より妖怪、物の怪、魔物といった異形の怪物——『化け物』と呼ばれているモノたちが影ながら存在していた。

そして、そんな化け物たちと秘密裏に戦いを繰り広げていた術者——『陰陽師』。しかし、そんな中、人間を一方的に敵視するでも、ただ蔑むだけではない。

人間に興味を持ち、自らの目的のために人里へ降りてきた化け物の少女がいた。彼女は本来であれば敵である陰陽師の友人の誘いを受け日本の首都・東京の地へと人知れず足を踏み入れる。

これはそんな化け物の少女と、多くの人間たち。二つの種族の交流譚。

果たしてこの出会いは悲劇となるか、喜劇となるか。

※この作品は以前小説家になろうで掲載していましたが、他の作品と一緒にこちらのサイトでまとめて管理することになりました。他の作品共々どうかよろしくお願います。

目次

その少女の名は	1
九十九明という男	31
新しい学園生活	53
傷つき迷える少女たち	72
逃れられぬ災厄	96
戦え	118
その化け物の名は	139
テッド&メリー	160
その内側へと	197
その覚悟のほどを	220
その呼び声に応える者	243
化け物は激突する	261

エピローグ
化け物は笑う

その少女の名は——

笑うという行為には、様々な意味合いが込められている。

楽しい、嬉しい、といった気持ちを表現する際の笑顔は勿論のこと、人はそれ以外の感情を抱いたときにも『笑み』というものを浮かべるものだ。

危機的状況にあつても、無理やりにも笑みを浮かべて、自身を鼓舞する。

悔しさや怒りを押し殺す場合にも、『仮面』という名の笑顔を作つて周囲を誤魔化す。辛く、苦しいときこそ笑つて生きろという前向きな意見もあれば、笑つたところで何も解決などしないと、己を律する者もいる。

笑いの種類も、実に多種多様である。

愛想笑い、含み笑い、忍び笑い、泣き笑い、思い出し笑い、作り笑い、照れ笑い。

馬鹿笑い、薄ら笑い、せせら笑い、誘い笑い、貰い笑い、すまし笑い、半笑い。

失笑、冷笑、微笑、哄笑、歡笑、艶笑、爆笑、嘲笑、憐笑、嬉笑、巧笑、軽笑。

目笑、朗笑、嗤笑、戲笑、窃笑、顰笑、一笑、談笑、言笑、絶笑、嬌笑、放笑。

これら複数の笑みを、その時々で使い分けることができる動物は人間だけだという。

その時々によさわしい感情を、それぞれの『笑み』にのせ、人は他者へと己おのが想いを伝える。

で、あるならば――

彼らは――あの化け物共は何故笑うのだろうか？

我が国、日本が誇る『妖怪絵巻』には数多の妖怪、化け物たちが名を連ね、その雄姿が描かれているが、その大半が笑みを浮かべての出演となっている。

今まさに、人間に襲いかかろうと、恐ろしい形相の笑みを浮かべているもの。

柱や天井に隠れ潜み、通りかかる人々を脅かしてやろうと、虎視眈々と笑いを堪えるもの。

泥酔しきつた人間の飲のん丘べえ衛のように、陽気に羽目を外したゲラゲラとした笑い顔。

あの恐ろしく、おぞましい、それでいてちよつと間拔けな、あの化け物どもが浮かべる『笑み』には、いったいどのような意味が存在するのであろう？

あの『笑み』にはどんな感情がのせられ、その心の奥底に、どのような想いを秘め隠しているというのだろうか？

我々人間がそれを知るには、妄想を膨らませるか、自らが化け物になるか、あるいは当人たちに聞いてみるしかないのだろうか、いずれにせよ覚悟しておくことだ。

なにせ、相手は化け物なのだ。

下手に関わりを持つものなら、命がいくつあっても足りはしないだろう。

◇

4月上旬 東京都渋谷区 渋谷駅前

「——お〜！ 何とも見事な光景よのう！」

地下の出口から駆け足で外に飛び出してきたその少女は、陽の光に目を瞬かせながらも、前方に広がる光景に心奪われ、感嘆の声を上げていた。

見たこともない巨大な建造物が立ち並ぶ中を、大勢の人々が行き交う姿に、言葉にならない感動の波が彼女へと押し寄せる。

特に、少女の関心を引いたのが人の流れだ。

急ぎ忙しく足を動かす者もいれば、犬コロの像の周りに集まり、お喋りに興じている者もいる。規則正しい列を作っている一団があるかと思いきや、次の瞬間にも一斉に動きだし、先ほどまで鋼鉄の箱が走行していた白線の上を小走りで駆け出して行く。

行き交う多彩な人々の種類にも彼女は目を見張る。

これまで、同年代の若い衆を引き連れ、何度も人里を物見遊山したことはあったが、近くにあった農村の住人は、その大多数がお年寄りで埋められていた。日々、やることも顔ぶれも変わらない村の様子は、全体的にのほほんとした雰囲気を保ちつつも、どこか

やるせない、寂寥感のようなものを常に漂わせていた。

しかし現在、少女の眼前を埋め尽くす人々には活気がある、賑わいがある。老若男女問わず、様々な人たちが、それぞれの目的のために縦横無尽に動き回っている。

彼らにとつては当たり前のことだが、彼女にはそれがとても新鮮なものに感じられ、それまで処理したことのない圧倒的な情報量を前に、少女の脳内がぐるぐると渦を巻いていた。

話に聞いていたこの国の首都。その一角に過ぎない渋谷の『街』の雑踏。

知識としては知っていたつもりだったが、話に聞くのと実際に見てみるのでは、やはり違うものだと、少女はひたすら感銘を受けていた。

しきりに感心するその少女の様子を見て、すれ違う人々の何人かがクスリと笑う。道行く人々から見れば、彼女は『初めての都会に戸惑う田舎者』に映ったことだろう。

事実、少女は田舎者だ。

彼女の住む村にはカラオケもなければコンビニもなく、それどころか、電気や水道すら全く通っていない。真正正銘の下田舎から、彼女はやって来たのだ。また、少女の奇妙な格好がさらに通行人たちの笑いを誘っているのだが、本人はそんなこともお構いなし。飽きもせず、キョロキョロと周囲を見回していた。

「——おいおい、どうしたお嬢ちゃん。迷子か？　どこの忍者村から抜け出てきた？」

すると、お上りさん全開の彼女に、血氣盛んなチンピラたちが冷やかしかし交じりに声をかける。

ちよつと間違つた渋谷ファッションとやらで、己を着飾る彼らの服装も、少し上の年代の人から見れば少女の奇抜な格好と五十歩百歩なのだが、彼らもそんなことお構いなしである。

「場違いにも程があるだろうがよお、つーか、んだよ、その恰好はつー!」

「コスプレしたけりや、秋葉原行けや。ハロウィンにはまだ早すぎんぜえ!」

好き勝手に嘲りの言葉を、唾と一緒に飛ばしてくるチンピラたち。そんな彼ら相手に、少女はただただ不思議そうに首を傾げる。

「こすぶれ? はろういん? 何を言っているのか理解できぬ。日本語で喋ひのもことばってくれ。

それから、もつとはつきり発音せんか。呂律が回っておらんようで、よう聞き取れんわい」

「「なーに?」」

馬鹿にされたとても思つたのだろう、彼らは一斉にその顔を不快に歪める。

「いい度胸じゃねえか、田舎もん! これなら聞き取れんだろ、んん?」

グループのリーダー格と思しき、鼻にピアスをつけた男が、少女に厳つい顔面を寄せ

る。男は鼻輪をつけられた牛のように、モーモーと少女の間近で息を荒げる。

だが、吹きつける鼻息に少女は顔色一つ変えることなく、おもむろに彼の額に右手を翳した。男たちが「？」と訝しがるのにも構わず、少女はそのまま、おはじきを弾くようにデコピンをかます。

「——があつ!?!」

突如、男の首が仰け反った。

およそ、少女の細腕から繰り出されたとは思えぬような強烈な一撃が、男の足を地面から浮き上がらせ、力士に張り倒されたかのような勢いで、彼を仰向けに転がす。

「や、やっさん!?!」

騒然とする鼻輪の仲間たち。触らぬ神に祟りなしと、無関係を決め込んでいた通行人たちも足を止め、俄かに騒ぎだす。

ただ一人、少女だけが無様な醜態を晒した鼻輪——やっさんと呼ばれた男に、呆れ果てたとばかりに、しかめつ面を浮かべていた。

「おいおいおい! ずいぶんと自信ありげに突つかかっつきよるから、てつきり腕に覚えがあるものとはかり思ってしまったぞ。指先一つでこのざまか? そのような脆弱さで、よくもまあ、我が物顔で街中を歩けるものよ。……ふむ、どうやら貴様らには、身の程を弁えるという言葉の意味を、体に直接分からせてやる必要がありそうだな」

「んだとおー！」

少女の言いように、得体のしれない彼女の膂力に若干怯みながらも、殺気立つ男たち。今にも飛びかかりそうな彼らの形相に、野次馬の一人が近くの交番まで走り出した。

一分もしないうちに、駐在している警官が駆けつけてくれる筈であった。だが——

「——Stop! Stop the War!!」

一触即発の少女とチンピラたちの間に、どこか疲れた様子で一人の少年が割つて入る。

「ん、どうした、テッド。何をそんなに慌てておる。便所はもう済んだか？ まさか漏らしたか？」

「漏らしてませんよ！ 失敬な！」

少女からテッド、と呼ばれたその少年はブロンドヘアの外国人だった。高校生ほどの少女より幾分か年下の、中学生と思われる男の子だったが、かなり流暢な日本語で言葉を紡いでいく。

「まったく！ 目を離すとすぐこれだよ！ こんなところで油売つてないで、早く行きましょう。九十九さんが首を長くして待っていますよ」

「うむ、そうだな。これ以上待たせるのも悪いからあない。案内せよ、小僧」

少女は何事もなかったように踵を返す。テッドは「ご迷惑をおかけしました」と、チンピラと通行人たちに頭を下げ、少女と共にその場から立ち去ろうとした。

「ま、待ちやがれ！」

そこへ制止の声が飛ぶ。

先の一撃で沈められたやっさんが、真つ赤に腫れあがった額を抑えながら、身を起こうと奮闘していた。だが、ダメージを引きずっているのか、なかなか上手く起き上がれない。

やっさんは悔しそうに歯軋りする。

「て、テメエ………いったい、なに、もんだ………」

一方的に喧嘩を吹っかけてきたヤンキーの問いなど、いちいち答える義理はない。

だが、少女は足を止め、振り返り、律儀にその問いに答えてみせた。

「神宮寺鈴鹿だ。故あつて暫しの間、この地に滞在することと相成った。まあ、これも何かの縁だ。宜しく頼むぞ、人の子らよ」

◇

榎田衿那は『不幸』な少女だった。

日本という国は世界から見ても、比較的裕福な国である。

戦争という苦い記憶を遠い昔に捨て去り、飢餓や貧困により餓死する心配も、アフリ

力や中東に比べればずっと低い。教育環境もすっかりと整っており、誰もが等しく学ぶ場を与えられている先進国だ。

しかし、どんなに恵まれた環境にいようと、平和な国に生まれようと、それを幸せと感じられるかどうかは、その人の心の在り方次第である。

そして、衿那という少女は、確かに自分は『不幸』であることを自覚していた。

事の始まりは三年前——彼女が中学生になったばかりの頃だ。最初は本当に些細なことから始まった。

何も無いところで躓く、犬に噛まれる、お気に入りのカップがひび割れるなど。

日常生活においても起こりうるであろう、些細な不運が立て続けに彼女を襲う。

その頃はまだ、衿那も周囲の人々も、それほど深刻に考えてはいなかった。

「そんなこともあるだろう」と、持ち前の明るさと勝気さで、衿那はこれらの不幸を笑い飛ばしていく。洒落や冗談で済まなくなったのは、さらに一年経過してからだ。

ひつたりにあつたり、車に轢かれそうになったり、頭上から花瓶が落ちてきたりなど。

この辺りから、周りの友人たちが「おかしい」と訝しがり、一人、また一人、距離を置くようになった。さらに、不幸は三年目に突入する。

通り魔に刺されたり、自動車の玉突き事故に巻き込まれたり、入院先の病院が停電し

たり。

もはや、收拾のつけられない事態にまで発展していき、遠巻きに見ていた者たちまで、衿那を迫害し始め、何の罪もない彼女を蔑みだした。

あの女が『不幸』を呼び寄せている、と。

しかし、理不尽な扱いや不幸にも、榎田衿那は決してめげなかった。

支えてくれる家族や親友から力を貰い、己の運命に抗おうと、果敢に立ち向かったのだ。

だが——そんな家族の存在が、最終的に衿那の心を抉りとる結果となる。

その運命の日、衿那を励まそうと、榎田一家は久方ぶりに家族旅行へと出かけた。

行き先は都会の喧騒から離れた温泉旅館。誰も衿那を疫病神と蔑む者がいない地で、疲れを癒すため、有名な老舗旅館に宿泊するべく一家はやって来た。

目的地に到着して早々、長時間の車の運転で疲れた父が道中の土産屋で車を止める。

夫に献身的に尽くす母が、彼のために何か飲み物でもないかと店の中に入っていく。すると、両親の目を盗み、幼い男の子が車の中から飛び出した。

榎田家長男——衿那の弟の翔しやうくんだった。

まだ小学生の彼にとって、車の中でじつとしていることは、ちよつとした苦痛である。

久方ぶりの外の空気は無邪気にはしゃぎ出し、両親の目を離れ、一人山の中へと駆け

出していき、姉である衿那は慌ててその後を追いかけた。

暫しの間追いかけてこは続き、ようやく弟の手を掴んだ衿那は、すこしきつめの口調で彼を叱り、急ぎ両親の元へ戻ろうとその手を引き――

刹那――突然の地響きが二人を襲う。

それはまるで、二人が揃うタイミングを見計らったかのように発生した土砂崩れだった。

土砂の波が姉弟を飲み込むべく、津波の如く迫る。

突如として襲いかかる『不幸』を前に、姉である筈の衿那は、ただ立ち尽くすことしかできずにいた。

そんな彼女を――叫び声を上げながら真つ直ぐ突つ込んでくる、翔くんが突き飛ばした。

まだ小学生と未成熟な体躯だが、度重なる不幸により、ストレスでやせ細っていた少女の体を突き飛ばすには、十分の一撃だった。

絶望が――衿那の視界を埋め尽くす。

弟に突き飛ばされたことで、一人安全地帯へ逃れることができた彼女は見た。

土砂が弟を飲み込んでいく、その光景を。

土砂に飲み込まれる寸前まで、弟は笑っていた。

姉の無事を喜ぶ無邪気な笑みで、彼は笑っていたのだ——。

その後、崩れ落ちた土砂の中で、翔くんは意識不明の重体で救助される。

怪我の後遺症か、彼は今も植物状態のまま、病院のベッドで点滴を受け続けている。

それまで『不幸』に対し、頑なに抵抗を続けてきた衿那の意思が、完全にへし折られた。

両親は衿那を責めようとはしなかったが、その優しさが逆に彼女を苦しめる。

このまま家族と一緒に暮らし続けなければ、弟だけではない。両親までも、自分の『不幸』に巻き込んでしまう。

衿那は中学卒業を機に、一人親の下を離れ暮らすことを決意する。

親には「東京の高校に進学する」と、もつともな理由をつけ、事故のことを聞きつけてなお、自分を心配してくれる親友とも一方的に縁を切り、失意のどん底に落とされたまま、彼女は生まれ育った町を離れ、この街へと逃げ出したのだ。

それでも彼女の——榎田衿那の『不幸』が止まることはなかった。

◇

渋谷区 某ファミレス内

銀行強盗による『立てこもり事件』。

それが今現在、衿那が直面している不幸である。

和気藹々わきあいあいとした空気に満ちていたファミレス内が、見る影もなく冷え込んでいた。店の中央に店員や客たちが押し込められるように座らされ、人々は暗い表情で目出し棒を被った男たちへと、窺うような視線を向けていた。

彼ら――主犯の梅咲輝美^{うめざきてるみ}率いる五人組の強盗犯は、綿密な計画の元、この一大事業に挑んだとのことだった。狙いの銀行を絞り込み、行員の動きや警備員の配置を頭に叩き込み、入念に装備の確認をして、逃走経路を練りに練った。

だが、たった一つのアクシデントによつて、それら全てが水泡に帰すこととなる。

「――糞があ!!」

強盗犯の一人が近くの椅子を蹴飛ばし、その乱暴な振る舞いに人質たちが肩を震わせ

る。

「……落ち着け」
リーダーの梅咲が仲間の行動を制止しようとするが、その効果も薄く、男たちは口々に叫んだ。

「うるせえ! だいたい、なんでこんなことになっちゃったんだよ!」

「俺が知るか! そもそもコイツが運転をどちつてなきや、警察に追い詰められて、こんな店に逃げ込む必要もなかったんだからよ!」

「と、とちつてねえよ! い、いきなり車が動かなくなっちゃったんだよ!」

逃走中、計画用に用意した盗難車が、何故か急に動かなくなってしまったらしい。エンジントラブルと思われるが原因は不明。梅咲たちは、やむを得ず立ち往生する車を乗り捨て、たまたま目に留まった、このファミレスへと逃げ込む羽目になった。

榎田衿那がいた、このファミレス内に。

——これも、私の原因か……。

強盗犯たちの醜い言い争いを虚ろな目で眺めつつ、衿那は一人冷静に思考する。

もはや、この程度の不幸で彼女の心が揺るぐことはない。目の前で飛び交う怒号を、どこか遠い出来事のように感じながら、ただ時が過ぎ去るのを彼女は待つのみだった。

「——う、うああああああん！」

そのとき、一際甲高い泣き声があった。

衿那が振り返ると、一箇所に集められた人質たちの中心で、小学生にも満たないであろう男の子が、顔をぐちゃぐちゃに泣きじやくっていた。

「うるせえぞ、ガキ！ 静かにしろ！」

「す、すみません。ほら、タケルちゃん、いい子だから泣き止んで！」

先ほど椅子を蹴飛ばした短気な男が、少年とその母親らしき女性に怒鳴り散らす。

女性は男の子を泣き止ませようと必死に宥めるが、少年はさらに大声で泣き続ける。

「この糞ガキつ——！」

収まりがつきそうにない子供の喚き声に、とうとう男の痺れが切れた。

人質たちが一斉に息を呑むも、苛立ちげに床を踏み鳴らす男の進路を、誰も阻むことなどできない。

「静かにしろ——って、言ってるんだろがあああつ？」

男は親子の目の前まで近づき——事も有ろうに、その拳銃の矛先を少年へと突きつけた。

——……!!

その光景を目に焼きつけた瞬間、衿那の心臓の鼓動が激しく高鳴る。自分の招いたかもしれない『不幸』に、今まさに奪われようとしている小さい命。

その男の子の姿が——土砂に飲まれていく弟の姿と重なる。

「——やめなさいよー」

気がつけば、衿那は立ち上がり叫んでいた。

強盗犯と人質、双方が驚いた表情で彼女を見ているが、正直彼女自身の胸中にも「何故？」という疑問があつた。抵抗する術などないだろうに。贖うことなど、止めた筈だというのに。

だが、それでも——衿那はその光景を、黙って見ていることなどできなかった。

「馬鹿じゃないの？ ガキの泣き声なんかにムキになつて！ アンタ、それでも男なの

！

「な、なんだと、てめえ！」

「だいたい何なのよ、アンタら！　こんな平日の真つ昼間から銀行強盗？　そんなことする暇があつたら、もつと建設的なことに時間を費やさないよね！　この暇人共！」

自分でも「何を言っているのだろう？」と後悔するが、既に手遅れだ。驚いた表情のまま固まっていた他の男たちまでもが、衿那へ怒りの視線を注ぎ始める。男たちの視線を一身に浴びながら、衿那は腹を括り、さらに捲し立てていく。

「それができないなら、せめて人様に迷惑かけないよう、家にでも引きこもりなさいよ！」

「おい、だまれよ……」

「もつとも、警察の厄介になれば嫌でも引きこもることになるわ。牢屋の中、でね！」

「黙りやがれ！　このクソアマが！」

「——っ！」

短気な男は衿那まで詰め寄り、彼女の頬を殴りつける。上唇が切れ、頬を真つ赤に染め、床に転がされながらも、衿那は最後までヤケクソ気味に吐き捨てる。

「……暴力に頼らなきや、女一人黙らせることもできないなんて……情けない男たち。アンタら、それでも男なの？　キン〇マちゃんについてんの？」

自分でも思わず笑ってしまいそうな安い挑発だが、強盗犯たちの意識をこちらに向けさせるには、十分すぎる言葉だったようだ。もはや彼らの目に、泣きじやくる男の子など映つてもいない。男たちの怒りの矛先は、完全に衿那に集中していたのだから。

「……ずいぶんと、舐めた口きいてくれるじゃないか」

それまで、終始無言であつた梅咲が衿那の眼前に立ちはだかる。

他の仲間たちのように、露骨に態度にこそしていないが、その瞳にはしつかりと、彼女への殺意を滾らせていた。

「そこまでの大口を叩くんだ。当然、覚悟はできているんだろうな？」

梅咲はゆつくりと、だが、確かの動作で黒光りする拳銃を衿那へと突きつける。

人質たちから、ざわめきと悲鳴が上がる。

——ああ……これで私もお終いか……。

——あつけないものね、人生なんて……。

だが男の子のときと違い、かえってこちらの方が他人事のように衿那には感じられた。

無機質な瞳で、黙つてその瞬間が来るのを、じつと待ち構える。

そして——耳をつんざくような破壊音が、彼女の耳に届いた。

しかしそれは、どう聞いても銃声とは全く別の音響。窓ガラスが硬質な音を立てて、

盛大にぶち破られる音であった。音の聞こえてきた方向へと視線を向ける衿那。強盗犯も人質たちも、誰もが揃って同じ方向へと目をやる。そして、その視線の先で彼らは

「——そこまでだ。痴れ者どもが……」

テーブルの上で仁王立ちした、少女——神宮寺鈴鹿の姿を目撃することになる。

◇

数分前のことであつた。

「——ん、なんだ？ 何やらあちらの方が騒がしいが、祭りでもやっておるのか？」

テツドの道案内に従いながら、鈴鹿は目を爛々と輝かせ、街中を歩いていた。

到着してすぐ、ざつと周囲を見回して、その雄大さを肌で感じ取ったばかりだったが、歩きながらだと、街の風景もまた違って見えてくる。様々な店が立ち並び、すれ違う人々が個性豊かな表情を見せる。足音を立てて歩く人々の雑踏のリズムを、街頭のいたる所から響く音響がさらに盛り上げる。旨そうな食い物の香りに混じり、ときおり鼻が曲がりそうな不快な匂いも香ってくるが、これはこれで新鮮な気分だった。

目新しいものを目にするたび、駆け寄って見てみたい誘惑に駆られるが、鈴鹿は何とか自制心を働かせる。

しかし道中、なにやら物々しい雰囲気の人々がとある建物を取り囲んでいる光景に、

とうとう好奇心が抑えられなくなる。誘蛾灯に誘われる虫のように、ふらふらと近づき、野次馬の列に加わった。

「だから、勝手にうろつかないで——つて……なんででしょう？」

慌てて鈴鹿を追いかけたテッドも、その空気に首を傾げる。彼は野次馬の一人に事情を聴き、その建物——ファミレス内に銀行強盗たちが逃げ込んだという話を聞いた。

「銀行……強盗……。おいテッドよ。銀行強盗とはなんだ？ 説明してみよー！」

鈴鹿はその言葉の意味がわからず、テッドに詳しい説明を求める。テッドは鈴鹿のため、ざっとではあるが、それがどのような行為であるかを解説する。

しかし——最後まで説明を聞き終える前に、鈴鹿は行動を起こしていた。

群衆の頭上を跳び越え、制止する警官隊を蹴り飛ばし。

そのまま、窓ガラスを蹴破り——彼女は騒ぎの中心点へと足を踏み入れたのだ。

◇

「……なんだ……お前？」

卓上に飛び散ったガラス片を、踏みつけながら店内に侵入してきた鈴鹿の存在に、梅咲は消え入りそうな声で問いかける。衿那相手に向けていた殺意も、怒気も、すっかり霧散してしまっていた。

それは鈴鹿の異様な風体を前に、誰もが抱いた戸惑いのせいだろう。目出し棒で顔を

覆い隠していた強盗犯たちから見ても、彼女の出立ちは奇抜なものだった。

長い黒髪のポニーテールに、全体的に黒を強調とした和風の衣装。

その服は着物のようでもあったが袖がなく、太ももを大きく露出していたが不思議といやらしさを感じさせない。色気を振りまくためより、動きやすさを考慮した格好のようだった。

首にはボロボロの布切れがマフラーのように巻かれ、手甲を装着し、草鞋わらじまで履いている。

まるで漫画やアニメ、一昔前の時代劇に登場する、くノ一が着ているような忍び装束だ。

この緊迫した状況下でその恰好は確実に浮いており、完全にフロアが静まり返る。

「お主らか？　銀行強盗とやらは？」

当の本人はそんな彼らの戸惑いを気にも留めず、卓上に立ったまま問いを投げる。

「……だったら、どうだってんだ、ああん？」

困惑から脱した強盗犯の一人が、何とか言葉を絞り出して回答する。するとその返事に、鈴鹿は表情を厳しく引き締め直し、腕を組み、堂々たる態度で己の用件を切り出した。

「知れたこと！　他者の財産を力ずくで自らのものとする主ぬしらの蛮行！　許容し難

いものがあるぞ！ 地獄の閻魔に代わり、今この場で、儂わし自らがお主らの罪を裁いてくれよう！」

カカン、と効果音でもつきそうな、歌舞伎役者顔負けの大見得切りに、店内の全員が沈黙する。鈴鹿のあまりに常識離れた態度には、強盗犯たちも怒りを通り越して呆れてしまっていた。

梅咲は、衿那に突きつけていた拳銃を下ろしながら、見せつけるように溜息をつく。

「……………最近の女子は、ずいぶんと威勢がいいもんだな……………おい！」

皮肉っぽく呟きながら、リーダーらしく仲間らに目で合図を送り、指示を受けた仲間の一人が領き、銃口を鈴鹿に突きつけながらゆっくりと彼女へと近づいていく。

「おら、こっちで大人してろ！ テーブルの上に立つんじゃねえ、さっさと降りねえ——」

現在進行形で銀行強盗などしておきながらも、やけに常識的のことを口にしながら、強盗犯がテーブルに立っている鈴鹿を無理やり引きずり下ろそうと、その足に手をかけようとし――

その男の体が――景気よく跳ねた。

「……………がつ!?!」

短い呻き声を上げ、男はそのまま空中で二回、三回と回転し、仰向けに倒れ伏す。

「!？」

男たちの間に緊張が走る。

倒れた男の顔面は血だらけ。齒も何本かへし折れるなど、見るも無残な有り様だった。そして、テーブルに立つた鈴鹿は、腕を組んだまま男を蹴り飛ばすために上げていた右足をゆつくりと下ろす。

「ふむ、確かに貴様の言うとおり……卓袱台ちゃぶだいに足をつけるのは、作法に反するもの……」

鈴鹿はテーブルからそつと飛び降り、毒気のない表情で倒れた男へと尋ねる。

「よつ、と……これでよいか？」

ピクピクと痙攣した男がその問いに答えられるわけもなく、代わりに、他の強盗犯たちが少女の相手をするようになるのだが——勿論、その方法が穩便に済む筈もない。

「——殺せええええつ！」

激昂する梅咲の叫びと共に、残りの男たちが一齐に鈴鹿へと銃口を突きつける。それまでの脅迫や威嚇とは違い、筒先からは濃厚な殺気が立ち上っている。

——あれは鉄砲か？ 御祖父様おじいさまに教わった物と、随分と形状が違うようだが？

しかし、男たちの膨れ上がった殺意にも、鈴鹿は全く動じない。彼らがこちらへと向

けた凶器。それに関する自分の知識を照らし合わせながら、余裕の表情で迎え撃つ。

男たちが放つ一斉射撃を放つ。

轟音と共に銃身から飛び出たその弾丸を、その瞳に映しながら、鈴鹿は首に巻いていた布切れに手をかけ、それを空中へと放り投げる。布切れは、男たちから彼女の姿を覆い隠すように広がり、高速で飛来する弾丸によって、蜂の巣となった。

だが、その先に鈴鹿の姿はない。

布を広げると同時に、彼女は天井すれすれまで跳躍していた。宙に舞った鈴鹿は、そのまま万有引力の法則に従い、一直線に落下していく。布の先にある筈の死体がないことに驚愕した男たちは、すぐに周囲を見渡す。男の一人が頭上から差す彼女の影に気づき、顔を上げてしまったのが運の尽き。

「がべえっ!?!」

鈴鹿はその男の顔面に着地。顔を踏まれた彼の体は、そのまま力なく倒れていく。さらに、彼女は倒れゆくその男の顔面に軸足を乗せながら、もう片方の足で両隣にいた男二人の面めがけ、華麗に回し蹴りを叩き込んでみせる。

「があっ!」「ぎやっ!」

似たような呻き声を上げ、吹き飛ばされる男たち。流れるような鮮やかな手際に、ほぼ同じタイミングで三人の男が沈黙する。

「なっ……!」

残りの一人、梅咲がその手並みに呆気に取られ立ち尽くす間にも、鈴鹿は次の動作に入っていた。倒した男たちを一瞥することもなく、最後の生き残りへと一直線に特攻。慌てて銃を構える梅咲だったが、それよりも早く鈴鹿は懐に入り込み、その腹めがけてアッパーカット気味のストレートを叩き込んだ。

「いったい、どれほどの力が込められていたのだろう？」

鈴鹿の拳の直撃を食らった梅咲は、まるで自動車に跳ね飛ばされたかのような勢いでぶっ飛び、後方のテーブルや椅子を巻き込みながら、盛大な音を立てて崩れ落ちていった。

◇

「な……なによ、こいつ？」

突如現れた謎の少女による、快刀乱麻を断つが如き、電光石火の活躍。衿那は叫び声を上げる暇すらなかった。

他の人質たちも呆気にとられ、歓声すら湧き上がらない。拳銃という名の絶対の凶器を持った男たちを、素手で制圧した彼女の手際に、誰もが二の句を継げられずにいたのだ。

「——す、すごい、すごいよ! お姉ちゃん! カッコイイ!」

整然と静まり返る店内で唯一、先ほどまで泣きじゃくっていた男の子だけが、浮かれた様子で少女の元まで駆け寄る。某特撮ヒーローのような活躍をした少女に目を輝かせ、純粋に喜びを、称賛を口にしていた。

「ふっ……かつこいいか。苦しゅうない！ 童わらしよ！ もつと褒め称えるがいい！」

その賛美に、謎の少女も満更でもない様子で偉そうにふんぞり返っている。

さらに少年は、目を輝かせながら「お姉ちゃん、ひよつとして忍者？」と、彼女の恰好に誰もが抱いた疑問をぶつけるが、それを駆け寄る母親が、「こらっ！」とたしなめていた。

「……あの、その……ありがとうございます」

母親は息子のように無邪気に喜ぶことができないのか、おつかなびつくりといった様子だ。

それでも、母親は謎の少女に頭を下げて礼を述べる。その場面だけを切り抜けば、実に微笑ましいやり取りに見えなくもない。次第に周囲の人々からも、緊迫した空気が抜けていく。

「た、助かった……のか？」

誰かの安堵の呟きに、それぞれ互いの無事を確認し合う人質たち。もつとも、一人で

入店していた衿那にはそんな相手などいはしない。居心地の悪さに落ち着きなく視線を外す。

そして——ふと、向けた視界の先で、衿那は目を見開く。

そこには、瀕死によるめきながらも、必死に起き上がろうとする梅咲の姿があった。

実はこの強盗犯たち、服の下に防弾チョッキを着用していたのだ。

念には念をと、リーダーである梅咲がわざわざ海外の専門店から取り寄せたもの。並みの打撃なら、むしろ少女の拳の方が破壊されてしかるべき代物なのだが、それを貫通し、梅咲に多大なるダメージを与えた少女の腕力は、なるほど凄まじい。

しかし、防護服でも防ぎようのない顔面をやられた他の男たちならいざ知らず、梅咲が殴られたのは腹部。苦しみに悶えながらも、彼は何とか意識を保とうと歯を食いしめる。

せめて自分たちの邪魔をした、憎き少女に一矢報いるべく、再び拳銃を握り締めて——。

「——危ない！」

衿那の必死な叫びは店内全体に轟き、彼女と同じく梅咲に気づいた人質からも悲鳴が上がる。

だが、何もかもが手遅れだった。

衿那が叫ぶのと、ほぼ同時に拳銃は火を吹く。飛来する弾丸は、衿那の警告に振り向いた少女の額に、吸い込まれるように引き寄せられ——
額の中心部に命中した。

「! あ……ああ……!」

そのまま体を傾け、倒れゆく少女を前に、衿那の瞳からは絶望の涙が滲み出る。

衿那はこれまで、数多くの不幸に晒されてきたが、不思議と人の死に目にあつたことは一度もない。

あるいは、自身の知らないところで彼女が招いた『不幸』によつて、命を落とした者もいたかも知れないが、少なくとも、彼女の目の届く範囲でそれはなかつた。

故に今、目の前で起きた悲劇に、途方もない罪悪感でいっぱいになる。

自分のせいで、一人の名も知らぬ少女が死ぬ。

何もかも捨て去つて、大切な人々のいない地へ来たのに、これでは何の意味もない。

永遠とも思える時間の中、衿那はただひたすら、後悔の念に苛まれ続けていた……いたのだが——

ダンツ、と地面から伝わってくる音と衝撃に、衿那の表情は固まる。

銃弾を受けた少女の顔は上を向いて仰け反つてはいたが、倒れるかと思つた体は、右足を前に踏み留まっていた。そして——少女はガバつと顔を上げ、梅咲に向かつて怒気

をばらんで言い放った。

「い、痛いではないかあああ!」

『……………はい?』

図らずも、その場にいた少女以外の全員の心が一つになった。

梅咲も、人質たちも、絶望のどん底に叩き落とされていた衿那でさえ、少女のありえない現状に目が点になっている。

「…………お、お前 な、な、な、な、なんで?」

発砲した当の本人である梅咲は狼狽する。「何故? 何で死なない?」。そんな疑問に包まれているであろう、彼の心中が手に取るように伝わってくる。

無論、それは衿那たちも同じ。「ひよつとして、銃弾は彼女に当たっていないなかったので?」と、何人が予想しただろう。

しかし、その考えを否定するかのようには、少女の額からポロリと、彼女の額に着弾して潰れた鉛の玉が床に転がり落ちる。

「……………」

梅咲も人質も、顎が外れたように口をあぐり。そんな彼らの唾然とする様に気付い

た様子もなく、少女はおでこをさすり、痛みに顔を顰めて、ぶつぶつと独り言を呟き始める。

「むむむ……まさか、鉄砲とやらにこれほどの威力があるとは……些か侮っていたぞ……当たり前によっては、確かにこれは致命傷になりかねんな……」

今まさに致命的な一撃を食らったという自覚もなく、呑気にそんなことを口にする少女。

だが次の瞬間、少女は不敵な笑みを浮かべるや、梅咲へと一気に間合いを詰めた。

「――へっ?」

未だに現状を理解しきれず固まっている梅咲が、その動きに反応できる筈もない。少女は彼の下顎めがけ、躊躇なく掌底を叩き込んだ。

「がひゃっ?」

下から打ち上げられるように放たれた一撃に、梅咲の体が跳ね上がる。首がもぎ取られるかのような衝撃に、彼は白目を剥き、完全にその意識を手放した。

「ふむ、少し慢心が過ぎたようだ。いい勉強になった、感謝するぞ! 名も知れぬ銀行強盗!」

床に転がる梅咲へ、何故か少女は礼を言いながら、今度は人質たちに目を向ける。

「さて……それでは儂は失礼させてもらう。これでも、先を急ぐ身の上なのでな!」

自分から首を突っ込んでおきながら、一方的にそう告げ、少女はその場で回れ右をする。再び窓ガラスを蹴破り、後ろを振り返ることもなく、その場を走り去っていった。

こうして、暴れたいだけ暴れ、嵐のように立ち去った謎の少女。

彼女と入れ替わるように突入してきた警官隊が、梅咲輝美率いる五人組の強盗犯たちを拘束、あえなく彼らは御用となった。

死者は0、負傷者が六人。その内の五人が被疑者だというおかしな内訳である。

唯一、強盗犯から暴行された櫛田衿那は、殴られた痛みを感じながらも、さらに自分の頬をつねり、これが夢かどうかを確認せずにはいられなかった。

「……………何だったのよ……………あの女……………」

九十九明という男

渋谷区 桜丘町

渋谷駅から南。かつては住宅街としての側面が強い立地であったが、1980年代に入る頃になってから、オフィスビルや飲食店などが多く建設され、商業化が一気に進んだ。

渋谷と聞くと『若者の街』、というイメージが大きいかもしれないが、ここ桜丘町では、落ち着いた雰囲気の大人たちが中心に行き交っている。

今は昼時という時間帯もあり、多くのビジネスマンがランチを取るため、周辺の飲食店を訪れていた。

この地区はその名にあるよう桜並木が有名であり、思い思いに寛ぐ彼らの視線も、自然と桜の木へと注がれている。幸運なことに、桜も今が満開の時期。毎年恒例のさくら祭りこそ終わってしまったが、それでも申し分なく桜は街の中で美しく映える。

坂道に並ぶ桜の木は、公園などの開けた場所で眺める桜と、また違った魅力に溢れ、街行く人々を、包み込んでくれるかのような優しさに満ちていた。

都会の喧騒に疲れた人々に一時の癒しを与える、まさに絶交のスポットであろう。

そんな桜丘町——そこに、一つの巨大高層ビルがそびえ立っている。

桜の外観を損なわないようにと、計算され尽くして設計されたその建物こそ、日本でも一、二を争う、世界でも有数の巨大総合商社——『森羅』の本拠地であった。

「……そろそろ、かな」

森羅ビルの最上階の一室。

ハンチング帽を目深く被ったスーツ姿の男——九十九^{つくもあきら}明は、前面ガラス張りの窓から外の景色を悠然と見下ろしている。

九十九は、森羅の『代表取締役会長』という立派な肩書を持つ人物だが、そんな役職に似つかわしくない、質素な彼の私室。部屋そのものの大きさはそれなりにある。だが、置かれている家具など、必要最低限な物に限られていた。書斎机と椅子、部屋の中央には来客用のソファアールとテーブル、その向かい側に、薄型の液晶テレビが一台置かれている程度。

そんな簡素な室内で、九十九は腕時計の指針に目をやりながら、客人の到来を一人静かに待ち続ける。

やがて、静寂な室内を震わす、木製の扉をノックする音が響き渡る。

「どいっしょ」

「……失礼します」

九十九が許可を出すと、彼の秘蔵つ子である双子の兄妹きょうだいの片割れ——妹のメリーがティーワゴンを引きながら入室してきた。兄であるテッドとそっくりな容姿。ワゴンの上には、お湯の入ったヤカんと、銀製のティーポット、白いカップを載せている。

メリーは能面を貼り付けたような無表情で、ワゴンを九十九の書斎机に横づけする。やかんの熱湯をティーポットへと注ぐと、湯気と共に紅茶の香りが広がっていく。そのまま暫く、茶葉を蒸らしてから、カップへと紅茶を注ぎ「……どうぞ」と、九十九へと差し出した。

九十九は「頂こう……」とカップへと手を伸ばす。ふわりと立ち上る湯気を眺め、香りを堪能しながら、優雅に口へと含み、その紅茶をじっくりと味わう。
 ややあつて、カップを机の上に置くと、九十九はそつと口を開いた。

「——45点」

「……………」

ピクツ、と九十九の下した辛辣な評価に、メリーのこめかみが引きつる。

「茶葉を蒸らすという基礎はできているようだが、この水、使っているのはミネラルウォーターだね？ 紅茶の場合は水道水の方が適している。お湯の温度もまだ少し温い。カップをあらかじめ暖めておけば、さらに長く美味しさを保てるだろう。それか

ら、銀製のポット。チョイスは悪くないが、君にはまだ早いかもしれない。ガラス製の方が『ジャンピング』しているかどうか一目瞭然だ。今度またお手本を見せてあげるから、そのときにでも——」

「……」不満があるのならば」

延々に続くかと思われた九十九のうんちくをメリーが途中で遮る。

無表情だった彼女の顔に僅かだが、苛立ちが浮かんでいるようにも見えた。

「……」自分でお淹れになればよろしいでしょう。……毎回毎回、何故私にそのような指示を出されるのですか……九十九さん」

丁寧な言葉遣いで不平を洩らすメリー。九十九はその反応を楽しむように、笑みを浮かべた。

「何事も経験だよ、メリー」

「……そのような経験、私のようなものには無用の長物だと思いますが……」

「メリー。この世に無駄なものなど何一つない。どんな些細な経験も、君の血となり肉となり、君のこれからの人生をより豊かに潤すんだ。それに、「そのような」などと言つてはいけないな。その言い方では、紅茶を生み出した者、茶葉を育てている者、そしてな何より、美味しく飲んでもらおうと、試行錯誤を重ねてきた者たちに対して失礼になつてしまうよ？」

「……………」

「昔は紅茶に限らず、お茶というものは大変貴重でね。イギリスでは、貴族などといった一部の上流階級の人間しか、口にすることができない飲み物だったんだ。それが……17世紀中頃だったかな？ 貴族や文化人の社交場となっていた、コーヒーハウスが次第に大衆化することで、ようやく一般家庭に普及するようになったんだよ。あのときは――」

「……………ふう」

実際にその時代を見てきたかのような口ぶりだが、そんな九十九のトリビアをメリーは右から左に聞き流す。正直、興味もない話題を延々と聞くだけというのも、なかなか苦痛だ。

無視して立ち去るといふ選択肢もあったが、一応それなりに礼儀を弁えているメリーは憂鬱な気分になりながらも、黙ってその場に留まっていた。

だが、その最中、無機質な電子音が鳴り響き、九十九の話を遮った。

「……………失礼」

短く相手に断りを入れ、メリーは懐から携帯電話を取り出す。

「……………はい。……………はい、はい」

彼女が電話に出ている間、九十九は『45点』と評したメリーの紅茶を優雅に楽しむ。

しかし、通話は一分と経たぬ内に切られ、メリーは素早く九十九の方へと向き直る。彼女は先ほども感じていたであろう、紅茶に対する評価への苛立ちも、長話への憂鬱も振り払い、電話相手からの要件を手短に九十九へと伝達した。

「……九十九さん。客人が到着されました」

◇

「やあ！ よく来てくれたね、鈴鹿君。待っていたよ！」

「うむ、お主も息災のようで何よりだ！ 九十九殿」

数分後。テッドが連れてきた客人——神宮寺鈴鹿と九十九は固く握手を交わす。九十九は嬉しそうに、自身よりだいぶ年下であろう、くノ一のような奇妙な恰好の鈴鹿を歓迎していた。

しかしそんな二人よりも、メリーが気になったのは、一緒に部屋に入ってきた兄の方だ。

鈴鹿を九十九の元へ連れてきたテッドは、部屋にたどり着くや、すぐにその場にへたり込んだ。全身から、全ラウンドを戦い抜いたボクサーが、真っ白に燃え尽きたかのような哀愁を漂わせている。そこに普段の軽快なノリはなく、メリーは思わず声をかけていた。

「……どうかしましたか、兄さん？」

「いや、なんでもないよ……ははは………はあ〜」

その問いに気にしないでと、手をひらひらと振りながらも、彼は乾いた笑みで溜息をつく。

その表情からは、九十九の『お使い』を無事に終えた達成感に疲労感、脱力感のようなものを同時に感じる。どうやら、鈴鹿を連れてくる道中、色々とあったらしい。

メリーは兄の苦労をなんとなく察し、そつとしておくことにして、視点を二人へと戻す。

挨拶を済ませた両者は、それぞれの定位置で腰を下ろしていた。

「おおー…この、そふぁーと言ったか？　なんとという座り心地だ！　まるで雲の上にいるような感触だわ、ふかふかだのう！　まあ、雲の上になど乗ったことはないが……」
鈴鹿は、来客用のソファアの感触が気に入ったのか、子供のようにその上で飛び跳ねる。お世辞にも、礼儀正しいとは呼べない客人の目に余る振る舞いに、メリーは眉を顰める。

「メリー、彼女にも紅茶を」

「……はい」

だが、九十九から散々な評価を受けた紅茶を出すように注文を受けたため、そちらの作業に集中する。

鈴鹿たちがこの部屋に訪れるまでの間に、湯を一から沸かし直し、ポットもガラス製に替えてきた。準備を終えたメリーは、ヤカンを高く持ち上げ、そこからポットへとお湯を注いでいく。これにより、お湯にはより多くの酸素が含まれ、茶葉の上下運動が促される。

この『ジャンピング』によつて、紅茶の旨みをより上手く引き出せるという話だ。

「ところで、里の皆は元気にしているかい？」

「ん？ ああ、無論だとも！ 特にこれといつて変わりはないぞ！」

「そうか、それは何よりだ。最近は忙しくて、なかなか顔を出せないものでね」

「そういえば、お主が最後に我らの里を訪れたのは、一年ほど前だったかのう……」

紅茶を待つ間、二人互いの近況などを報告し合っていた。

「……どうぞ、粗茶ですが」

「ん？ おお！ かたじけない！」

メリーは淹れ直した紅茶を、鈴鹿へ差し出す。軽く礼を言いながら、それを手に取る鈴鹿。

しかし、何の気もなく手に取ったカップの中身を飲もうとした瞬間、彼女は不思議そうに首を傾げ、カップに注がれた紅茶をまじまじと見つめていた。

毒などの異物混入を警戒している、というわけではないだろう。その緊張感の欠片も

ない表情は、ただ単純に見たこともないものを、好奇心から品定めする犬に近いものがあった。

スンスンと鼻をならし、紅茶の香りに頬を緩ませる。その香りをひととおり楽しんだと思いきや、鈴鹿は紅茶に口をつけ、一気に中身を飲み干し——その口から、率直な感想が述べられた。

「味……薄いもう……」

ピクツ、と再びメリーのこめかみが大きく引きつる。

「くくく……」

「ん？ どうした九十九殿。何かおかしいなことでも言っただかろう？」

「くくく、いや……何でもないよ。メリー、精進したまえ」

九十九が慰めるように声をかけたが、そんな彼の言葉に、メリーはそつぽを向いていた。

◇

その後、二人は鈴鹿のここでの暮らしについて、話し合いを行っていった。

鈴鹿の住まいはこのビルの一室に用意される。

というのも、この高層ビル。大半は会社の持ち物だが、このフロアを含めたいくつかの階層は、九十九個人の所有物件となっているのだ。

現在そこで生活しているのは、九十九と、その付き人的立場のテッドとメリーの双子だけ。部屋数そのものが結構余っている状態で、鈴鹿一人が増えようと、これといって問題は無い。

もつとも、新しい同居人を迎えるともなれば、それはそれで気苦労も増えるだろう。これからの苦労を想像してか、テッドの顔がどことなく青ざめているようにも見えた。

また、九十九は今後、鈴鹿に任せることになる『仕事』についても話をしていく。

彼の頼み方を見る限り、それはあくまで『依頼』という形になるのだが、鈴鹿はその願い事を快く承諾するのであった。

「——とここで……初めて間近で見たこの国の首都の感想はどうだい？　鈴鹿君」

そして、話がある程度煮詰まった頃、九十九は鈴鹿にその話題を振った。

「ん？　そうなのう……」

その問いかけに、鈴鹿は暫し腕を組んで考え込み、素直に答えを口にしていく。

「まあ、あらかじめ覚悟はしておいたが、すさまじいものだな、人の世というものは……」

「ほう？」

「天までと届くとも知れぬ塔、凄まじい馬力で走る鉄の箱、離れた相手と言葉を交わすことのできる摩訶不思議なる板まで。これまで見てきたどんなものとも違う！　どれも

これもが、比肩するものすら思い当たらぬものばかりよ！ いや、本当に驚かされたぞ
！」

幼い子供のように目を輝かせ、さらに彼女は続ける。

「何より食い物が上手い！ それだけで、ここまで来た甲斐があつたというものよ！」

「それは、それは……。気に入ってもらえたようだね」

旅の道中で口にしてきた食べ物を書いて出しているのか、涎を垂らしながら、大仰に手を振り上げて大喜び。鈴鹿の満足げな様子に、九十九も満足げに頷く。しかし――

「だが――どうにも不埒な輩が多すぎる……」

それまでとは打って変わり、底冷えするような声音で、鈴鹿は手で顔を覆い隠す。

テッドとメリーは不思議そうに互いの顔を見合わせ、彼女の次なる言葉を黙って待つのだが――そんな二人の背筋に、得も言われぬ寒気が走る。

「――っ！」「――っ！」

開かれた鈴鹿の瞳は、それまでとは別人なまでに鋭く、鋭利に細められている。

その双眸は双子に警戒心を抱かせるほど、強固な意志で塗り固められており、鈴鹿の放つ威圧感に咄嗟に呑まれかけた二人は、彼女から半歩下がることで態勢を立て直した。

「ほう………と云うとっ？」

彼女の放つ重圧に、九十九一人だけが全く恐れる様子を見せない。発言の意図を尋ねようと鈴鹿を正面に見据え、ゆったりと椅子に腰を預けていた。

「ここまでの旅の道中でもそうだったわ。下卑た輩が弱者をいたぶり、悦に浸る光景に何度も出くわしたわい。弱肉強食は世の常なれども、流星に目に余るものがあつたぞ」

そうして語られる、鈴鹿の旅先での『武勇伝』。

おばあさんのバッグを掠め取つたひつたくり犯をぶちのめしたり、女性にしつこく言い寄っていたチンピラを叩きのめしたり、喧嘩相手を執拗にリンチにしていた集団を文字通り吹き飛ばしたり、などなど。

一つ一つのエピソードが語られるたび、テッドの顔色がだんだんと悪くなっていくのは、鈴鹿の放つ威圧感だけが原因ではなかっただろう。

「つい先ほどもそうだった。この街にたどり着いて早々に、銀行強盗なる輩に遭遇したぞ。当然！ こいつらも儂がとちめてやったがのう！」

銀行強盗——その発言にテッドの顔色がさらに青白くなり、顔中にだらだらと汗を滲ませる。九十九は不意に、机の上に置いてあつたテレビのリモコンを手に取り、電源を入れた。

『次のニュースです……先ほどお伝えした銀行強盗事件の速報が届いております』

いかなる偶然か、テレビからその件のニュースを読み上げる、アナウンサーの声が流

れる。

『東京都内で発生した銀行強盗事件……その犯人たちが逃走中に逃げ込んだ、渋谷区の飲食店で起きた立てこもり。さきほど、犯人全員が拘束され、人質たち全員が無事開放されました』

原稿を読み上げる女性アナウンサーも、心なしか戸惑っているように映っている。

『ええ……警察が強行突入した時点で、既に強盗犯全員が気絶させられており、人質たちの話によれば、それが……一人の少女の手によるものであると判明して、おります』

アナウンサーがそこで言葉を切ると、一つの映像が流れ出す。

『……今流れている映像が、事件のあったファミレスを店外から撮影した映像です』

遠目から撮影されていたその映像の中に、犯人らしき男たち、うずくまっている人質。そして、真っ直ぐファミレスへと怒涛の勢いで駆け込んでいく、神宮寺鈴鹿のものと思われる後ろ姿が映し出されている。

『この映像の人物が、人質たちの話に出てきた少女と思われており、警察ではその少女と事件の関連について慎重に捜査を——』

「……………」

そこまでニュースを聞き終えたメリーは、テッドにジト目で視線を送り、テッドはそんなメリーから全力で目を逸らした。

「はははっ！ なるほど、なるほど！」

ニュースから読み取れる情報と、テッドの態度からある程度のごことは察したのか、九十九は愉快そうに大声を上げて笑い出す。

「到着早々、大活躍のようだね。鈴鹿君！」

「ふっ、ま……当然のことよ」

鈴鹿は胸を張って、己のしでかした所業を誇る。自分の行いがどれだけ常識外れで、世間を騒がせたのか、彼女は気にも留めていないようだった。

「しかし——」

だが九十九は、そこで一旦笑うのを止めると、瞬間的に顔から表情を消していた。

「君をここへ呼んだのは、そのような『俗事』を任せるためではない。あまり派手な騒ぎは控えてもらいたいものだ」

口調そのものは穏やかだが、彼の言葉には有無を言わさぬ、得体の知れない迫力があつた。

その佇まい、息遣い、声そのものの重み。全てが渾然一体となり、圧迫感となつて放たれる。

「心には留めておこう。だが……約束はできぬぞ」

九十九の苦言に対し、まったく怯むことなく、鈴鹿は強固な意志のまま真正面から切

り返す。

九十九のそれが部屋全体を静かに包み込む、身を震え上がらせる冷氣なら、鈴鹿のそれは肌を突き刺すような鋭い熱気だ。二つの緊張感が室内に充満し、テッドとメリーは揃って顔を強張らせる。ピリピリと緊張感を漂わせたまま、視線を交差させる両雄。

暫くして——九十九がパンと手を叩き、渴いた音でその場の全員の鼓膜を震わせる。

「いや……結構。わかってもらえればいいよ！」

笑みを浮かべ直した彼は、自らが一步下がる形で威圧感を引つ込め、それに習うよう、鈴鹿も己の意思を納める。テッドとメリーは緊張感から解放され、ほつと息をついた。

「この件に関しては、私の方で警察に手を回しておこう……いいかい テッド？」

「あ……はい……どうも」

テッドにそう告げ、それを最後にこれ以上、九十九がこの話を蒸し返すことはなかった。

しかし、話はまだ終わらない。飲みかけの紅茶に手を伸ばし、九十九は最後になるであろう、別の話題を振る。

「そうそう、一つ言い忘れていたんだが……」

「ん？ なんだ？ まだ何か小言でも——」

「平常時、特にこれといった用事がない間、君には高校に通ってもらうことになってい

る」

「入学の手続きは既にこちらの方で手配を……って、どうかしたかね？」

すると、それまで余裕の表情を浮かべていた鈴鹿が、まるで石像のように固まる。あきらかな動揺、心なしか若干、その肩が震えているようにも見える。

奇妙な間が一分間ほど続き、ようやく鈴鹿の口が開かれる。ゆつくりと首を動かす様子は、まるでねじ巻き人形のようにギギギ、とぎこちないものであった。

「のう、九十九殿よ……高校とは……所謂、寺子屋のようなものなのだろう？」

「まあ、そうだね。君には私が理事を務める私立校に入学してもらおう手筈になっている。君は確か、今年で十六だから、一年生として入学してもらいたいんだが、何か？」

「それは……どうしても……行かなくてはならぬものかのう？」

狼狽しながらも、何とか言葉を紡ぎ足すその様子からは、それまで感じられた威圧感も威風堂々とした態度も感じられない。借りてきた猫のように、おっかなびつくりとおどおどし始めてしまった彼女に、テッドもメリーも目をパチクリさせる。

「わ、僕は……一族を代表して、お主に受けた恩義に報いるため、使命を果たすためにここまで出向いただけで……何もそのような場所……わざわざ用意してもらわんでも――」

「鈴鹿君」

言い訳してみた鈴鹿の言葉に、九十九がピシヤリと待ったをかけた。

「それはできない相談だよ。君をここに招くにあたって『街の子供たちと同じ教育を受けさせる』と、村長と約束を交わしているんだ。破るわけにもいかないだろう？」

「そうだな……約束ならば護らねばなるまい……ならないのだが……」

なおも何かを言わんとする鈴鹿に、九十九はやれやれと溜息を溢す。

「君……相変わらず勉強は苦手かね？」

「いや、別にできないことはないのだが……性に合わんというか……何というか……」

まるで、親に無理矢理塾に通わされるのを嫌がる小学生のように、指をちよんちよんとくつつき合わせ、鈴鹿は『しどろもどろ君』になってしまっていた。

だが、約束という一言が利いたのか、決意のこもった瞳で彼女はソファから立ち上がる。

「……仕方あるまい。よし、腹は括ったぞ！ さっそく、その高校とやらに案内あないするがよい！」

「やる気になってくれたようで何よりだ。だが、入学式は明日だよ。それに案内の方も適任者に頼んであるから、今日はもうゆっくり休んで、旅の疲れを癒してくれ」

逸る気持ちの彼女を落ち着かせるよう、九十九はやんわりと告げる。覚悟を決め立ち

上がっただけに、拍子抜けした鈴鹿は前のめりにずっこけかけた。

「そ、それを先に言わんかい！」

「ははは、いや済まないね。メリー、鈴鹿君を部屋まで案内してくれ。部屋は君の隣だ」

「……………承知しました」

軽く謝つた後、九十九は後ろに控えていたメリーに、鈴鹿を案内するよう指示した。

新しい同居人が自分の隣人になる。メリーはその事実には戸惑うよう、一瞬返答に詰まっていたが、九十九の指示に応えるべく、鈴鹿を伴つて部屋を後にしていった。

◇

「——で、彼女はどうかだったかな、テッド？」

メリーが鈴鹿を連れて退室した後、九十九は部屋に残つたテッドに問う。当然、内容は鈴鹿に関して。ここまでの道中で一緒だったテッドに、率直な意見を求めた。

「どうもこうもないですよ。色々と無茶苦茶です。あの人は…………」

テッドは真つ先に愚痴を溢す。相当大変な目にあつたのか、うんざりとした様子で彼女との旅路での苦労話を口にしていく。

「ほんの少し目を離れた隙に消えたと思つたら…………食べ物に釣られるわ、迷子になるわ、不良を叩きのめしてるわ。正直、途中で何度か投げ出したくなりましたよ」

「それは、それは…………大変だったようだね」

愉快そうに口元を歪め、あっさりとした口調で、九十九はテッドへ労いの言葉をかける。

だが、すぐに真剣な顔つきに様変わりして問い直す。

「で、彼女の『実力』のほどを、君はどのように感じたかな？」

「……………正直、凄いと思いますよ」

テッドもまた、真剣な面持ちでそれに答えた。

「人並み外れた身体能力もそうですし。何ですか、あの無駄に頑丈な体は？ 既に電話で連絡したとは思いますが、彼女、ここにくる途中で何度か自動車と正面衝突したんですよ？」

それは鈴鹿が、まだ信号のルールを理解しきれずに起きた事故だったのだが。

「それなのに彼女は無傷。逆に運転手と車の方が重症で、その対応に時間を割かれました」

「なるほど……………到着が予定より遅れたのもそのためかい？」

「ええ、まあ。他にも色々……………さっきの銀行強盗のときもそうでしたね。あの人、銃弾を眉間にぶち込まれてピンピンしてましたよ。ちよつとは、痛がってたみたいだけ……………」

それは実際に目にしなければ、とても信じられない報告の連続だろう。もつとも、九

十九は特に驚いた様子もなく、テツドの報告に黙って耳を傾けている。

「でも……言ってしまえばそれだけですよ。彼女の力は……」

しかし、そこまで鈴鹿のことを語り終えたテツドは、少しだけトーンを落とし、やや躊躇いがちに辛辣な評価を口にしていった。

「彼女の『身体能力』、『頑強さ』、そして『怪力』。確かに目を見張るものがあります。ですがそれだけです。それ以外、特に突出した能力も技術ありません。わざわざ遠くからおいでになってもらう価値があの人にあるのか、少々疑問を感じますね」

「随分と不服そうだね、テツド」

「わざわざ十九さんが自分を迎えに行かせるもんですから、もつと凄いのを期待しました」

「例えば？」

「口から怪光線吐いたり、癒しの奇跡で傷を治したり、ありとあらゆる異能を無効化する右手を持つていたり……」

「……それは、君の願望だね」

愛読する漫画やラノベから拝借したであろう能力を期待するテツドに、多少呆れながらも、十九は決して、その言い分を頭ごなしに否定しようとはしなかった。

「確かに君の言うとおり、彼女の力はそれだけさ」

椅子から立ち上がり、ガラス張りの窓から眼下に広がる街を見下ろし、彼は言葉を紡ぐ。

「怪光線を吐けるわけでも、他者の怪我を癒せるわけでも、異能を無効化できる右手を持つているわけでもない。ゲームで例えるなら、彼女は基本パラメータだけがなくて、特技も魔法も使えない凡キャラ、といったところかな？」

「凡キャラ……」

「入力コマンドは『たたかう』と『ぼうぎよ』の二通りくらいだろうし。アイテムを上手に駆使して戦術を組み立てるのも、彼女には難しいだろう」

「……何気に酷いこと言いますね」

辛辣な表現に突っ込みを入れるテッドだが、そのツツコミをスルーして九十九の話は続く。

「だがね、テッド——それだけで十分なんだよ」

「……………」

「余計なオプシオンなど必要ない。ただ飛び抜けたステータスだけでも、彼女の恐ろしさを説くのに事足りる。電光石火の動き、いかなる武器も通さぬ肉体、岩をも砕く怪力。そういった、いつの時代も変わらぬ純粋な『力』の在りように、人々は恐れを抱く。そして、その不動の畏怖が、遙か昔から現代に至って、その『名』を後世に伝え続けた」

そして、視線を遠く、どこまでも広がる街全体へと向けるよう、彼は言うのであった。

「今を生きるこの国の人々の心にも、きつとその『名』が刻み込まれている筈だよ——」

新しい学園生活

早朝 渋谷区 刻印学院高校

とうとう、ここまで来てしまった。

今日から自分が通うことになる私立高校の校舎を見上げながら、私は立ち尽くす。

目を瞑り、ここに至るまでの道のりを、静かに思い返してみる。

両親は最後まで私の上京に反対し、地元の公立校に通わせようとしたが、自身の生活費をアルバイトで稼ぐことを条件に何とか説得。成績優秀者としても認められ、奨学金制度も受けられた。半年間、一心不乱になって勉学に励んだ苦勞が報われ、ほっと胸を撫でおろす。

だが、感傷に浸っている暇などない。ここからが本番なのだ。

もう一度、私は校舎を見上げ、決意を胸に校内へと踏み出す。

ここにきつと『彼女』もいる。私がおここにいと知つたら、彼女はどんな反応をするだろう？

戸惑うだろうか？ 怒るだろうか？ 悲しむだろうか？

しかし、それでも、私はここへ来なければならなかった。

たとえ拒絶されようと、彼女一人に絶望を押しつけたりなどしない。

◇ 今度こそ、私が彼女を——

刻印^{こくいん}学院^{がくいん}高校——通称、刻印高校は渋谷区神宮前にある、神道系の私立高だ。

神宮外苑の一角。東京の中心地にありながらも、都心から離れた閑静な空気が勉学に励むにはうってつけ。周囲には各種スポーツ施設も充実しており、運動部に力を入れる生徒にとつても最適な環境下にある。まさに『文武両道』を見事に体现する高校であろう。

教育機関としての偏差値レベルは中の上。神道系の高校ということもあり、伝統や歴史を重んじる傾向があるものの、決してそれだけに縛られず、理事長である九十九明なる人物の方針により、様々な最新機材や施設が積極的に取り入れられている。

髪を染める、ピアスをはめるなどといった行為こそ校則で禁止されてはいるが、それ以外は特別厳しい校風でもなく、学校全体が穏やかで、過ごしやすい雰囲気に含まれていた。

そして本日、刻印高校では新入生を歓迎する入学式が執り行われていた。

新入生たちの門出を祝う舞台。彼らの目には大なり小なりの差はあれども、これから始まる新生活への期待や、不安といった感情が見え隠れしている。

そんな中、何の感慨も感動もない。空虚な瞳で、榎田衿那は淡々と式に出席していた。入学式が終わり、指定されたクラスに着いてもそれは変わらず、窓際の席に静かに腰掛け、特に何を思うこともなく、漠然と外の景色を眺めている。

彼女自身、新しく始まる高校生活に期待することなど何一つない。それどころか、この先の人生そのものに希望すら持てずにいる。

なにせ、衿那にとってここは、『偶然適当に選んだ志望校』だ。

神道系の高校であるという事実を目を惹かれはしたが、だからといって今更、神頼みなどに縋るつもりは毛頭ない。所詮彼女にとって進学など、家族から不幸な自分を遠ざけるための、たんなる『口実』に過ぎなかったのだから。

「皆さん！ おはようございませう！」

そういつた衿那のもろもろの事情も、心境もお構いなしに、彼女の所属する一年A組の担任となる男性教師が、やかましい声で教室内に入ってくる。必要以上のデカイ音量に、何人かの生徒がうざったそうに軽く耳を塞いでいた。

「二年A組のクラス担任を受け持つことになった齊藤亮介だ。一年間よろしく！」

グツと親指を突き立ててくる暑苦しい姿に、クラス全体がシーンと静まり返る。

「どうした、元気がないぞ！ さては緊張しているな？ 新しい環境に不安を覚えるのは仕方ないかもしれんが……よし、緊張をほぐすために、軽く自己紹介でもしてもらおうか

な！」

初対面にもかかわらず、ぐいぐいと詰め寄ってくる担任の暑苦しいキャラ。

衿那を含め、大多数の生徒が早くもウンザリし始めるも、とりあえずは素直にその言葉に従い、順番にそれぞれ軽い自己紹介を行っていく。

淡々と行われる同級生たちの自己紹介。あつという間に、衿那の順番が回って来た。

「櫛田衿那です」

よろしくも言わず、名前だけを名乗り速攻で席に着く。彼女の態度に、クラスの何人かが不快そうに顔を歪めている。このHRが始まる前も、衿那に対し、興味本位に声をかけてきた同級生が何人かいたが、彼女はそれらを全て無視で押し通した。

その光景を見ていたためか、クラス全体から、やや冷ややかな視線を感じる。

険悪な雰囲気、担任の斉藤が「この子大丈夫かな？　ちやんとクラスに馴染めるかな？」といった、おせっかいな視線を送ってくるが、それすら衿那にとってどうでもよいことであつた。

友人など作る気もないし、クラスと馴染もうとも思わない。ひよつとしたら、今の自分の態度が気に入らず、ちよつかいを出してくる生徒もいるかもしれないが、どうせすぐにいいなくなるだろう。

自分の『不幸』を知れば、嫌でも――。

「よろしー！ これで全員だなー！」

やがて、最後に残った生徒も自己紹介を終え、齊藤は名簿に目を通し、クラス内を確認する。何度か名簿を見直し、教室内を見直し、怪訝そうな顔で再び名簿に目を落とす。

「あれ？ おかしいな……一人足りないぞ？」

その齊藤の呟きに答えるように——その少女は一年A組の教室へと襲来した。

「——たのもおー!!」

◇

勢いよく開かれた扉と、凜と響き渡る声に、クラス全員が何事かと目を向けた。扉の前に立っていたのは、自分たちと同じ刻印学院高校の制服を身に纏った少女である。

長い黒髪をポニーテールに結んだ、整った顔立ちにスラリと細いスタイル。身長160以上はあるだろう。その凜とした佇まいは、可愛いというより、カッコいいという言葉がしっくりくる。

彼女は、クラス中から向けられる奇異な視線をもともせず、実に堂々たる態度で教室に上がり込んできた。そして、教壇の前に立ち、そこから教室全体を好奇心な目で見回し、その口を開く。

「苦しゅうない。一同、面を上げよー！」

『……………』

クラス一同、全員が固まった。担任の暑苦しい挨拶に静まり返ったとき以上の、さらなる静寂がその場を支配する。

「……………え、えくと、きみ誰？」

誰もが彼女の奇想天外な発言に押し黙る中、担任としての責務を全うすべく、斉藤が率先して少女に話しかける。

「む、誰とは心外だのう。今日よりここで勉学に励むため、こうして馳せ参じたというのに」

「えっ？ ……ああ、ひよつとして君、うちのクラスの子？ ちようど一人足りないなつて、思ってたところなんだけど…………」

「うむ、ここが『えーぐみ』とやらで間違いないのであれば、儂の事で相違ない」

その少女の答えに、クラス中から安堵の溜息が漏れる。乱入者が正体不明な人間ではなく、自分たちのクラスメイトであることがわかり、皆がほつとする。だが、風変わりなことに変わりはなく、その女子に対する何とも言えない奇妙な空気が、教室内に漂い続けていた。

「——ああ、良かった！ ちゃんと自分のクラス、見つけられたみたいね！」

そこへ、新たな乱入者の声が響き渡った。少女が開きっぱなしにしていた扉から顔を覗かせ、その女性は教室に足を踏み入れる。

白衣を身に纏う、さらさらと清流のように綺麗な黒髪に、黒縁の眼鏡の美女。美しく整った容貌には微笑が浮かべられており、その知的で妖艶な美貌は、高校生の少女たちには放つことができないであろう、色気を纏っている。男子どころか女子生徒までもが数人、うつとりするように頬を朱に染める。

「星野先生？」

「どうやら同僚らしい。斉藤は少し驚いていたが、特に慌てる様子もなく応対する。

「どうかされましたか？ わざわざ一年の教室まで……保健室の説明ならこの後でも

……」

「いいいえ、そういうつもりはなかったんですけど。まあ、せっかくだから新生に挨拶でもさせてもらいましょかね」

「そう言うと、女性は生徒たちの方を向き、軽く自己紹介を始めた。

「新生の皆さん、入学おめでとう。当校の養護教諭を担当させてもらっている、ほしのりかこ星野梨花子と言います。これから三年間、どうぞよろしくお願いしますね！」

「つこりと微笑み、軽くウインクする養護教諭——星野梨花子。そんな彼女の仕草に、男女問わずさらに数人の生徒たちの頬が火照っていく。

「ふっ！ やるではないか梨花子よ。実に堂々たる見事な名乗りだ。僕も負けてはおれぬ！」

その挨拶をずっと隣で聞いていた少女は、既に梨花子と顔合わせを済ませた後らしい。偉そうに腕を組みながら、何故か對抗心らしきものを滾らせ、まるで張り合うかのように梨花子よりも一步前に躍り出て、声を張り上げた。

「——遠からんものは音に聞け！ 近くば寄つて儂を見よ！ 我が名は神宮寺、神宮寺鈴鹿である！ 今日よりこの地で、お主らと共に肩を並べて勉強に励むことと相成つた

！ 未熟ゆえ、色々と至らぬところもあるかもしれぬが、以後、宜しく頼むぞ！」

先刻以上の沈黙が、教室内を包み込む。もつとも、当の本人はそんな空気など何のその。威風堂々たる態度で胸を張り、梨花子に対し、何故か勝ち誇つたように自信満々の顔を向けていた。

一瞬の間を置いて、梨花子一人だけが、パチパチと乾いた拍手を響かせる。

「さてと……それじゃあ、私はもう行くから。齊藤先生、後はよろしくお願いしますね」
「……え？ あ、ちよ、ちよつと！」

そして、もう用が済んだのか。梨花子はそそくさと、その場を立ち去つてしまう。慌てて彼女を呼び止めようとした齊藤の手が、むなしく空を切る。

「……………ええくと、神宮寺さん？」

数秒後。なんとか態勢を立て直した齊藤が、恐る恐ると鈴鹿に声をかける。

「鈴鹿で構わんよ。で、お主は？」

「ああ、齊藤です。一年間このA組のクラス担任になる齊藤亮介。よろしく、神宮寺さん」

最初の熱血的な印象から一変、多少動揺しながらも、冷静な対応に一同が感嘆の声を溢す。生徒たちの中で、担任の評価が多少、上方修正された。

「ええと……それじゃあ、神宮寺さんも席について下さい。君の席は……」

齊藤はそこで一旦鈴鹿から視線を外し、クラス内を見回して彼女の座る席を探す。だが、大半の席が既に埋まっている中、その場所も限られてくる。

齊藤はピタリと一点、窓際の後方に空いている席を見つけて指し示した。

「あそこの席が空いているようだね。とりあえず座ってください」

「うむそうか、では」

そして、鈴鹿は齊藤に言われたとおり、ゆっくりとその席を目指して歩いていく。

◇

——勘弁してよ……。

こちらに向かってくる神宮寺鈴鹿を視界に捉えながら、衿那は心中で頭を抱える。齊藤が指し示した席は後方の窓際、ちょうど衿那の隣の席であった。

本来ならそんな優良物件、早々に埋まってもおかしくはないのだが、衿那が無意識に放っていた「誰も近付くな」的な空気に、自然と他のクラスメイトが避けていた席

だった。

衿那としては、できることなら鈴鹿にも別の席に行ってもらいたいところだが、生憎と他に空いている席などなく、何の因果が、彼女をこちらに呼び寄せるはめになってしまった。

「よろしく頼むぞ、娘よー！」

鈴鹿は自分の席にたどり着くや、実に騒々しい音量で隣席の衿那へと声をかけてくる。そんな彼女からの視線を全力で逃れ、窓の向こうへと衿那はそっぽを向く。背中からは滝のように汗が流れ、動揺で心臓の鼓動は大きく、忙しく脈打つ。

そう、衿那は既にこの少女——神宮寺鈴鹿と面識を持っていた。

彼女が教室に入ってきた瞬間から、美人な養護教諭など目にも入らず、ずっと意識を鈴鹿から離せずにいた。

服装こそまともにはなっているが間違いない。昨日の事件の際に、単身素手で強盗犯をぶちのめした例の少女だ。もう二度と会うこともないと思っていた。

衿那は、何とか関わり合いになるまいと、思いつき顔を逸らすことで、この場を乗り切ろうとする。

しかし、現実是非常であった。

「おっ？ お主……どこかで見た顔だのう」

逸らされた顔をまじまじと覗き込み、やがて鈴鹿も思い出したのか、手をポンと叩いた。

「おお！ そうだ確か、昨日の銀行強盗のときにいた！」

「……………」

あれから数分。生徒たちは斎藤から、明日以降の予定を説明される。だが、衿那は担任の話に集中することができずにいた。原因は——先ほどから感じる、無遠慮な視線である。

「じゅ……………」

席に着いてからというもの、隣の席の鈴鹿がジロジロと。担任の話に耳も貸さず、目もくれず、ただ一心に衿那のことだけを見つめてくるのだ。

——なんで、こっち見てんのよ！

敵意や悪意を感じる視線ではなかったが、衿那は怒りに近い戸惑いの声を心中で上げる。

あのとき、鈴鹿が現場に突入してから、衿那は特に目立った活躍はしていない。

強盗たちを一人で鎮圧した鈴鹿を、自分や他の人質たちが物珍しげに見るならまだしも、ただの人質でしかなかった自分が、鈴鹿から好奇心な目で見られる理由など、まるで思い当たらない。

「——というわけで、今日のHRはこれで終わりです」

と、そんな気が気ではない、ハラハラとした気持ちでいる間にも、斉藤が話を終えた。「じゃあ、また明日！」と皆に笑顔で手を振りながら、部屋を後にする。

担任が去ったクラス内に、HRが始まる前のワイワイとした活気が満ちてくる。

大半の生徒たちが中学時代からの仲間、あるいは気の合うもの同士で、その場に就つてそれぞれ雑談を始めるが、話す相手などいない衿那は即座に荷物をまとめ、帰り支度を整える。

一刻も早くこの場から立ち去り、鈴鹿の居心地悪い視線から逃れようとするために。

「——おい、お主」

しかし——よりもよって、その当の本人から呼び止められてしまった。

「……なによ」

動揺しながらも、そんな弱気を表に出さないよう、衿那は冷たい眼差しを鈴鹿へと向ける。彼女が返事をしたのを見届け、鈴鹿は少しもつたいぶつた調子で口を開いていた。

「うむ、少し話があるのだが、顔を貸してはくれぬか？」

◇

刻印学院高校 昼 グラウンド

新入生を歓迎する入学式が終わり、間もなく正午を迎えようとしていた頃。刻印学院高校の本校舎の外壁では、ちよつとした改装工事が行われていた。

本来であれば、入学式を迎える前に全て終わる予定だったのだが、いくつかの手違いが重なり、工事の延期が続き、今日まで持ち越されることとなった。作業のための仮設足場では、現在は誰も作業をしておらず、作業員たちはちようど地に腰をおろし昼食を取っていた。

彼らの視線の先。本校舎との間をフェンスで挟んだグラウンド内では野球部、サッカー部、陸上部などの面々が、それぞれ部活動に励み、青春の汗を流していた。どの部活も実に熱心に活動しているが、とりわけ目を惹くのが野球部だろう。

刻印学院高校野球部は東京都内でも、かなりの強豪としてその名が知られているが、毎回惜しいところで甲子園出場を逃すという、悲運が常に付きまとっていた。

しかし、今年の彼らに希望の星と呼ぶべき人物がいる。

「ナイスバッティン！ 今日も張り切ってるね、たつや！」

「当たり前だぜ！ ここで新入生にいいとこ見せて、有望な新入部員をどんどん勧誘するぜ！」

バッターボックスでバッティング練習に精を出している少年——たつや。

エースで四番を背負う男。そのずば抜けた投球センス、バッティングセンスは、未だ

二年生でありながらも、卒業後プロ確実と言われるほどの逸材である。

一年生の頃は当時の監督、三年生と馬が合わず日陰に追いやられていたが、監督が変わり、嫌味な上級生たちも卒業したため、こうして表舞台で活躍するチャンスが巡ってきた。

「今年こそ、俺がこの野球部を……みなみを甲子園に連れて行ってやるぜ！」

たつやは野球部のマネージャー、恋人のみなみと一緒に甲子園に行こうと約束を交わした。今日も彼女への想いと、野球への情熱を胸に、ひたむきに練習に取り組んでいく。打撃投手の投げた球を、軽々と向かい側——校舎のあるフェンスまで景気よくかつ飛ばす。

「おいおい、逸る気持ちはわかるが、あまり遠くまで飛ばすなよ」

そんな調子よく球を飛ばすたつやに、キャッチャーが冗談まじりに声をかけていた。

「ギャラリーにでも当たったりしたら大変だからな」

◇

「——で……話って何よ？」

時を同じくした、本校舎側の一画。昼食をとっている作業員や、部活動を見学している生徒たちの輪とも少し離れた場所で、神宮寺鈴鹿と櫛田衿那は剣呑な空気で睨みあっていた。

もつとも、剣呑な空気を出しているのは衿那だけであり、鈴鹿の方はそんな相手の敵意など、どこ吹く風と軽く受け流している。

「そう怯えるな、娘よ。心配せんでも、別にとつて食ったりなどせんわい」

「べ、べつに怯えてなんかないわよ！」

衿那は咄嗟に虚勢を張るが、彼女の心には鈴鹿への、拭えない恐怖心が確かにあつた。銃弾を額に受けても死ななかつた、得体の知れないこの少女への恐れが――。

今すぐにもここから立ち去りたいが、ここで逃げたところで、どうせ明日になれば嫌でも顔を突き合わせるのだ。衿那は観念して、鈴鹿の要求に応じるしかなかった。

教室内で話すと不都合があるらしい。鈴鹿の方から、どこか人気のない場へ移ろうと提案された。

二人つきりでは危険かもしれないと判断した衿那は、ある程度人目のあるポイントとして、ここを選んだ。話を盗み聞きする者こそいないが、ここなら鈴鹿が何かおかしな行動に走ろうとも誰かの目に留まる。一応の安全は確保されている……筈だ。

「なに？ 怯えておらんだと。馬鹿な！ この儂を前にして恐怖を感じていないとぬかすか！」

「……」

「ふむ、やはりこの制服とやらいかんのか？ このような俗な恰好では、儂の威厳を伝

えきることでもできまい。『すかーと』とか言ったか？ ヒラヒラと動きづらくてかなわんわい。やはり着替えるか？ しかし、あまり目立つわけにもいかんし……」

「……………はあ」

先ほどの衿那の虚勢の言葉に、鈴鹿は何を悩んでいるのか、ぶつぶつと一人呟く。なかなか本題に入らず、黙って鈴鹿が用件を切り出すのを待っていた衿那も、流石に痺れを切らし、彼女は苛立ちげに啖呵を切った。

「ちよつと……話が あるなら早くしてくんない？ 私だつて暇じゃないんだから！」

「ん？ ……おお、済まんな！」

特に悪びれもせず軽く頭を下げる鈴鹿。コホンと、咳払いを一つ、場の空気を入れ替える。

「いや、なに、話というのは他でもない。昨日の『ふあみれす』とやらでの一件だ」

「……………」

「儂自身、己の行動に一片の悔いも後悔もないのだが……昨日、九十九殿にあまり派手な騒ぎは控えるように言われてしまつてな。あの方に迷惑をかけるのは本意ではない。これ以上騒ぎを大きくくしないためにも、昨日見聞きしたことは、他言無用で頼みたいのだ！」

「……………ふうん」

このとおりだと、手を合わせて頼み込んでくるその姿に、衿那は多少拍子抜けする。何かもつと「口封じだ！」などと、やばい行動に走ると思っていたが、どうやら鈴鹿の言う九十九という人物は、彼女とは違い、比較的常識人であることがわかり安心する。鈴鹿の頼みを聞くなど、衿那にとつて大した手間でもない。誰にも話すつもりなどなかったし、話したところであんな骨董無形な話、普通は信じない。そもそも、この街で気軽に世間話をする友達などいないのだ。鈴鹿がわざわざこんなことを自分に頼んでくること自体、あまり意味のない行動であった。

——でも、いい機会かもね……。

無視して立ち去ろうかとも思ったが、ここで衿那にとある考えが浮かび上がる。

これから始める学園生活を無難に送るため、鈴鹿の頼みを聞くことを引き換えに、こちらからも前もつて頼んでおくのも、悪くないかもしれない。

この手の騒がしい輩は、最初の内から予防線を張っておかないと、今後も馴れ馴れしく絡んでくる可能性が高いのだ。今のうちに意思表示を示しておくべきだと、衿那は己の決意を固める。

「いいわよ。その頼み、聞いてあげても……」

「本当か！ いや、助かる。感謝するぞ！」

「ただし！ ……一つだけ、条件があるわ」

「条件？ ああ、かまわんぞ！ 何なりと申しつけてみるがよい！」

満面の笑みを浮かべる鈴鹿。そんな彼女へ、衿那はその条件を突きつけた。

明確な拒絶の意思を込め、はつきりと――。

「――今後、私に気安く話しかけたり、近づいたりしないでちょうだい！」

数秒間――時が止まったように感じられた。

鈴鹿は何を言われたのか理解が追いつかず、ポカーンとしている。

「……じゃ、そういうわけだから」

鈴鹿の答えを待つことなく、その場を立ち去るために衿那は歩き出す。

――これでいい。

胸の奥がチクリと痛んだ気がしたが、きつと気のせいだ。もとからこういう騒がしいタイプの人間は苦手だ。早々に縁が切れて清々する。

――これでいい。

仮に彼女と親しく馴れたとしても、どうせ長くは続かない。自身の不幸を知れば、自ずと離れていくだろう。

――これでいい。

知人など要らない、友達など要らない。自分は一人で生きていく、生きていくしかないのだ。

——これで……。

「——衿ちゃん!!」

そう自分を納得させるため、悶々と思考する衿那の背中を、女の子の叫びが呼び止めた。その声は衿那にとって、とても聞き慣れた懐かしい声であり、聞きたくない声でもあった。

驚きで振り返る衿那。

向かい合っていた鈴鹿の後ろから、その声の主が笑顔で手を振りながら駆け寄ってくる。衿那にはそれが誰なのか、瞬時に理解できてしまった。

「はあ、はあ……ようやく……会えたね……衿、ちゃん」

急いで駆けつけたせい、息を切らせながら少し気まずそうに、それでいて、とても嬉しそうに衿那に微笑みかける女の子。昔と変わらぬその笑顔に、衿那は愕然と呟いた。

「……なんで……アンタがここに……みこと……命」

傷つき迷える少女たち

比佐命——鈴鹿や衿那と同じく、今年から刻印に入学してきた一年生。

長い髪は三つ編みに編まれ、目がパツチリとしており、どこか愛嬌があるも気弱さや、内気さが前面から伝わってくるため、まるで小動物のような印象を受ける、か弱そうな女の子だ。

命は、櫛田衿那の親友だった少女だ。

衿那の不幸が始まってから今日まで、多くの人々が彼女から遠ざかって行つた。そんな中、ただ一人。家族以外で彼女の側に居続けた友人。どんな不幸を目の当たりにしようとも、最後まで衿那を支え続けようとしてくれた親友。衿那自身が弟のときのように、自身の不幸に巻き込まれまいと遠ざけた少女。

一方的に縁を切り、離別した筈のその彼女が、衿那の前に姿を現したのだ。

——衿ちゃん、また少しやつれたかな……。

命は親友である衿那と顔を合わせたのが、ちょうど半年前が最後だったことを思い返

す。

二人は同い年の友人であったが、お互い通っていた小中学校は別々だった。それでも二人は出会いを重ね、友好を深め、気がつけば親友同士となっていた。しかし——
「なんでここにいんのよ、アンタは!!」

衿那が自分を見て青ざめるその反応に、命の気持ち沈む。

互いに笑い合っていた、あの懐かしい日々も遠い過去のもの。衿那はあきらかに自分の存在を歓迎してはいなかった。だがそれでも、命はめげずに衿那に微笑みかける。

「……驚いた? 私も刻印、受験したんだ……衿ちゃんと同じ学校に通いたくて……」

衿那に一方的な別れを告げられた後だ。命は衿那の両親に、親友が志望しているという高校を教してもらい、彼女に内緒で試験を受け、合格を果たしていた。

全ては彼女と同じ学校に通うため、彼女の隣に立つため。

「——んで……なんで、アンタは……!」

命の答えは聞いて、衿那が泣きそうな表情になった気がしたが、それも一瞬——

直ぐに表情を険しく引き締め直し、見下すような冷ややかな目をこちらに向けてきた。
「ふん……馬鹿じゃないの?」

「……」

「私と同じ学校に通いたかったあ？ そんな理由で志望校決めるなんて、一人じゃ何にもできない甘ったれたガキの思考よ、そんなの！」

「……」

「それに……よく刻印なんて受験する気になつたわね？ ここ、まがりなりにも私立高よ。アンタみたいな貧乏家庭に、ここの馬鹿高い学費が払えるとは思えないけど！」

「——っ！」

衿那の放つたその言葉は、命の胸に突き刺さる。

確かに、彼女の家はとても裕福とは言えない。上流家庭とも呼べる衿那の家に比べると、その差は歴然としていだろう。だが、そんなあからさまな挑発にも耐え、命は言葉を絞り出す。

「だ、大丈夫だよ……特待生制度に受かつて、基本的な授業料は免除になつたから」
「あつそ……それがアンタの取り柄よね。運動音痴で机にしがみつくと以外、能がないもんね！」

再度、心無い罵倒を浴びせてくる衿那。きつと彼女たちの関係を知らない者が見れば、衿那が命を一方的になじっているだけにしか見えないだろう。

しかし、命にはわかつていた。

彼女の誹謗中傷は決して本心からのものではない。自分の『不幸』から遠ざけようと、

自分に愛想を尽かせようとしている、演技に過ぎないと。

だからこそ、命は余計に悲しくなってくる。こんなことを言わなくてはならないほど、追い詰められている衿那の心情に、悔しさが込み上げてくるのだ。

「私はね……そんなアンタの相手をするのが疲れたの！ もう飽きたの！ だから……消えてくれないかしら？ 私の前から……今すぐに！」

最後の言葉はもはや悲鳴に近かった。それはきつと、自分の前から立ち去って欲しいという、衿那の心からの願いがこもっているからだ。だがここで引くなどできない。もうこれ以上、彼女を独りぼつちになど、させたくはなかった。

「衿ちゃん……私は！」

その想いを、その願いを今度こそ彼女へ。そう覚悟を決め、命は叫ぼうとし——
「——待てい!!」

無粋な乱入者が二人の間に割って入ってくる。

「!?」

先刻まで、衿那と何事かを話していた命の知らぬ少女が、突然大声を上げたのだ。まさかこのタイミングで、横槍が入ってくるとは思ってもなかったため、二人は驚いてその少女へと視線を向ける。少女は、どこかご立腹といった様子で命を睨みつけた。

「小娘……お主が何者か知らぬが、まだ儂とこやつとの話しが終わっておらんぞ！ 火

急の用でないのならば、儂の話が終わるまで控えておれ！」

「…………え、え？」

まさかの少女の発言に、命は言葉を失う。二人の間に飛び交う会話や空気を察すれば、むしろ控えるべきが誰なのか、自然とわかる様なもの。なのに、少女はそんな二人の重苦しい空気を払うように、ずかずかと干渉してきた。

「…………いや、アンタとの話なんてもう終わってるし、とつとと帰りなさいよ、バカ！」
「なにおう…………って、誰が馬鹿だ！」

「アンタよ、アンタ」

そんな、空気の読めない少女を衿那が罵倒する。その言葉に、さらに気を悪くした少女は衿那に詰め寄る。衿那は衿那で少女に対し、たじろぎながらも負けずと喧嘩腰に睨み返した。

「ちよ、ちよつと二人とも、少し落ち着いて…………」

険悪なムード。何とかその場を収めようと、命は二人へ声をかけようとし――

「――危ない、上っ!!」

誰かの叫び声が響き渡った。その声の導きに従い、命は空を見上げると――

いくつもの鉄骨が、衿那と少女の頭上から降り注いでいる光景を目の当たりにする。

「！に、逃げてえええ!!」

命は二人に向かつて叫ぶが、間に合わない。野球部のエースたつやが打った球の直撃を受けて、工事現場の仮設足場が崩れて落下する。そんな冗談のような大参事が、命のすぐ目の前で展開されてしまったのだ。

榎田衿那の、呼び寄せた『不幸』によって。

「むっ!」

二人のうち、いち早く迫りくる鉄骨に気づいた見知らぬ少女の方が、咄嗟に己を盾にするように衿那を庇う。迫りくる無数の鉄骨。その全てを一人、その身で受け止める。誰もがそんな彼女の行動に息を呑み、彼女の壮絶な苦痛を想像したことだろう。

「……………おい、無事か?」

しかし予想に反し、少女は平然としていた。自身が庇った衿那の安否を気遣う余裕すら持ち合わせており、「よっこい、しよっ!」と肩に背負っている鉄骨を軽く払いのけ、「さて……………どこまで話したかのう?」などと、何事もなかったように会話を続けようときえしている。

「……………は!」

暫しの間、そんな少女に呆気にとられる命。だが、すぐに我を取り戻し、自分と同じ

ように呆然自失とし、動けないでいる親友へと駆け寄ろうとする。

「衿ちゃん、大丈夫——」

「来るな!!」

だが、衿那の悲鳴とも呼べるその叫びに、命の足が止まってしまった。

「誰も……! 私に近づくな!!」

「あつ——」

助けてくれた少女に礼を言うこともなく、衿那は逃げるようにその場を立ち去ってしまふ。

命は衿那に手を伸ばすも、その背中を呼び止めることも、追いかけることもできなかった。

——衿ちゃん……泣いてた……。

彼女は衿那の瞳に涙が浮かべられていた事実には驚き、動けずにいた。

命が知る限り、衿那が人前で涙を流したことなど一度もない。不幸が始まった頃も、多くの人が自分から離れても、弟が意識不明の重体で運ばれても。衿那は命の前では虚勢を張り、決して弱音を吐こうとはしなかった。そんな彼女が泣いていた。その事実が、少なからず命に衝撃を与え、彼女に二の足を踏ませてしまったのだ。

——もう、あまり時間はないのかもしれない……。

半年間会わない間にも、彼女の『不幸』はより一層激しさを増していた。先ほどは運よく助かったが、このまま行けばいずれ――

――だめ！ そんな弱気になっちゃ!!

衿那に訪れるかもしれない不吉な未来を思い浮かべ、あわてて首を振る。そんな最悪の未来を避けるため、親友を護るため、自分は彼女の後を追ってきたのだと。命は弱気な考えに陥った自分自身を奮い立たせるよう、両手でバチンと頬を叩いた。

「――お、おい。きみ……大丈夫か？」

そうして、決意を新たに衿那の後を追おうとした命の足が、野太い男の声で止まる。工事現場の作業員と思われる男が、あの少女に声をかけていたのだ。

「……………ん？ ああ、大事ない……………」

少女は舞い上がった土煙の汚れを払いながら、その言葉にどこか上の空で返事をする。彼女が自分と同じ、衿那が立ち去った方向を見ていたのに気づき、命はハツとなる。――この人、衿ちゃんを庇って……………くれたんだよね……………。

そんな彼女に、一言も告げずに去るのは何か違うなど感じ、命は少女へと近づいた。

「あの……………」

「ん？ なんだ、何か儂に用か？」

「ありがとうございます……………衿ちゃんを助けてくれて……………」

「ふん、礼など不要だ。この程度のことだ」

少女は命の感謝を軽く受け流すが、そこに彼女に声をかけた男性が会話に入ってくる。

「この程度って……もろに鉄骨がぶち当たってたけど……ホントに大丈夫なのか？」

「問題ない。こんなもの一つや二つ。何度でも受け止めてやるわ」

「……頭とか打ってないだろうな？　ちよつと医者に見てもらったほうが……」

「必要ない」

「いや……こういうのは後からくるもんだし……方が何かあったら……」

仮設足場が崩れた時点で方が一も何もないのだが、男は尚も食い下がる。純粹に少女を心配しているのか、これ以上被害を増やし、現場の人間として責任を追求されるのが嫌なのかは定かではないが、男の言わんとしていることは命にも理解できた。

昔のニュースで野球の試合中、ピッチャーの球がバッターの頭部に直撃し、死亡したという話を聞いたことがある。最初は平気そうな顔で試合を続けていたが、試合後、何時間か後になって急死したという、かなりショッキングな内容だ。

命は少女の手を取り、強く申し出ていた。

「行きましょう、病院！　何かあってからじゃ遅いんです。さあ、早く！」

「いや、必要ないと言ったではないか？」

「でも！ このまま放っておいて、取り返しのつかないことになったらー！」

せめて少女自身からではなく、公平な第三者の口から、大丈夫という言葉を聞きたかった。どうしようかと頭を悩ませていると、二人のいざこぎを見ていた男が提案する。

「なら、保健室の先生にでも診てもらえばいい。まあ、何もしないよりはマシだろう」

「そうですね！ そうしましょう！」

その妥協案に、命は大きく首を頷かせる。少女もしぶしぶといった顔をしながらも、その首を縦に振った。

「うむ……そこまで言うのなら仕方がない。では——」

◇

数分後 刻印学院高校 保健室

「それで、私のところまで来たってわけね……」

養護教諭として保健室で待機していた星野梨花子は、二人の女生徒、鈴鹿と命がここまで来るに至った経緯を聞き終え、軽く息を吐く。唐突な訪問客に優雅な午後のティータイム邪魔されたためか、不機嫌とまではいかないが、少し気分を害したようだった。

だが、そんな梨花子の心情を察することもなく、鈴鹿は保健室のベッドを占拠し、腰掛ける。

「そうだ。何かあればすぐ報告に来いと、今朝お主自身が言っていたことだからな！」
「それは、そうだけどね……」

鈴鹿のその言い分に、首の裏をさすりながら梨花子は言葉濁す。

彼女は今朝方、学院の理事長である九十九の要請を受け、入学式そつちのけで、鈴鹿に校内を案内して廻っていた。その際、いくつかの注意事項と共に、トラブルや悩み事があれば、いの一自分に話をもつてくるようにと念を押しておいた。鈴鹿の特殊な事情を知る梨花子からすれば、下手に他の教師に相談され、うっかり口を滑らされても困るからなのだが。

「にしても……まさか入学初日から保健室に駆け込んでくるとはね……」

実際、こうも早くにごたごたを持ち込んでくるとは、梨花子も思つてはいなかった。

「な、何かすみません。いきなり押しかけてしまつて……」

すると鈴鹿とは对象的に、命が済まなそうに頭を下げる。梨花子とも初対面だったため、どこか萎縮し、部屋に入った後もずっと立ちっぱなしである。

そんな彼女へ、梨花子は「気にするな」と一言告げ、近くの椅子に座るよう促す。事故の原因など、色々と聞きたいこともあつたが、頼つてきた生徒を無下にもできない。とりあえず生徒たちの要件に応えるべく、梨花子は養護教諭としての仕事をこなす。

「まあ、いいわ。とりあえず頭出して、鈴鹿ちゃん」

「うむ」

鈴鹿は大人しく指示に従い、差し出された頭部を梨花子が診察する。見た限り、これといって外傷はない。

「ど、どうですか、先生？」

「……平気よ。特に目立った外傷とかはないから」

「本当ですか！ 良かった……」

「ええ……一応、体の方も見ておきましょう。鈴鹿ちゃん、制服脱いで」

その指示にも鈴鹿は素直に応じ、躊躇いなく制服を脱ぎ捨てる。すると、そこには真つ白な晒きつし、真つ白な下帯を巻いた、少女のあられもない姿が堂々と晒された。

命が頬赤らめ視線を逸らす。同性といえども、あまりに遠慮なく晒された肌に恥ずかしさを覚えたのか。当の鈴鹿本人はまったく気にもとめていないが。

「……どうやら問題なさそうね」

大人の女性としての余裕なのか、鈴鹿のあられもない姿に全く動じることなく、彼女の体全体を診察しながら、梨花子は命に向かって安心させるように言う。肩の荷が下りたのか命は張っていた気を緩め、そんな生徒へ、梨花子はさらに言葉をかける。

「比佐、命さん……だったわね。ありがとう。わざわざ鈴鹿ちゃんを連れて来てくれて」

「いえ……何もなくて良かったです」

「でも、本当にありがとう。彼女……鈴鹿ちゃんは色々と言われているのよ」

「訳あり……ですか？」

「ええ、そうなの。だからこの学校で上手くやってけるか、少し心配だったんだけど……」

そこで一度言葉を区切り、梨花子は鈴鹿と命の二人を交互に見比べる。

「杞憂だったみたいね。これから、彼女と仲良くしてくれるとありがたいわ」

「うむ、宜しく頼むぞー！」

制服を着なおした鈴鹿が命に握手を求め、差し出されたその手をしばし凝視した後、ためらいがちなながらも命はその手を取る。まだ表情は固いが、悪い雰囲気ではない。梨花子は二人の距離を少しでも縮めることができばと思ひ、軽くフォローを入れる。「それにしても、貴方たち初対面でしょ？ それなのに付き添いで来てくれるなんて、面倒見がよくて優しい子なのね、比佐さんは……」

梨花子としては、この発言に特に深い意味はなかった。気をよくしてもらおうと、多少おだてる気持ちはあったが、これは梨花子の本心からの言葉でもある。

だが、その発言に命は目を伏せる。

そして——次に顔を上げたとき、彼女はその瞳に涙を浮かべていた。

◇

『優しい子なのね』

梨花子の言葉が命の胸に染み渡るように浸透し、様々な感情を沸き起こさせる。優しいなどと言われたことに対しての——悲しみや、恥ずかしさ、そして罪悪感。

——違う……。

自分は決して優しい人間などではない。『不幸』によって鈴鹿が致命的な傷を負い、それによって、衿那が余計な業を背負うことになるのが嫌だったただだけ。断じて、鈴鹿自身の身を氣遣っていたわけではない。

しかも、自分は半年間。不幸に晒され続ける衿那を、遠目から見ているしかできなかった人間だ。それなのに、今さらになつて、親友面で彼女の隣に居座ろうとしている。他人に優しいなどと言われる人間では、断じてないのだ。

「ど、ど、どうした 何故泣く? どこか痛むのか?」

突然涙を溢す命に、鈴鹿はおろおろと戸惑う。梨花子も初めは驚いていたようだが、すぐに冷静さを取り戻したのか、涙を浮かべる生徒をただ一心に見つめていた。

ひとしきり泣いた後、命は落ち着くと共に、急激に恥ずかしさが込み上げてきた。

「す、すいません……初めて会った人の前で泣くなんて……馬鹿、みたいですよね?」

涙を拭いながら自虐的に笑う彼女に、鈴鹿も梨花子も答えない。梨花子はおもむろに立ち上がると、何かしらの作業をするため生徒たちから背を向け、鈴鹿は命の話にただ首を傾げる。

気まずい空気が、保健室全体に充満する。

「あ、あの……すいません！　じゃあ、私はこれで！」

その雰囲気には耐えきれず、命は慌てて保健室を出ようとする。しかし、逃げ出そうと立ち上がった彼女の腕を——神宮寺鈴鹿が掴んでいた。

「えっ?！」

驚きで目を見開く命に、鈴鹿は依然として困惑したままだが、はつきりとした口調で言う。

「……お主が何を言っているのか、儂には見当もつかん。儂は賢い方ではない。御爺様や九十九殿のように思慮深くもなければ、他者の心の機微に聡いわけでもないからう」

「……」

「だから——教えてはくれぬだろうか?」

「?」

鈴鹿の口から出たその言葉に、今度は命が首を傾げる番だった。

「儂は、まだこの街に来たばかりの何も知らない無知なガキだ。見識を広めるため、やらねばならない使命のため、この地に馳せ参じた。その使命を果たすためにも、儂は多くのことを知らねばならない。学ばなければならぬ。そのために娘よ！ まずはお前のことを教えてくれ。お前が、お前たちがその胸に抱えるものを——どうか、この儂に教えてくれ」

なんの躊躇もなくかけられた問いに、命は鈴鹿の顔を覗き込む。一切の混じり気もない、黒曜石のような彼女の澄んだ瞳が、困惑する命自身の姿を映し出していた。

「そうね……私たちでよければ話してもらえないかしら？」

鈴鹿の言葉に賛同するよう、梨花子が優しい声音で語りかける。両手には湯気の立っているマグカップを持っており、その一つを命へと差し出した。

「あ、ありがとうございます……」

命は素直にマグカップを受け取り、口をつけようとそっとカップを近づける。すると、芳しい香りが彼女の鼻孔をくすぐる。

——いい香り……。

カップの中身は紅茶だ。香りは独特な匂いが漂う保険室でも嗅ぎ分けることができないほど、はつきりと感じ取れた。その香りに思わず夢中になりながら、そっと口をつける。

「……！ 美味しい……すぐ美味しいです！ この紅茶！」

「うむ、確かにこれは見事なものだ！ メリーの淹れたやつとは雲泥の差だな！」

もう片方のマグカップを受け取っていた鈴鹿が、誰かの淹れた紅茶と比較しながら頷く。

命も、これまでの人生で何度も紅茶と呼ばれる飲み物を口にしてきたが、これはそれらとは全く違うものに思えた。それほどまでに、梨花子の淹れた紅茶は素晴らしいものだった。

「そう。口に合うようで良かったわ」

「こんなに美味しい紅茶、生まれて初めてです。……これ、お高いんですか？」

「安物のアールグレイよ。その辺のスーパーでも売ってるわ。まあ、ちゃんとした淹れ方をすれば、安物でもしつかりと味が出せるものでね。自慢じゃないけど、紅茶の淹れ方に関してなら少し自信があるわ。子供の頃にさんざん駄目だしされたし、あれだけ何度もうんちくを聞かされれば、嫌でも身につくしね……」

「？」

「……ああ、ごめんなさい。こっちの話よ」

どこか遠くを懐かしむよう、窓の外を見やる梨花子だったが、すぐに話を元に戻した。

「まあ、月並みの台詞かもしれないけど、誰かに打ち明けることで、少しは気が楽になる

「こともあるわ。それに……幸いここには、聞き役が二人もいるしね」

「そうだな！ 一人より二人！ 三人寄れば文殊の知恵とも言ううからのう！」

「……………」

力強く響く梨花子と鈴鹿の言葉。振る舞われた温かい紅茶が命の心を解きほぐす。彼女は、ほんの少し躊躇いながらも、その重たい口を開き始めた。

「う、上手く説明できる自信はありません。私、お喋りとかは基本苦手で、お二人に無駄な時間を取らせるだけかもしれません」

「うん……………」

「あの……………それでも……………最後まで聞いてもらえますか？ 私の、私たちの抱えているものを」

不安げな表情の命。そんな彼女に、梨花子は自分の分の紅茶を淹れながら頷いてみせた。

「ええ、勿論よ……………」

◇

そして、命は話した。自分がここに至るまでの経緯の全てを、最初から最後まで。

榎田衿那との出会い——いじめられっこだった自分を助けてくれた、彼女との出会い。

榎田衿那との日々——学校は違えども、自分たちは喜びも悲しみも分け合える親友だった。

榎田衿那の不幸の始まり——それがいつの頃からか、彼女を取り巻く不幸が全てを狂わせた。

榎田衿那との別れ——弟の事故から衿那は命との縁を切り、彼女を遠ざけた。

そして再会——家族からも離れ、一人で生きていくと決めた衿那を追い、命はここへ来た。

恥も外聞もかなぐり捨て、楽しかった想い出に笑みを浮かべ、理不尽な不幸に憤り、込み上げてくる涙をせき止めながら、命は息つく暇も、時間すら忘れて語り続けた。

延々と続く彼女の話に、二人の聞き手は口を挟むことなく、静かに耳を傾けてくれた。

どれだけの時間、話し込んでいたのだろう。気がつけば日も暮れ、部屋の外から聞こえていた放課後の喧騒もすっかり鳴りを潜めていた。

「——以上が、私がお話しできる全てです」

話を終えた命の胸は少しだけ軽かった。梨花子の言うとおり、誰かに打ち明けたことで、僅かだが気が楽になった気分だ。

同時に不安でもあった。今の話を、果たして彼女たちはどこまで信用してくれるの

か。信用したとして、どのような反応をするのか。おどおどしながら、彼女らの言葉を待つ。

すると、話を聞き終えた梨花子がおもむろに眼鏡を外す。白衣の胸ポケットからクロスを取り出し、レンズの汚れを拭き取る。再び眼鏡をかけ直した瞬間——彼女の纏う雰囲気が一変する。

ほんの少し目じりをつり上げ、声に何らかの感情を込めて梨花子は口を開いた。

「ねえ、命ちゃん。彼女の……櫛田さんの『不幸』についてなんだけど」

「……はい」

「櫛田さんの不幸が始まったのは、中学生の頃からだつて言つてたわよね？」

「は、はい。そうですね……」

「その頃、彼女に何か変わったことはなかったかしら？」

「変わったこと、ですか？」

「例えば……何日か学校を休んだとか、急に倒れたとか、何かなかったかしら？」

奇妙な質問をする梨花子に、命と鈴鹿が不思議がる。命はとりあえず過去の記憶を振り返り、暫く考え込んだところで、ふと思ひ出した。

「そ、そういえば中学に上がったばかりの頃ですけど、衿ちゃん、弟さんとの下校途中に突然意識を失つて倒れたことがあつたんです」

「意識を？」

「はい。そのまま病院に運ばれて、一時間くらいで目を覚ましたんですけど……」

まだ彼女の不幸が始まる前の出来事であったが、そのことはよく覚えている。その報せを受けたときは、本当に心臓が止まるかと思った。結局、これといって大事には至らなかったが。

「そういえば、それからすぐだったと思います！ 彼女の周りでおかしなことが起きて……」

「なるほど、なるほど……」

二つの事柄の妙な因果関係に、合点がいったという様子で梨花子は何度も頷く。

「……………命ちゃん」

「はっ？」

梨花子は顎に手を当て何かを考え込んでいたが、やがて思い定めたように言う。

「詳しいことは、実際に榎田さんを診てみないとわからないわ、だけど、もしかしたら——」

そして、梨花子はその結論を口にする。

それは、命が心の奥底でずっと欲してきたもの。

そんな都合のいい望み、叶うわけない。そう、あきらめかけていたものだった。

彼女たちが長年願ひ続けたその答えを、養護教諭——星野梨花子は口にした。

「——貴方の親友の『不幸』を、私たちの手で終わらせることができるかもしれないわ」

◇

同日 夜 森羅本社ビル 食堂

「……………遅い」

森羅本社ビル。いくつものテーブルや椅子が整然と並べられている広々とした室内で、テッドは夜に放送されるアニメを鑑賞しながら、一人不安を募らせる。

ここは九十九の所有する部屋の一つ。彼ら専用の食堂である。部外者は勿論、社員ですらも立ち入らないこの食堂で、テッドやメリーは基本的に食事をとっている。

現在、テーブルの上には、かつてないほどの規模で豪華な料理が所狭しと並べられていた。高級魚の盛り合わせに、霜降り肉の牛ステーキといった御馳走。宮廷料理にでも出てきそうな野菜でできた鳳凰から、オムライスやスパゲッティといった、庶民的料理まで。

「確かに君の言うとおりだね、テッド」

それらの料理を一人で調理した九十九が、調理場から顔を覗かせテッドの言葉に同意する。料理作りは九十九の趣味の一つで、普段の双子たちの食事なども彼が一人で賄っ

ている。

「今日は鈴鹿君の入学祝いと思い、腕によりをかけて気合を入れたんだがね……」

もつとも、その腕前は既に趣味の領域を完全に逸脱してしまっており、あまりのクオリティの高すぎる料理を前に、九十九の腕前を知っているテッドですら、ドン引きしていた。

「九十九さん……いくらなんでも作りすぎですよ。流石にこんなに食べませんって」

「そうかい？ あの子の胃袋なら、これくらいペロリと平らげそうなものだが？」

「どこの大食いタレントですか、それ？」

九十九の言葉に呆れ気味に答えながら、テッドは話を戻す。

「もうこんな時間ですよ。今日は入学式と軽いHRで終わる予定ですよね？ やっぱり、また何かトラブルでも起こしてるんじゃないや……」

あくまで、トラブルに巻き込まれたとは考えず、眩く少年に、九十九はやりわりと言う。「心配ないさ。何かあればすぐに梨花子君に報告するように言っている。それに、昨日あれだけ言い含めておいたんだ。流石の彼女も、昨日の今日で同じようなトラブルを起こしは——」

と、心配無用と九十九が発言しようとしたときだ。突然、彼の体が光を放つ。いや、正確には彼の服の下からその光は発せられていた。

「……………」

その光の意味を悟った二人は揃って沈黙。珍しく、九十九がきまり悪げに頬を掻いた。

「あ……前言撤回だ、テッド。メリーを呼んできてくれるかい？」

「……………」了解しました」

微妙な間を置いて返事をしたテッドは、重い足取りで妹を呼びに部屋を後にする。くたびれた社会人のような哀愁を漂わせるテッドの背中を見送り、九十九は懐に手を伸ばした。

彼が取り出したのは一つの球体。手のひらの上に乗る大きさの、光り輝く水晶玉だった。

『水晶球』を介しての連絡は緊急時だけの筈だが……」

そして、その水晶玉に向かい、九十九は楽しそうに口元を緩ませていた。

「どうやら何事かあったようだね……梨花子君」

逃れられぬ災厄

刻印学院高校 保健室

最終下校時間も過ぎ、部活動に精を出していた生徒たちもいなくなった、夜の校舎。今も校内に残っているのは数名の教師と、夜間見回りの警備員くらいなもの。夜の学校が放つ独特の薄気味悪さが一帯に漂う中、人気のない校舎の一角である保健室には、勤務時間を過ぎていながらも、椅子に深く腰掛ける星野梨花子の姿があった。

「……………」と、言う訳なのよ」

彼女は何かを話し終えた直後らしく、口の渇きを癒すために紅茶で喉を潤した。

「今日、鈴鹿ちゃんと一緒に保健室に来た子——命ちゃんの友達に起きた。いえ、現在進行形で起きている『不幸』とやらの現状よ……どう見る？」

梨花子はいっ先ほど、命から聞かされた彼女たちの『不幸』の詳細を簡潔にまとめ、彼——九十九明に報告していた。

養護教諭として聞いた、うら若き乙女たちの悩み。本来であれば、第三者に聞かせていいような話ではなかったが、衿那の不幸について、九十九の意見を聞きたいがために、彼女はこうして相談を持ちかけていたのだ。

自分よりも多くの経験を持つ、手元の『水晶球』に映り込む男の意見を。

梨花子の話を聞き終え、水晶の中の九十九は少し考えてから言った。

『君はどう考えているんだい、梨花子君?』

こちらを試すかのような彼の問いかけに、梨花子は自分の中で出た答えを提示する。

「100%……とは断言できないけど、高確率で彼女——呪われているわね」

呪われている。これまで袴那を腫れ物のように扱ってきた人々も感じていたことだ。

『あの女は呪われている』と。しかし、このとき梨花子が口にした『呪い』は、そんな彼らを感じていた迷信めいた考えではない。梨花子が熟考の末、ある種の確信を込めて出した答えだ。

彼女の解答に、どこか満足げに九十九は頷く。

『ふむ、私も君に同意見だよ。呪われたのは三年前。彼女が意識を失ったそのとき。その日から、彼女が何らかの『呪詛』に憑かれ始めたと見るのが妥当だろう』

「……………」

『しかも、呪いの進行も既に末期。このまま行けば、いずれ呪いにその身を喰われるだろうね』

「そうよね……今日の事故なんて、負傷者がいなかったのが不思議なくらいよ」

『鈴鹿君がその場にいたというのが、不幸中の幸いだったね……』

衿那か、あるいは、別の誰かが死んでいてもおかしくなかつた事故だ。すぐ側に鈴鹿がいたからこそ、誰一人傷つかずに済んだようなものだった。

『いずれにせよ、早急に榎田衿那を捜し出して保護する必要があるが、それがこちらに任せて、君は彼女に憑いている呪いの正体を調べてくれ。念のため、『京都』の方にも報告しておいた方がいいだろう。詳細は本社で聞こう……では』

言いたいことを言い残し、水晶玉に映り込んでいた九十九は、蜃気楼のようにその姿を消す。

「相変わらず、人使いが荒いわね……」

誰一人、自身の言葉を聞く者がいなくなつた保健室で、梨花子は愚痴を溢す。だが、すぐに椅子から立ち上がり、帰り支度を始めた。

——とりあえず、ここ三年以内で起きた過去の事例から洗っていくか。

そんなことを考えながら、保健室を消灯し、梨花子は急ぎ家路へと向うのであつた。

◇

同時刻 森羅本社ビル食堂

——……何度も見ても不思議な光景ですね。

兄であるテッドに食堂まで連れてこられたメリー。水晶玉に映り込む、星野梨花子と会話をしている九十九を見やり、もう何度目になるのか、数えるのも馬鹿らしい疑問を

浮かべる。いつたい、どういった原理であるようなことが可能なのか、彼女には未だに理解の外だった。

「——詳細は本社で聞こう……では」

梨花子といくつかのやり取りを経て、九十九は話を締めくくる。梨花子の姿は幻のように掻き消え、水晶も光を失っていく。

「梨花子さんからのようでしたけど……やっぱり鈴鹿さんがまた？」

話が終わったのを見計らい、テッドが九十九に恐る恐ると尋ねる。会話は断片的にだが、こちらにも聞こえており、鈴鹿の名前が出てくるたび、テッドは何度も冷や汗を流していた。

テッドの問いに九十九は答ええない。黙って水晶玉を懐に戻し、テーブルの上に並べられている豪華な料理を脇によけ、一台のノートパソコンを持つてきた。仕事用のメールがきても、すぐにわかるように起動していたそれを操作しながら彼は言う。

「いや、今回は別件だ。今のところ、鈴鹿君が何か問題を起こしたというわけじゃない」「本当ですか？」

「寧ろ、彼女がいてくれて助かったと、お礼を言うべきだろう。それより済まないが、今から君らに人を捜してきてもらいたい。頼まれてくれるかな？」

慣れた手つきでキーボードを叩きながら、九十九は二人に向かって願い出る。九十九

のその頼みに、テッドとメリーはお互い顔を見合わせたが、すぐに頷いた。

「まあ……別に構いませんけど。ねえ、メリー？」

「……はい。問題はありません」

誰かを捜してきて欲しいという注文は、ときおり九十九からリクエストされる事案である。二人にとって、これといって断る理由はない。

「ありがとう。搜索対象の顔写真と簡単な概要を、今からメールで送信するよ」

九十九は律儀に礼を言い、それとほぼ同時に、双子たちの携帯から短い着信音が鳴る。携帯を取り出したメリーは、さっそく搜索対象の情報を確認するため、送られてきたメールを開き、そこに添付された資料と画像に目を通した。

「……これは女生徒ですか？」

それは何かの証明写真なのか。真正面から撮影された、黒髪にツインテールの女子の顔写真がアップになって映し出されている。

「櫛田衿那……鈴鹿君と同じ、今年刻印に入学してきた一年生だ。写真は入学願書の際に用いられてものだから、このときはまだ中学生だね」

九十九の説明を聞いたメリーは、何故そんなものがノートパソコンの中にと疑問を感じたが、彼が刻印の理事長であることを思えば、それほど不思議なことではないと思いを直す。

「中学生ですか？ それにしては、何と言いますか、随分と危ない目つきしてますね……」

テッドも同じ写真を送信されたのだろう。第一印象から得られた感想を述べる兄に、確かにとメリーも心の中で同意する。

写真に写る彼女は鋭い荒んだ目をしている。それは、彼女の性格や思春期から来る反抗期というのも若干はあるのだろうが、それにしても些か度が過ぎていた。まるで、自分を取り巻くもの全てに敵意を向けるよう、軽く殺気すら感じられるのだ。

「この目つき……梨花子さんとの話しの中に出た『不幸』と、何か関係があるんですか？」
先ほどの話の中から聞こえてきた不吉なワードと、櫛田衿那を結びつけるテッド。

「詳しい話は後にしようか」

しかし、九十九はその質問にも答えず、ノートパソコンを静かに閉じた。

「まずは彼女の保護を最優先に頼む。このビルの中なら『結界』が働くから、外よりは幾分か安全だ。すぐにでも、その子をここまで連れて来てくれ」

「……抵抗された場合はどうしますか？」

見ず知らずの自分たちに着いて来てくれと言われて、素直について来るものではないだろ。そう判断したメリーが九十九に指示を仰ぐ。それに対する九十九の答えは明確だった。

「多少手荒でも構わないが、くれぐれも怪我だけはさせないように頼むよ」
「了解！」

中々難しい注文だが、兄妹は揃って了承する。

「搜索範囲はどうしましょう？ 当てはあるんですか？ ……てか、まだこの辺り一帯に留まっている保証もないと思うんですか……」

テッドが体を伸ばしながら、言いにくそうに尋ねる。確かに、その櫛田衿那という少女がどこに行つたかわからなければ捜しようもない。

ここは日本の首都——東京。

電車にバス、新幹線や飛行機にフェリーまで、交通アクセスの手段には何一つ不自由しない。その気になれば一時間としない内に、どこか別の県に移動することもできるだろう。だが、このときばかりはそんな心配、する必要はないと九十九は言う。

「どうやら櫛田さん、相当に慌てていたようですね。財布や携帯を鞆ごと学校に置き忘れていったらしい。多少の持ち合わせはあるかもしれないが、遠出することはできないだろう」

逆に言えば、それだけ彼女の必死さが垣間見える。

「二応、鈴鹿君と櫛田さんの友人が一緒になって捜しているそうだが、土地勘もない彼女たちでは、そう上手くもいかないだろう。とりあえず、君たちには彼女たちの分まで働

くつもりで、渋谷区内を中心に捜索に当たってもらいたい」

「じ、自分とメリーの二人だけで？　さ、流石にそれはちよつと無理が……」

九十九の提案にテッドが抗議の声を上げ、メリーも首を縦に振る。

一口に渋谷区といつても結構な広さ、人口密度も半端ではない。特に世界でも有名なスクランブル交差点では、一日最大50万人以上の人間が往来すると言われていているのだ。テッドもメリーも身の軽さには自信があるものの、そんな人ごみの中から、写真でしか知らないような少女を見つけ出すなど、ほぼ不可能に近い。

そんなことも理解できぬ九十九ではない。テッドの動揺に、彼は不敵な笑みを浮かべた。

「勿論、わかっているさ。だから君たちと同じ内容のメールを、『彼』にも送信しておいた」

「……………」

自信たっぷりな九十九の口から告げられた『彼』と言う言葉に、双子は揃って押し黙り、数秒後、それぞれ別々の表情を浮かべる。

テッドは顔を引きつらせ苦笑い、メリーは元から感情の乏しい顔から一切の表情を消す。こういった状況で『彼』と言われ、思い当たる人物は残念ながら一人しか浮かばない。

「……あの『覗き屋』ですか」

絞り出すような声で、メリーがうなる。

「メリー……その言い方だと色々と言弊があるよ。もっと柔らかかに『捜し屋』とでも呼称してあげなさい」

九十九は軽くメリーをたしなめる。だが、彼女はこの呼び方を改めようと、自分の言動が間違っているとも思わなかった。

『捜し屋』。

今回のような人捜しの際、九十九がよく連絡を取る相手だ。

自分たちと同じく、この渋谷を拠点に行動しているらしいのだが、テッドもメリーも、九十九が彼と電話越しに何度か話をしているのを、聞いたことがある程度で、実際に面識はない。

しかし、その情報収集能力の高さは確かで、どのような手段、手法を用いているのか定かではないものの、彼は対象の似顔絵や写真を提供するだけで、その人物を捜し出してくる。

そしてまるで、その対象を常に覗き見ているかのよう、その行動を逐一報告してくるのだ。その捜索範囲は広く、渋谷のみならず、東京全体にまで広がっているほどだった。

もつとも、そんな覗き屋の彼にも、目が届きにくい『死角』というものが存在するらしい。

「屋外の搜索は彼に任せればいいだろう。君たちは地下や屋内を重点的に当たつてくれ」

どうやら彼の『眼』は屋内には行き届きにくいらしく、対象がそこにいる場合、発見が遅れることが多々あるのだ。九十九は、そんな彼の探索範囲を正しく理解しているため、それをカバーする形で双子にも搜索を頼んでいる。

正直、メリーは『彼』のことを今一つ信用していない。電話越しに聞こえてくる、どこか人を食ったような言動や喋り方が気に食わないというのもあるが、それ以上に、彼には不思議と、双子たちに警戒心を抱かせる気味悪さがあった。

とはいえ、背に腹は変えられない。今は一刻でも早く、櫛田衿那を捜し出すべきだと割り切ることにして、彼女は九十九の指示に従うべく、兄と共に食堂を出ようとする。

しかし、そのときだった。話を締めくくろうとした、九十九の携帯の着信音が鳴り響く。オーケストラの合唱団が演奏するかのような、重厚なメロディー。九十九は淀みない動作で懐から携帯を取り出すが、モニターに映った着信相手の名前にその動きを止めた。

「……………早いな」

その眩きで、双子たちは誰からの電話か即座に察する。九十九は携帯の通話ボタン押し、スピーカーモードに切り替えて、机の上に置いた。

「ずいぶんと早いようだが、もう見つかったのかい？」

『——挨拶の言葉もなしにいきなり本題ですか？ いつも紳士な貴方らしくありませんよ！』

通話の相手は他でもない、今しがた話題に上がっていた『捜し屋』その人である。

軽いノリで喋る相手の口調に、メリーのこめかみがわずかに引きつるが、表情の変化など見えていない捜し屋はお構いなしに、おちやらけた調子で言葉を紡いでいく。

『人生、生き急いでも損をするだけです！ もっと冷静に！ クールに行きましょう！』
「いや……………濟まないね。まさか、こんなにも早く君から連絡がくるとは思ってもみなかったもので、少し驚いてしまったよ」

『へえ〜！ 九十九さんが驚くなんて珍しい！ 急いで報告した甲斐がありましたよ！』

「……………」

捜し屋の言動にメリーのイライラは募るが、同時に相手の声に不気味なものを感じる。

スピーカー越しに聞こえてくる声は、ボイスチェンジャーなどで加工している様子はない。にもかかわらず、メリーには彼の声がどんなものなのか、認識することができない。

男か女か、若者か老人か、その区別もつかない。まるで声そのものに、なんらかの『力』が作用しているかのようで、その言葉から、はつきりとした特徴が全く伝わってこないのだ。

「それで？ メールで伝えた少女——榎田衿那さんは今どこにいるんだい？ 見つけたからこそ、こうして連絡をしてきたのだから？」

果たして、九十九の耳には捜し屋の声がどのように聞こえているのだろうか。自然な調子で相手との会話に興じる彼に疑問の目を向けつつ、メリーはスピーカーの声に耳を傾ける。

『そうですね、ぶっちゃけ！ 見つけたのはほとんど偶然なんですよ！ 実際にメールを受け取ったときは僕もびっくりしましたから！ 世間は狭いなんて、改めて感じましたね！』

「うん。前置きはそれくらいにして……そろそろ本題に入ってくれないかな？」

なかなか本題に入ろうとしない捜し屋に、九十九は先を促す。彼も苛立っているわけではないが、その声には確かな力がこもっており、えも言われぬ迫力があつた。

その迫力に押されてか、ようやく捜し屋は無駄なお喋りを止める。

『怖いなあ〜！ そんなに急かさなくても、ちゃんと報告しますよ！ ただ……』

「ただ……どうかしたのかね？」

ところが、いざ本題となると、捜し屋は言いにくそうに言葉を詰まらせる。

『……………報告するだけ無駄かもしれませんよ。だって——』

気まずい沈黙。やがて根負けしたように、彼は報告を再開し——

単刀直入に、己が把握している現状を述べてみせた。

『彼女、櫛田衿那さんは——もうこの世にいないかもしれませんからね……』

◇

数十分前 渋谷駅地下 13番出口

渋谷駅から地上へと続く、いくつもの地下通路。その広大で複雑な作りは、もはや迷宮といっても過言ではなく、初めて駅を利用する人間は勿論、毎日のようにここを利用している客でさえ、油断すれば迷ってしまいかねない。

昨今の再開発の影響で、さらに施設も人も増えていく中、果たしてこの地下構造の全てを理解、熟知できる人間などいるのだろうか、疑問を抱かずにはいられない。

当然、時刻や場所によつては、常に人が溢れかえっている出入り口がほとんどだが、今日の13番出口は比較的人通りが少なかった。本来であれば、もう少し人気があつても

いいものだが、とある理由から、自然と人が近寄りにくい空間と化していた。

「——ねえねえ！ きみ今暇？ これから俺らと遊びにいかねえ？」

その理由がこれだ。チャラついた服装の男たちが五、六人。壁に寄りかかっている制服姿の少女に声をかけ、いや絡んでいる。通行人の足も、自然と早くなるというものだろう。

「俺たちさく、これから飯食ってカラオケにでも行こつて、話してたんだけどさく。男だけじゃ華がねえつて思つてたとこなんだわ。どう、一緒に行かない？」

鼻にピアスをつけた男——やつさんがその少女に言い寄る。顔を少女に近づけ、後ろに控えている男たちはそれをどこか楽しそうに、軽薄な笑みでにやにやと眺めていた。

そんな彼らの視線を一身に受けながらも、少女は微動だにしない。男が声をかける前と、同じ体制のまま俯き、壁に寄りかかっている。恐怖で体が動けないというより、目の前の彼等など、視界にすら入っていない態度だった。

「……おい、聞いてんのかよ！ 一緒に来いっつてんだらあ！」

その態度が面白くないやつさんは語気を荒め、さらに少女に詰め寄っていく。

壁に手をつき、逃げ道を封じ、さらに顔を近づける。一時期『壁ドン』という言葉で世間に広まったシチュエーションだが、そこに少女漫画のようなロマンスはない。

しかし、そこまで強引に詰め寄られても、少女はチラッと相手を一瞥する程度。その

視線すらもすぐに余所に向いてしまう。反抗的な態度が、さらにやっさんの神経を逆なでした。

「てめえ！ なに余裕ぶっこいてんだ！ シカトすんなや！ こっち向け、コラア！」

癩癩玉が破裂したやっさんは、少女の襟首を乱暴に掴み上げる。流石にその行動に、仲間の何人かは若干鼻白んでいたが、特に止めに入ろうとはせず、静観を決め込む。

「……なさいよ」

「あん？」

すると、それまで黙っていた少女がポツリと呟いた。

「……離しなさいよ」

力なく彼女の口から漏れたその言葉を、懇願と受け取ったやっさんの胸中が満足感で満たされる。最初の対応が気に入らなかっただけあって、優越感はより一層高まる。

「へっ！ 可愛い声してんじやんよ。どれ、よく、顔を見せてくれ……っ!」

調子に乗ったやっさんは、少女の顎を指でクイツと持ち上げ、視線を自分の方へ向けさせる。

これまた一時期、世の女性たちの間で流行した『顎クイ』と呼ばれる動作だが、そこに恋愛映画のような胸キュンはない。ところが——その動作で少女の素顔を目に入れた、その瞬間、やっさんの胸中が、一瞬で戸惑いに包まれた。

容姿は決して悪くない。可愛さよりも気の強さが目立つが、十分に美人だと言える容姿だ。

問題は、その目だ。

どこか悲壯感を漂わせている荒んだ目つきで、少女はこちらを射殺さんとはかりに睨みつけてくる。多少なりとも、荒事に慣れているやっさんですら、思わずたじろぎ手を放す。

華奢な見た目からは想像もしなかった、鬼気迫るものを、彼は少女の眼光に見たのだ。

そんな、やっさんの感じ取った少女に対する危機意識は、直ぐに現実のものとなる。

「……アンタたち、今すぐ私の前から消えなさい」

「……な、なに？」

「でないと——死ぬわよ？」

全く冗談に聞こえない語気で物騒な言葉を吐き、少女は制服のポケットに手を伸ばす。そして、ポケットから取り出された、一本のカッターナイフの存在に男たちが色めきだった。

「うお！ アブネエ！ こいつ、刃物持ってんぞ！」

「……そんなもん取り出してどうすんだよ、ああ？」

「おいおい！ やめとけて！ 怪我するだけだぜ、お嬢ちゃん！」

仲間たちは彼女を小馬鹿に嘲笑う。きつと、見るからに喧嘩慣れしていない少女が、そんなものを取り出したところでどうということはない、そう考えたのだろう。

しかし彼らと違い、少女の眼光を間近で見たやっさんは、少女を笑い飛ばす気にはなれなかった。このままでは本気で刺されかねない。彼は直感でそう感じ取ったのだ。

「おい……行こうぜ」

「え？ なに連れてかねえの？」

「いつもはもつとしつこいのに……」

少女から離れ、そのまま興味を失くしたように振る舞う。女一人にびびった、などと思われては自身の面子に関わるため、あくまで平常心を保ったまま言つてのける。

「けっ！ こんなキレイな女ほっとけよ。可愛げもねえし、誘つたつて、飯が不味くなるだけだ」

「え〜！ けっこうかわいいじゃん！ 俺タイプなのになあ〜」

「……まあ、女に刺されたなんて、マジで笑い話にしかなんねえしな」

「うるせえ！ さっさと行くぞ〜！」

ぶうぶうと文句をたれる連れに対し、やっさんは声を荒げて自分の意見を押し通す。

まだ、どこか不満げな表情の仲間たちだったが、彼らにも本当に刺されるかもしれないという、わずかな恐怖心があったのか。あるいは——昨日の昼間の苦い記憶を思い出

したのか。

やっさんに先導され、逃げるように、地上へと続く出口へと向かっていった。

◇

「——ふん、こんなものでも、脅しくらいには役立つものね……」

男たちが大人しく立ち去り、地下通路には少女——櫛田衿那一人が取り残される。

張っていた気を僅かに緩め、手の中のカッターナイフに目を落とす。それは衿那が不幸になり始めてから、護身用を持つようになったものだ。前に通り魔に刺された際に、丸腰ではまたいつ襲われるかわかったものではない、と常備するようになった。

もつとも、衿那にそれで人を刺す度胸などなく、あくまで威嚇用に過ぎない。

「それにしても、やけにあっさり引いたわね……威勢がいいのは見た目だけだったかしら?」

やっさんはナイフなどではない、彼女の殺伐とした目つきに恐れをなしていたのだが、あてもなくずっと街中を彷徨っていた彼女に、自身の今の表情など知る由もない。

そう、刻印での事故の後。衿那は借家にも戻らず、幽鬼の様に渋谷の街を徘徊していた。

別に何か目的があったわけではない。きっと、彼女は逃げ出したかっただけなのだ。

親友を含めた、自身を取り巻く全てのものから。

しかし、そこで彼女は途方に暮れていた。

——これから……どうする？

誰もいないことを確認してから、その場に膝を抱えてしゃがみこむ。男に胸倉を掴まれて乱された服装を直そうともせず、衿那は自問自答を続ける。

——これから、どうやって命を遠ざける？

それはこの先、あの高校に通う以上、避けては通れない道であろう。今日一日が何事もなく終わろうとも、学校に行けば嫌でも彼女と鉢合わせることになる。

それだけは、何としても避けたかった。

親友を、命を『不幸』に巻き込まないためにも。

衿那は命にくつつもの暴言を吐いてはいたが、決して彼女を嫌っているわけではない。命は衿那が不幸になった後も、ずっと自分を支え続けてくれた、たった一人の親友なのだ。

嫌いになど、なれる筈もない。

しかしだからこそ、衿那は親友と縁を切った。自分から彼女と距離を置いたのだ。それなのに、人の気も知らないで、命はこんなところまで衿那を追いかけてきた。

衿那はそんな命に腹を立てたが、それと同じくらい嬉しさがこみ上げてくるのを、

必死に抑えつけなければならなかった。

——しつかりしろ！　こんなんじや駄目よ！

ここで命の優しさに甘えてしまえば、何のためにここまで来たかわからなくなってしまう。
まう。

——とりあえず二、三日は学校サボって様子を見るしかないわね……。

明日からの対応を暫定的にだが、そう定める。

すると、それまで蓄積された疲労がドツと一気に押し寄せ、急に体が重苦しくなる。

——さすがに、疲れたわね。まあ、当然か……。

半日の間歩き続けだったうえ、学校を飛び出してから、ずっと飲まず食わず。

己の不幸を自覚してからというもの、何を食べても美味いと感じたことはなかったが、体は絶えず栄養を求める。どんなに不幸でも、思い悩もうとも、腹が減るときは減るものだ。

——コンビニで適当に、おにぎりでも買って帰るか……。

衿那は臥せっていた顔を、重い腰を上げ、家路まで歩こうとする。

ふと、前方を見る。なにやら黒い物体が視界にちらつく。衿那はあわててその物体に目を向けるが、すぐにその首を傾げることになった。

「……カラス？」

そこにいたのは全身を黒い羽毛で覆われた、不吉の代名詞とも呼ばれる一羽のカラスだ。

特に珍しくも何ともない鳥類だが、こんな地下通路に何故いるのだろうか。ここには餌になるような残飯も、彼等の興味を引くような光り物もないというのに。

「……………何見てんのよ」

彫像のようにその場から動かず、自分を見つめるカラスの存在に、衿那は思わず口走る。不良にでも因縁をつけられたかのように、鳥公を睨み返し、眼を飛ばす。

そのまま静寂に包まれた地下空間内で、一人と一羽が暫し睨み合う。

「……………ふう」

一分と持たないうちに衿那が先に折れ、彼女は自嘲気味に首を振った。

「相当疲れてるわね、私…………」

いくら追い詰められているとはいえ、たかが動物相手にムキになっている己に自己嫌悪。未だにカラスの、自分に対する妙な視線に不気味なものを覚えつつ、その場から立ち去るべく地上へと足を向けた。

そのときであつた――

「……………!?!」

轟音と共に、衿那の全身が大きく揺れる。

頭を思いつきり振り回されるような衝撃に、立っていることすら困難な激しい揺さぶ
り。

いったい何事かと混乱しつつも、衿那は咄嗟に周囲に目を配るが――

頭上からすさまじい崩壊音が響いたのを最後に、彼女の意識は闇へと沈んでいく。

戦え

「……………うん?」

再び衿那が目を覚ますと、地下は薄暗い闇に閉ざされていた。かろうじて残る一部の照明だけが消えかかりながらも点滅し、僅かに一帯を照らしている。覚醒したばかりで、ぼうつとなる思考を何とか働かせ、衿那は手探りで状況を探る。

しかし、うつ伏せになって倒れている自身の体を起こすため、手足を動かそうと試みるも、何故か思うようにその場から動くことができない。体全体に何やら怠さを感じていたのもあるが、それ以上に、背中を誰かに強く押さえつけられているような感覚があった。

衿那は首だけを動かして、後ろを振り返る。

腰から下、自分の下半身が、瓦礫の山に埋もれている光景がそこにはあった。

「……………」

そのまま視線を上へと向け、天井が割れているのを見て、彼女はある程度 of 状況を把握する。

——地震? それともただの欠陥工事? いずれにせよ、地下通路が崩れた、みたい

ね……。

衿那は比較的冷静さを保っていた。普通の人間なら泣き叫び、パニックになってもおかしくないものだが、彼女の場合、ある意味日常茶飯事とも言えるシユチュエーシヨんだ。

なんてことはない、またいつものように『不幸』が来ただけの話。

彼女にとって、それだけのことだった。

「それにしても一日に二度もなんて、だいぶ末期ね……」

自虐的にはあるものの、口元に笑みを浮かべる余裕すらある。昼間の鉄骨事故を含めて、生命の危機を感じるほどの『不幸』はこれで本日二度目。これまでも幾度となく、生命の危機と呼べる不幸にぶち当たったが、同じ日に立て続けに起きたのは今日が初めてだ。

確かに、不幸が起きる間隔の幅が短くなっているのを衿那は痛感する。

「ふん……私も、もう……長くはないってことかしら」

だが、そんな現状を、どこか他人事のように衿那は考える。もはや、自身の生命いのちに対する危機感など、全く抱くことができな。唯一拭いきれない不安があるとすれば、誰かを巻き込んでしまうかもしれないということ。

それだけが衿那にとって、ただ一つの懸念材料だった。

「……………よつと」

彼女はさらに注意深く辺りを観察する。誰か巻き込まれた人間がいなかどうかの確認。皮肉なことに、ついさつきまで衿那に絡んでいたチンピラたちが、人の近寄りがない空気を作ってくれていたおかげか、少なくとも彼女の視界に、今の地震に巻き込まれた人間は皆無だった。

かわりに別の場所。ここ以外の地下通路はどうなっているのか、地上で建物は崩れていないだろうか、次から次へと衿那の脳裏に不安がよぎる。とりあえず外の状況を探ろうと彼女は携帯を使い、ネットで情報でも漁ろうと考えた。だが——

「……………携帯……………持つてきてない……………」

そのときになって初めて、衿那は自分が携帯どころか、財布や鞆すらも持つていないことに気がついた。おそらく刻印での一件のときに、落としてしまったのだろう。

「なんて、間抜け……………」

自分の滑稽さに、より一層引きつった笑みを浮かべる衿那であった。

しかし——その自虐の笑みですら、すぐに消え失せる。

「あつ——」

衿那は息を呑む。彼女は、見てしまったのだ。

瓦礫の下敷きになり、ぐちゃぐちゃに潰された——カラスの死骸を。

自身の『不幸』によつて生まれた、哀れな犠牲者の無残な亡骸を。

「——くそ！ さつさと、帰ればよかつたのに……」

人間ではないとはいえ、どうしようもない罪悪感が、胸の奥から込み上げてくる。

「……なんでいつも……こうなのよ……」

これで何回目だろう？ これは何人目だろう？

何故いつもこうなる？ 何が原因でこんなことになる？

何故、自分は——

もう幾度となく浮かんだ何故、という言葉が頭の中を埋め尽くす。だが、どれだけ、何度考えても、この現状を打破する答えなど出ることにはなかつた——

「——衿ちゃん！」

そんな一人、絶望に打ちのめされる衿那に、その声は聞こえてきた。その声の主が誰なのかなど、考えるまでもなく衿那は理解する。こんなとき、こんな自分の側に來てくれる物好きなど、やはり一人しか思い浮かばない。

衿那の思つたとおり。薄暗い視界の先から、駆け込んでくる親友の姿が見えた。

「……………命」

「衿ちゃん！ やっぱり衿ちゃんだったんだね！」

暗闇の向こうから顔を出した比佐命は、衿那の姿に一瞬安堵しかけたようだが、半身が瓦礫に埋まっているのを見て、喉の奥から悲鳴を上げる。

「え、衿ちゃん！ そ、それ!？」

「別に、なんてことないわよ。こんなものいつものことですよ？」

「怪我とかしてな!? 体、動かせる?」

「さあ……どうかしらね。痛みはあるし、瓦礫が邪魔で動けないけど、何故か生きてるわ……」

慌てふためきながら安否を問いかける命に、衿那はあくまで淡々と答える。

「! え、衿ちゃん！ ち、血！ 頭から血が!!」

「?」

顔面蒼白になる命の指摘に、衿那は制服の袖で額を拭う。服が黒い液体で濡れた。どうやら瓦礫にでもぶつつけらしい。血を流していたことに、今さらながらに気がついた。

「は、早く手当てしないと!」

命の行動は迅速だった。ハンカチを取り出し、傷口部分へと押し当て止血する。その処置を抵抗もせずを受け入れながら、衿那は何気なく浮かんだ疑問を投げかける。

「……………アンタ、どうしてこんなところにいるのよ?」

「えっ？」

先ほどの口ぶりから、ここに自分がいると、それなりの確信があつて来たのだろう。そんな単純な衿那の疑問に、僅かに言いにくそうに、命はここに来れた理由を告げた。

「ええとね……。あれからずつと衿ちゃんを捜してて、たまたまこの辺りを通りかかったら男の人たちが話してるのを聞いたんだ。「カッターナイフを持ったヤバい女が……」つて」

「ちっ、あいつらか……」

「え、衿ちゃんが護身用にカッターを持つてるのは知ってたから、もしかしたらつて思つて、そしたら、そのすぐ後に地震があつたから……。何にせよ、会えて良かった……」

「……………」

口で良かったと言いつつ、言葉の端々からは、どうにも複雑な気持ちが滲み出ていた。この広い大都会の中で出会えた『幸運』に喜びつつ、このような『不幸』な状態での再会に心苦しそうだ。すると、暗く沈んだ空気を場違いなまでの明るい声が掻き消した。

「命よ！ 先に行くなと言つて……おっ！ こんな所におつたか。探したぞ、榎田衿那よ！」

「アンタは……！」

続いて現れた人物——神宮寺鈴鹿に、衿那は戸惑いの表情を隠せなかった。

「ご、ごめんなさい。神宮寺さん」

彼女の存在に命は驚いた様子もなく、自然と謝罪の言葉を口にしてている。

「命……何で、こいつもここにいのの？」

「え？ ああ、驚いた？ 神宮寺さんも一緒に衿ちゃんのこと捜してくれるって、それで

……」

命ならばいざ知らず、どうしても見ず知らずの鈴鹿まで、自分を捜す手伝いをしているのか、色々謎ではあるが、とりあえず置いておいて、衿那は別の質問をすることにした。

「外は……今、どうなってる？」

「え、ええと、外の方はそんなに酷い被害じゃないよ。けっこう揺れて騒ぎにはなってるけど、怪我人とかは全然。みんな、慌てて建物の外に避難してる、くらいかな……」

「そう……」

彼女の話の聞く限り、これといって甚大な被害にはなってなさそうだ。それだけ聞いて安心したのか、それつきり黙った衿那に、命が会話を繋げようと早口で喋り立てる。

「と、とにかくここから出て、すぐに病院に行こう！ 病院でちゃんと診てもらって……」

大丈夫！ きつと救助隊が来てくれるから！ 瓦礫なんか、すぐに除けてくれるよ……

だから——」

「——だから……だから、どうだったのよ？」

自分を励まそうとしたであろう命の言葉を、衿那は途中で遮った。

「ここから出てどうなの？ 怪我を治したところで、何も変わりはないわよ……」

不幸体質——といっても、衿那の体はどこも悪くはない。一度、病院の精密検査を受けたこともあるが、返ってきた結果は「異常なし」だった。世界的にも高い水準を誇る日本の現代医療を以ってしても、彼女の『不幸』という名の病魔の原因すら掴めないのだ。

今更、じたばたしたところで、どうにかなるものでもない。

「下手に入院なんかして、また停電でもしたらどうするの？ 今度は死人が出るかもしれない。ううん、もっと酷い被害が出るかもしれないのよ。この地下が崩れたみたいだね」

「それは……」

「退院した後は？ 自動車の玉突き事故でも起こす？ それとも、また鉄柱でも振つてくるのかしら？」

衿那は八つ当たりのように、今までの経験から起きうる不幸をざっと述べてみせる。

「……ここから抜け出せたところで、どうせ何も変わりはないわよ……何も……」

◇

衿那のネガティブな発言に、命は気の利いた言葉をかけることができずにいた。

「大丈夫」「そのうち、きつといいことがある」

そんな安易な慰めなど、口にしたところで、きつと彼女の心に届きはしないだろう。

——どうしよう……星野先生から聞いたあの話、今の衿ちゃんに伝えるべきなのか

……。

数時間前。養護教諭の星野梨花子から聞かされた例の話。未だに半信半疑ではあったが、親友の不幸を終わらせることができるという、彼女の言葉に命は微かな希望を抱いていた。

だが、衿那の光を失くした、諦めきつた瞳が命の喉の奥を詰まらせる。

今の彼女に、自分ですら信じ切れていないことを伝えても意味などない。何を言っても伝わりそうにない現状に、命の瞳からも知らず知らずに光が失せていく。

ところが——

「どうせ、何も変わらないなら……いつそ、このまま、ここで——」

「——」

無気力に衿那の口から発せられたその言葉に、命は——。

◇

「おい、貴様！ さつきから黙って聞いておれば、みつともないことをうじうじとー」

衿那の弱気な態度に、初めに口火を切ったのは鈴鹿だった。彼女はその場にしゃがみ込み、顔近づけながら衿那を睨みつける。

「お主を助けに来た友に、礼の一つも述べずに愚痴ばかりたれおって、もつとシャキツとせんか！」

「はあ？ ……うつさいわね！ そもそもアンタには関係ないでしょ。こんなところまで出しやばつて、アンタこそ何様のつもりよ！」

一瞬間を食らったようだが、衿那も負けずと、身動きとれぬ体制のまま睨み返す。二人の視線は交わり、火花がバチバチと飛び散る。一触即発、熱気の孕んだ緊迫した空気――。

「――卑怯だよ、衿ちゃん……」

しかし、その熱気は即座に凍りつく。

「……………え？」 「……………は？」

威勢よく対峙していた衿那と鈴鹿の二人が揃って目を丸くし、両者共に、発言者であろう少女――比佐命の方へと振り返る。その際、彼女の纏う空気の変化を、衿那だけは敏感に感じ取っていた。

それまで悲しげながらも、自分を慕い、優しく、その身を気遣ってくれた命であった

が、今の彼女から、そんな慈愛や温かさは感じられない。親友として長い時を過ごしてきた衿那ですら、その雰囲気の変わりように、ただ戸惑うばかりだった。

「み、命？　な、何よ、いきなり……」

衿那の位置からでは俯く命の表情を窺い知ることにはできないが、確実にわかることがある。彼女は今——『怒っている』。それは他でもなく、榎田衿那に対しての怒りだった。

「だってそうでしょう？　今の衿ちゃんには不幸だって自分を憐れんで、悲劇のヒロイン気取って言い訳して逃げてるだけの！　ただの卑怯者よ！」

「なっ！　言い訳って……！」

親友のまさかの発言に、少なからずショックを受ける衿那だったが、すぐに言い返す。

「けど！　けど、事実じゃない！　現に今もこうやって私は！」

「それが——それが！　言い訳だって言ってるのよ！」

だが、そんな衿那の言い分が、命の見幕によって押しつぶされる。

「不幸だからなに!?　周りの被害がなに!?　衿ちゃん自身はそれでいいの!?　不幸だって甘えたままで終わらして、そんな不幸に怯えるだけの臆病者で終わっていいの!?」

「——っ！　いいわけないじゃない……こんな、こんな終わり方、私だってね——」

「だったら——戦ってよ」

「!!」

そこで、衿那は見た。伏せていた顔を上げた親友の双眸から、とめどなく涙が流れ出ているのを――

「……衿ちゃん言ったよね。あの日、私に言ったよね、「戦え」って……」

それは、二人が出会ったずっと昔のことであつたが、衿那は鮮明に覚えていた。

◇

七年前

その日、櫛田衿那は偶々その現場を目撃していた。

通学路のバス停。その近くの公園で、小学生の衿那はいつものようにバスが来るのを待っていた。ベンチに座り、特にやることもなく携帯をいじっている彼女。するとその視界の端で、一人の少女が同級生と思しき複数の女子たちに囲まれ、苛めを受けていたのだ。

最初にその光景を目撃した際――衿那はこれといって何かしようとは考えなかった。

いじめなどという低俗な行為に、進んで関わりとうとは思わなかったし、見ず知らずの赤の他人の問題に首を突っ込んでもしようがないと、どこか冷めた目で彼女たちを眺めていた。

しかし、毎日のようにいじめの現場を目撃し、まったくといっていいほど同じことを

繰り返すいじめっ子たちを見ているのは、流石にいい気分にはなれない。また、何も抵抗せず、なすがままにされている少女の方にも、衿那は腹を立てていた。

そして——とうとう衿那は彼女たちに声をかけた。

いじめっ子たちを適当にあしらった後、衿那はその少女——比佐命と言葉を交わす。

『——アンタ！　なんで黙ったままで、やられっぱなしなのよ！』

『——嫌なら嫌だって、はつきり言わなきゃ、なにも伝わらないじゃない！』

『——言葉で伝えきれないなら、行動で示しなさい！』

『——構うことないわ。右の頬殴られたら、左の頬を殴り返すのよ！』

『——だから！　戦いなさい！』

ほとんど一方的に、自分の言いたいことを言い、返事も待たずその日は別れた。

翌日——昨日と同じ時間、同じ公園に衿那は来ていた。

正直、あの程度の言葉で、何かが変わるとは思っていなかった。どうせ昨日と変わらない、また同じように苛められているだろうと。

だが、そこにいたのは一人、どこか清々しい表情をしていた命一人だけだった。

聞けば、彼女は困難な現状を変えようと、いじめっ子たちと戦う道を選んだのだという。最初の一步は、いじめっ子たちの顔面に、拳を叩き込んだところから始めたらしい。

衿那は純粋に驚いた。自分の言葉がきっかけとはいえ、まさか、昨日まで何の抵抗も

できなかつた彼女が、こうも早くに反旗を翻すとは思つてもみなかつたからだ。大人しい外見とは裏腹に、心にしっかりとした芯を秘めた強い少女だと、衿那は素直に感心した。

季節が巡り、時が過ぎ、高校生になつても、命の根本の強さに変わりはなかつた。なにせ『不幸』となつたこの身を案じ、こんなところまで追いかけてくるほどだ。

いじめつ子の一件以降、友人として共に過ごす彼女たちを見て、周囲の人々はいつも衿那が命を引つ張つているように見えていたらしいが、そうではなかつた。

いつも大人しいくせに、いざというときに芯の強さを垣間見せる——比佐命。

日頃強がつてばかりで、本当に気を強く持たなければならぬときに弱気な——榎田衿那。

今更ながらに気づく。

親友の存在に支えられていたのは……本当に救われていたのは、自分の方なのだ。だからこそ——これ以上、彼女を巻き込みたくはなかつたのだが——

◇

それでも命は来てしまった。

あの日の言葉を返しに、『戦え』と言つてくれた親友に、同じ言葉をかけるために。

「私はその言葉で立ち向かえたんだよ？　そして、そのきつかけをくれたのは他の誰で

もない。衿ちゃん何だよ？ その衿ちゃんが……戦いもせずに逃げちゃ……ダメ、なんだから……」

「命………」

泣きじやくりながら自身の気持ちをつと吐露する命。その声は、今にも消え入りそうなほどに弱弱しく、儂いものだったが、言葉は確実に衿那の胸の内へと響いた。ぶつけられた親友の思いの丈に、迂闊な言葉など吐ける筈もなく、衿那はただ押し黙るしかできない。

しかし、襲いかかる『不幸』は、少女たちに考える猶予すら与えなかった。

再び——大地が鳴動する。

『!!』

さきほどの本震と同等、あるいはそれ以上の規模の轟音が地下に鳴り響く。さらなる追い討ちに地下が軋み声を上げ、走る亀裂が瞬く間に天井を侵食していく。いつ崩壊してもおかしくない。そんな状況下で、衿那は瞬時に決断を下した。

「ちよつと、アンター！」

「ん？ 農か？」

凄まじい縦揺れにもかかわらず、何故か平然と立っている鈴鹿に、衿那は声を張り上げる。

「早く！ 命を連れてここから逃げなさい！」

「衿ちゃん！」

その発言に、命は咎めるような悲鳴を上げるが、衿那は既に腹を括っていた。

一緒に逃げようにも、彼女は瓦礫に挟まれ動けずにいるのだ。自分を見捨てて、一刻も早くこの危険地帯から抜ける。それが今できる、最善な行動であると衿那は判断する。

そんな衿那の苦渋の決断に対し、鈴鹿は堂々と答えた。

「——断る!!」

「……なっ！」

あまりにも、あつさりとした鈴鹿の返答に衿那は絶句する。だが——

「逃げるだど？ ふざけるなよ、小娘！ 何故この儂が、たかが地震如きのために尻尾を巻いておめおめと引き下がらなければならぬ！ 舐めたことをほざくでないわい！」

憤慨するように吐き捨てる鈴鹿の言いように、二人の少女はただ啞然となった。

「不幸？ 幸運？ 笑わせてくれる！ そんな、貴様ら人間どものちっぽけな物差しで、

この儂を御しきれると本気で思っておるのか？ だとしたら、それは大変な侮辱だぞ

！」

「じ、神宮寺さん？」

「ちよ、アンタ……さっきから何を言つて?」

こうしている間にも、揺れは激しさを増し、地下の崩落は確実に進んでいる。だが、そうした絶体絶命の渦中でありながら、衿那も命も鈴鹿から目を離せずにいる。

二人の中の『なにか』が彼女から目を逸らすな、その言葉を聞き漏らすなと警告している。

それは直感とも、第六感とでも呼ぶべき、人としての本能の部分からくるもの。そして、そんな二人の視線を背に、鈴鹿は天井を仰ぎ見ながら言つてのける。

「この程度の『呪い』に儂らは決して屈さぬ! 跪かぬ! どんな不運だろうが物の数ではない! それを今、我が身をもって貴様らに証明してやろう!」

瞳の奥に、これから降り注がれるであろう『不幸』への闘志を宿らせながら。

少女、神宮寺鈴鹿はその雄姿を……否!!

その異形なる姿を——人間たちの前に晒す。

◇

余震が起こる、ほんの数分前。

渋谷を中心として発生した地震に、地上は蜂の巣をつついたような騒ぎになっていた。揺れと同時に人々は恐怖し、いつかどこかの特番でやっていたような、都市崩壊最悪のシナリオを想像した者も、少なくともはなかっただろう。

しかし、地震自体はすぐ止み、徐々に揺れが収まるにつれ、人々は落ち着きを取り戻す。現在は建物の中にいた者たちが、念のため外に移動して様子を見ている段階だ。

ここ、宮下公園交差点付近にも、避難してきた人々がかなり集まってきた。万が一に備え、人々は建物から離れ、人の波は自然と車道に身を寄せるようになっていた。

突如の災害の到来に恐怖していた人々も、現状においてその表情は幾分か晴れている。とりあえずの一時避難が完了したことで、気が緩んでいるのだろう。周囲の人々と軽く談笑する者もいれば、ネットで他の場所の情報を漁る者もちらほら。胸の内に危機感を持ちあわせていても、どこかで「大丈夫」と、思いたい気持ちがあるのだ。

そのためか、再び襲いかかってきた余震に対しても、人々の反応はどこか薄いものだった。

「きゃっ！ ちょっと、また揺れ出したんだけど！」

「震度4くらいか？ 念のためビルから離れなさい、窓ガラスが割れるかもしれないから」

「へ、平気さ！ このくらいなら問題ない！」

わずかに浮足立つも、この程度の『不幸』などすぐに去っていくだろう、と。

その場に留まり、ひとまず揺れが収まるのを待とうとした——まさにその瞬間、咆哮が世界を震わせる。

『オオオオオオオオオオオオオオオオ——!!』
『!?!』

その叫びは、突然の地震でも余裕を保っていた、全ての人々の思考を止めた。

大半の者たちが、生涯で初めて耳にするその叫び声に、一斉に口を閉ざす。

人間のモノでも、猛獣のモノでもない。もつと何か別の、得体の知れない『なにか』の
吼え。

聞くもの全てに恐怖、畏怖といった感情を呼び覚まさせる——けたたましい雄叫び。
魂の奥底を震え上がらせる咆哮、あまりにも巨大な咆哮。

地の底からせり上がったそれは、まるで天へと昇る竜の如く、高く、遠く、真っ直ぐ
突き上げるように街全体まで浸透していく。

まるで声の主が、己の存在をこの街に刻みつけるかのように。

ややあつて、叫びは止む。地震の方は相変わらずだったが、人々にとつてそんなこと
はどうでもいいことであった。誰もがその咆哮の次にくるであろう『なにか』を予見し、
固唾を呑んで身構える。

そして——その予見は、現実のものとして顕現する。

さきほどの咆哮とは全く違う、物理的な破壊音。ミサイルでも着弾したかのような爆
発音が響き渡る。その爆発音に悲鳴を上げながら、反射的に耳を閉じる群衆たち。

そんな彼らを、さらなる衝撃波が襲う。

大気を震わすほどの威力の、戦闘機が地上スレスレを通り過ぎたかのようなソニックブームが、建物の窓という窓をことごとく粉碎し、周囲一帯にガラス片の雨を降らせる。突如として発生した凶器の雨に、不用心に建物側にいた人間が頭を抱えて身を守る。安全だと高を括っていた危機意識の甘い者は、ガラス片に切り裂かれる痛みに、手痛い教訓を得ることになった。

そして——世界は静寂を取り戻す。

いつの間にか地震も止み、暴力の具現とも呼ぶべき嵐も過ぎ去っていった。

危機が去ったことに誰もが心底安堵しながら、恐る恐る顔を上げ、閉じていた目を開く。

「……なんだよ……あれ……」

それが誰の呟きだったのかなど、わからないし、その詮索に意味などなかった。

何故ならそれは、その光景を目撃した全ての人間が例外なく思い、呟いたことだったからだ。

人々の目の前には——穴が広がっていた。

多くの人々の往来する街中に、突如として現れたそれは、まるで近づくもの全てを飲

み込まんとする奈落の底のように——地下三階から地上までを貫通していた。

何故こんなものかと考える一方で、人々は悟つただろう。

この穴を開けたモノと、あの咆哮の主が——同じ存在であると。

それが、ただの人間の仕業によるものではないと、理解したことだろう。

その化け物の名は——

「ん……………」

櫛田衿那は目を覚ます。そつと目を開くと、そこには見知らぬ真つ白い天井が広がっていた。

どうやら、自分はベッドの上に寝かされているらしい、温かい毛布の感触が、ここが先刻まで自分がいた冷たく薄暗い地下でないことを教えてくれている。どこかの病院だろうか。衿那は辺りを見渡そうと視線を動かし首を横に向け——隣のベッドで寝かされている比佐命の姿が目飛び込んできた。

「命——っ!？」

慌てて身を起こして彼女へ駆け寄ろうとしたが、瞬間、鈍い痛みが衿那の全身を襲い、激痛に顔を歪める。すると、聞き覚えのある女性の声が衿那に声をかけていた。

「あら、お目覚めかしら?」

「アンタは……………確か……………」

入学初日のHRの際、教壇の上に立った白衣の女性が、すぐ側の椅子に腰掛けていたのだ。

「気分はどう？ 櫛田衿那さん」

その養護教諭——星野梨花子はゆっくりと衿那に近づき、彼女の額にそつと手を当てる。

「……………うん、熱はもう引いたみたい。けどその様子じゃあ、体の方は本調子じゃないわね」

「……………ねえ、ここどこよ？ なんでアンタがここにいんの？ 命は、大丈夫なの？」

こちらの心配をする梨花子に、衿那はいくつかの疑問を提示する。まだ頭に血が巡りきっていないのか、言葉はまとまらず、矢継ぎ早に質問が飛びだしたが、せっかちな衿那の問いに、梨花子は一つ一つ丁寧に答えて見せた。

「ここは渋谷区桜丘町にある森羅の本社ビルよ。私はここで貴方達の看病をしていたところ。命ちゃんに関しては心配いらないわ。眠っているのは疲労のせいで、怪我による外傷ではないから。今の貴方ほど、重症ではないから安心していいわ」

「……………そ、そう？」

余計なことを省いた簡潔すぎる返答。正直、わからないことが増えただけだった。

しかし、命が無事である。その一点だけをはつきりと理解し、衿那は安堵する。

「命ちゃん……………一晩中、貴方の看病をしたみたいね。流石に疲れが溜まって、貴方が寝ている側でそのまま眠っちゃったから、こっちのベッドに寝かしておいたのよ」

「……」

そんな状態になるまで看病をしてくれた親友の手厚い看護に、胸の奥から熱いものがこみ上げ、自然と瞳の奥が潤んでくる。しかし、そんな親友の行為に甘え、いつまでもここに留まっているわけにはいかない。全身が悲鳴を上げるのにも構わず、衿那はベッドから身を起こす。

「っ……」

「どうしたの？ トイレなら廊下を出て、すぐ右の突き当りにあるけど？」

「世話になったわね……」

無理をしても立ち上がろうとする衿那に、梨花子が冗談交じりに声をかけたが、世話になった礼を短く述べ、彼女は痛みに構わずここから立ち去ろうと、足を引きずり歩み出した。

先の銀行強盗事件や、地震による地下崩落の一件で衿那は察する。このままここに居続けられ、またいつ『不幸』が降りかかるか、わかったものではない。

厄災は既に自分の予想をはるかに超え、はつきりとした敵意となつて襲つてくる。最悪、ビル倒壊なんて事態すらありえるかもしれない。

——せめて、命だけでも……。

懲りずにそんなことを考える衿那。そんな彼女に、梨花子は気楽な調子で言つてのけ

た。

「ああ、『呪い』のことが心配なら大丈夫よ？　ここ森羅本社ビルは霊脈の上に建てられて設計されているから、ちよつとやそつとの災害程度ではビクともしないわ」

「……………？」

「まあ、そのせいで、外で起きていた地震にすら気づかないんだから、おかしな話よね」
さも当たり前のように言葉を紡ぐ梨花子に、衿那はクエスチョンマークを浮かべる。

——呪い？　霊脈？　さつきから、何言つてんのよ、この女？

「まあ、だからといって、ずっとここにいてもらうわけにもいかないし……………とりあえず、早いうちに、何とかしなくちゃね……………」

「……………何とかつて！　そんな簡単に言わないでよ！」

その言葉に、衿那の我慢が限界に達する。理解不能な単語を並べる梨花子に苛立ちが募っていたのもあるが、それ以上に、無神経ともとれる発言が衿那の神経を逆撫でした。「アンタに何がわかるつてのよ！　私が、私たちがどれだけ苦しんできたと思つてんの！　この『不幸』に、どれだけ振り回されてきたと思つてんのよ！　まだ顔を合わせた程度で今から教師気取り？　生徒の悩みに無遠慮に首を突つ込む、熱血教師にでもなつたつも!？」

彼女にこんなことを言つてもしょうがないと、わかつていながらも衿那は叫ぶ。八つ

当たり以外の何物でもない、衿那の怒号。それでも、梨花子は動揺する素振りすら見せず、真正面からその怒りを受け止める。

「……何とかしてみせるわよ」

そして、梨花子は一教師として、悩み苦しむ生徒へ、毅然とした態度で答えてみせた。「そのための学校で、そのための教師でしょ?」

◇

同時刻 同森羅ビル内 九十九明の執務室

「——やってくれやがったな!!」

渋谷の地下崩壊から、一夜明けた翌日。

崩落に巻き込まれ、二人の少女が運び込まれた森羅ビル内の別の一室にて。テッドはあらん限りの力を腹に込め、魂が震えるほどの叫び声を上げていた。

「……な、なんなのだ、テッド。今朝から顔を合わせるたびにそれではないか……」

「それだけのことを、しでかしてくれたんですからね!」

その怒りの矛先たる少女、神宮寺鈴鹿はどこか逃げ腰でその叫びと相對する。

現在時刻は昼過ぎ。鈴鹿の高校生活二日目も、健康診断や部活説明会等で終わり、彼女は森羅ビルに帰宅した。彼女自身、崩壊した地下にいたのだが、その体には傷らしい傷など全くなく、問題なく通学していた。一応、彼女も櫛田衿那の『不幸』に巻き込ま

れた被害者と言えば被害者なのだが、テッドの叱責には、彼女に対する労わりの心など微塵もなかった。

「……同感ですね」

兄の主張に同意し頷くメリーも、鈴鹿へ非難の目を向けている。

「ぬぐぐぐ……」

そんな他者の批判。普段の鈴鹿なら豪快に笑い飛ばそうものだが、今回ばかりは少しやり過ぎたと自覚しているのか、これといつて言い返すこともできず押し黙る。

「ふう……。テッド、メリー。そのくらいにしておきなさい」

そこへ、会社の書類を整理していた九十九が、見るに見かねて助け船を出す。双子と違い、怒っている様子もなければ、特別取り乱した様子もない。

「彼女も十分反省している。それ以上はただの罵倒でしかないよ」

「……むう」

論すような彼の言葉に、一旦矛を収めるテッド。しかし、すぐに数枚の新聞紙を取り出し、それをテーブルに叩きつけながら、尚も叫ぶ。

「見て下さいよ、これ！ 今朝の朝刊！ どこの新聞社も一面でこの大事故を報じてますよー！」

彼の指摘するとおり。どの一面にも渋谷の中心地に開いた、大穴の写真が掲載されて

いる。テッドはさらに声を荒げ、シャウトする。

「こんなもん隠蔽しようがないでしょ！　こんだけ目撃者がいて、こんなデツカイ物的証拠まで残って！　ニュースも今朝からずっとこればかり。ネットの掲示板にもすごい勢いで書き込まれてるんですよ？　情報操作も間に合わない。どうすんの!?!」

「……だから落ち着きたまえ、テッド。思考が悪いほうにループしているよ」

荒ぶるテッドへ、九十九はやんわりと言葉を紡いでいく。

「人の噂も七十五日さ。時間が経って、穴の修復も終わればこの話題も自然消滅するよ。特に日本人はその気質が強くてね。『熱しやすく冷めやすい』とは、よく言ったものだろう?」

「……七十五日で塞げるものですか、こんな大穴?」

「それは業者の頑張り次第だろうね。まあ、それはいいとしてだ。一昨日の銀行強盗のときのように、事件現場で鈴鹿君の姿がはつきり目撃されたわけではないのだろう?」

「……ええ、一応は。兄さんも私も、混乱に乗じて上手く彼女らを運びこむことができました」

頭を抱える兄に代わり、メリーが冷静な態度で受け答える。

あのとき、『捜し屋』から提供された情報を元に、双子はすぐに現場に駆けつけた。そ

して、大穴の底で気絶した少女二人を抱きかかえた鈴鹿を、人目から避けるよう誘導し、素早くその場を後にしたのだ。大穴もそうだが、降り注いだガラス片の間接的被害にも、混乱が広がっていたため、こっそり抜け出すことは、そこまで難しいことではない。だが、それでも絶対に目撃されていないとは保障できず、それこそ誰かに、携帯電話のカメラなどに取られ、ネットの海に動画や画像が流出する可能性など、否定はできない。

「それに——たとえ見られていたとしても、いったい誰が信じると言うんだい？」
しかし、九十九は腰掛けていた椅子から立ち上がり、両手を広げて芝居掛かった仕草で笑う。

自らの友人が起こしたその所業を、まるで自らの行いのように、誇るように。

「誰も信じはしないだろう。この光景が一人の少女によって生み出されたものだなどと、この大穴が彼女の——拳の一撃によるものなどと、誰も考えはしないさ」



森羅ビル内 空き部屋

「……………アンタさ、さつき『呪い』がどうか言つてたわよね？」

胸に抱えていた怒りを感情のままに吐き出したおかげか、やや落ち着きを取り戻した衿那。梨花子に振る舞われた温かい紅茶を口にしながら、思い出したように口にする。

「あれって、どういう意味？」

「真つ直ぐ相手の意図を量ろうと問う。その問いに、梨花子は氣負うこともなく答える。

「どうって……そのままの意味よ？ 今の貴方は『呪われている』。ううん、この場合、『憑かれている』と言った方が正しいかもしれないわね」

その発言に眉を顰め、口を閉ざす衿那だったが、それに構わず梨花子の言葉は続けられる。

「貴方だつて薄々は勘づいていないでしょ？ 自分の身に降りかかる『不幸』が普通じゃない。超常的で、常識や科学では説明できない、別の法則によるものだつてことくらいは？」

「……………まあ、それは、そうだけど」

不満げに目を逸らしながらも、澁々と衿那は頷く。本人もそのことは理解しているのだろう。だが、完全に納得するにはまだ足りない。梨花子はその常識という名の壁をとつばらうため、この世の真理の一つを打ち明けることにした。

もつとも、疑心暗鬼する今の衿那に言葉を重ねても意味はない。梨花子は分かり易く、手つ取り早く、その『力』の証明をするための行動をとることにする。

懐から一枚の紙切れを取り出す。彼女らの業界で『護符』と呼ばれる道具だ。梨花子

はそれを天に掲げ、衿那にも聞こえるよう、護符へと命令を送った。

「燃えろ」

刹那——護符が勢いよく燃え上がる。マッチで紙に火をつける程度ではない。焚火に灯油を注いだような勢いで燃え盛る炎の前に、衿那は驚愕に目を見開く。

「これで……少しは私の話に興味を持ってくれたかしら？——消えろ」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、護符へ再度命令を送る梨花子。炎は幻のように掻き消え、梨花子の手には原型を保ったままの護符が握られている。

「……………」

その現象を前に衿那は言葉を失う。当然といえば、当然の反応に暫し間が置かれ、ようやく我を取り戻した衿那は、絞り出すような声で梨花子に問いかけた。

「アンタ……いったい何者よ……」

強がってはいるものの、どこか恐怖心を持った言葉に、梨花子は優しい声で答える。「別に、ただの養護教諭よ……本職はね。ただ、ちよつと趣味で陰陽術を嗜んでるだけの」

「陰陽術って……？ あの陰陽師？ あへのせいめい 安部清明とかで有名な、あれ？」

「安倍清明……ふふふ。そうよね。やつぱり陰陽師と言えば安倍清明よね……ふふふ」

衿那の抱いた連想に、何故か笑いを堪えるようにして、梨花子はその言葉を肯定する。

彼女のそんな反応に動揺しながら、衿那は続けざまに、さらなる疑問をぶつける。

それはこれから『呪い』とやらの話を詳しく聞いておくのとは別に、ここではつきりさせておきたいことであつた。

「……じゃあ、あいつは？ あいつは……いったい何者なの？」

衿那の声は震えていた。笑みを溢していた筈の梨花子ですら、一瞬でその顔から表情の一切が消え去る。

『あいつ』が誰を指しているのか、言わずともわかつている。

神宮寺鈴鹿。

崩れゆく地下通路から衿那と命を救つた、二人にとつての恩人だろう。

しかし、その恩人に対して、衿那が感じているものは、紛れもない——恐怖であつた。

「あいつも……アンタと同じ陰陽師つてや——」

「——違うわ」

梨花子の言葉に、部屋中に重苦しい空気が圧しかかる。

「彼女は、根本から人間と存在を異とするモノ。この国では昔から、彼女のような異形を妖怪、物の怪、魔物と称してきたわ。口が悪い人は『化け物』なんて一括りに呼んでいいけどね」

「……化け物」

實際、彼女——神宮寺鈴鹿は人間ではない。

自他ともに認める化け物であり、人ならざる力をその身に秘めている。

「ただ……よくある話だけど、化け物にも色々いるわ。人間にだって悪人、善人がいるように、化け物にも、ただ人々に害を成すだけのものもあれば、無害な奴だっている」

目の前の少女の恐怖心を少しでも拭い去ろうと、言葉を選んで梨花子は語りかける。

「神宮寺さんの一族はその中でも特殊だね。人間に対してもそれなりに友好的よ。悪戯に刺激しない限り、彼女の方から貴方達に危害を加えるような真似もしないでしょうね」

しかし、そんな彼女の言葉にも、衿那の顔色が完全に晴れることはない。

「一族って、なによ」

未だ恐怖心が残る衿那から、かろうじて出てきた言葉がそれだけだった。

「貴方も知ってると思うわ……知らない方がおかしいか、ここ日本では……」

「……………」

『『化け物の代名詞』、『異形そのもの』。この国の人間は古来より恐怖と、畏怖と、敬意を持って彼等のことをこう呼ぶわ』

そして梨花子は口にした。鈴鹿たち一族を指す言葉、その『伝承』の名を——

「その化け物の名前を——『鬼』と、ね……」



——鬼。

この島国に住まう者であれば、知らぬ者などいはいはしない『化け物』の呼び名。

しかし、高い知名度があるその一方で、それがいったいどういった存在を指すものであるのか、詳しい定義についてはひどく曖昧だ。

真つ先に連想されるのは巻き毛に角を生やした、虎柄のパンツで金棒を振り回す姿だろう。だが、それだけが鬼の全てではない。日本には、さらに多くの伝承で彼らの存在が書き記されている。

ときには、人を襲う化け物として。

ときには、災いをもたらす疫病として。

ときには、伝統的民俗行事として。

ときには、閻魔に仕える地獄の獄卒として。

ときには、風神、雷神といった天災を操る神々として。

ときには、物語の敵役として。

ときには、便利なことわざとして。

ときには、外道な人間を形容する言葉として。

多種多様、様々な姿形で、常に人間と歴史を共に歩んできた存在。

決して一括りに、一言で説明することができぬ彼等『鬼』と言う異形の怪物。

彼女——神宮寺鈴鹿もまた、その鬼の一角。

自らを『鬼神きしんの眷属』と名乗る——真正正銘の化け物なのである。

しかし、遙か昔から人々に恐れられてきた彼ら化け物も、現代社会において、その存在は既に過去のものとなした。

鈴鹿たち『鬼神の眷属』のように、山奥に里を作り、結界を張って静かに暮らしているものたちもいるが、その大半は既に——人の手によって滅ぼされている。

人間の高度な社会の発展と共に、自然消滅していったものいるが、ほとんどの妖たちは彼ら、『陰陽師』の手によって、その存在を地上から抹消されていたのだ。

陰陽師。一般には学者やただの占い師として、かつて国家に仕えていた官職として知られているが、その実、霊能力者としての側面も強く持ち合わせていた。

化け物たちが最盛期だった、平安時代を全盛期とした彼らは、その時代に様々な秘術を秘密裏に確立。

◇ その血脈は、科学文明が発展した現代にも脈々と受け継がれている。

森羅本社ビル 夕方 九十九明の執務室

「さて……では報告を聞こうか。梨花子君」

「ええ……」

陰陽師の一人、九十九明は同じ陰陽師である星野梨花子から、櫛田衿那に取り憑いている『呪詛』についての調査報告を受けていた。

梨花子は目を覚ました衿那に事情を話し終え、すぐにその足で九十九の元に向かった。

九十九が調査を命じてから、まだ一日しか経過していないが、既に大半のことを調べ終えたらしい。手元の資料スラスラと読み進めながら、梨花子は調査結果を口にしていく。

「まず、言っておくけど。今回の一件。どうやらあの『メフィスト』が絡んでいるらしいわ」

「メフィスト……。あの『仮面』か。それはまた、厄介な相手だね……」

梨花子の口から出てきた人物の名に、九十九は椅子に背もたれを預け、ため息を溢していた。

メフィストとはここ最近、何かと界限を騒がせている、とある外道術者の通称である。

日本において、陰陽師やそれに類する術者の類は、原則として『八咫鳥』やたがらすに所属することが義務づけられている。八咫鳥とは、京都を拠点にしている陰陽師の集団。数多く

の術者の家系が名を連ねる秘密結社だ。何を隠そう、九十九も、梨花子も、その八咫やたの一員なのである。

彼らの主な仕事は、全国に点在する神社仏閣を管理、運営していくことにある。そのための人材を本部で教育、指導し、各地の支部へと派遣していく。

教育内容は一般教養を含め、神道学や仏教学。さらに、術者としての才能に恵まれた者に、陰陽術を始めとした秘術を伝授し、陰陽師としての教育を施していくのである。

しかし、八咫鳥にも籍を置かず、その秘術を悪用する者たちがいる。

それが『外道術者』だ。彼らの大多数は、三流の小物。そうたいした悪事もできず、下手に派手に騒さわごうものなら、即座に八咫鳥の陰陽師たちが駆けつけ、呆気なく御用となる。

だがその中でも、メフィストは取り分け扱いの難しい難物だった。

その呼び名からわかるように、彼(?)はこの国の人間ではない。もとは欧州の方で暗躍していた外道術者だったのだが、多くの悪事に手を染め、各方面から恨みを買ひ、討伐されかけたところを生命いのちから逃にげだし、この極東の島国——日本へとやって来た。

懲りるということを知らないのか。彼はこの地でも、かつてと同じような悪事を繰り返している。実験と称し、呪詛をばら撒き、これまで幾度となく、何の関係もない人々

を苦しめてきた。櫛田衿那もまた、そうした彼の『実験』の犠牲者の一人だったのである。

「呪詛の種類は『蠱毒』^{こどく}。ここ数年、メフィストがよく多用している術式のようなね。本部の方にもいくつか報告が上がってから、特定にそう時間もかからなかったわ」

「ほう、蠱毒ときたか……これはまた、随分と原始的な呪いを持ってきたものだ」

梨花子はさらに詳細な内容、衿那の身を蝕む呪いの正体について九十九に話した。

蠱毒とは、発祥起源を古代中国、およそ三千年以上前に遡るほど、歴史ある呪術の一つだ。

生き物たちを密閉空間で共食いさせ、最後に生き残った一匹を呪詛の媒介として用いる。その一匹には、死んでいった他の生き物たちの『恨み』『怨念』『生への執着』などが宿り、それらを核として完成する、動物を用いた呪詛——それを『蠱毒』と呼ぶのである。

「媒介となった生き物は？ それがわかれば、後の手順もスムーズに済むと思うが？」
「そこまではまだ……解析には、もう少し時間が欲しいところね……」

九十九の質問に対し、梨花子は言い淀む。

蠱毒は一般的に、毒虫などを媒介として用いるのが主流だが、使われた動物などに

よつて、その呼び名も変わる。犬ならば『犬神』^{いぬがみ}、猫ならば『猫鬼』^{びようき}など。

また、殺し合いの舞台として使われる場所や日付などにもよつて、効果や威力が違うという説もあるが、そこまで詳しい記述は残っていない。少なくとも、邪法に分類される呪術だ。八咫に所属するような真つ当な術者ならば、研究の段階で処罰の対象となろう。

「ふむ……しかし、そう慌てる必要もないか」

自分の質問に対し、明確な返答がなかったことにも、九十九は特に動じなかった。

「呪詛の種類がわかったのなら、後は『解呪』するだけだ。解決も時間の問題だろう」

呪詛には、かけ方とセットで、解き方というものが存在する。どのように複雑に編み込まれた高度な呪術であろうとも、そこに例外はない。それを見つけ出し、元のあるべき状態へと解きほぐす。特に陰陽師はその術に長けており、当然、八咫で陰陽術を学んだ梨花子も、その術を心得ている——筈なのだ。

「それ何だけどね……」

「何か問題でも？」

再び言い淀む梨花子は、苦虫を押し潰したような顔をする。

「実は……京都の方から、榎田さんの解呪を待つように言われているのよ」

「……」

『メフィストの隠れ家を特定したい。そのために、是が非でも協力してもらえ!』
 ……」

呪いをかけた術者と、かけられた側の被害者は、縁によって結ばれる。所謂、『悪縁』とも呼ばれる縁だが、その糸を手繰り寄せることで、向こう側にいる術者へ影響を与えることも可能だ。『呪い返し』で呪詛を返すことも、『追跡』で現在地を探り当てることも。

「いい加減、メフィストに振り回されるのもウンザリつてことね。この機にメフィストをとつ捕まえて、頭痛の種を取り除いておきたい……つてのが、お偉いさんの意見よ……」

「なるほど、道理で……」

道理で、先ほどから梨花子の機嫌が悪いわけだと、九十九は納得する。

「つまるところ、櫛田さんをダシに、メフィストの尻尾を掴みたい。というわけだ」

「ええ……まったくもって度し難いけど……そういうことよ」

言うなれば、これは囧だ。自分たちの都合のため、衿那には今しばらくの間、『不幸』のままでもらうということ。呪いを解いてしまえば、その時点でメフィストとの縁は途絶えてしまう。この千載一遇のチャンス、八咫鳥としても、逃すわけにはいかないのだろう。

梨花子は刻印の教師として、生徒である衿那を危険に晒すその決定に納得していないようだが、彼女も組織の人間である以上、その方針に従うしかない。メフィストを放置しておく危険性だつて重々承知している。そういった複雑な感情が、梨花子の表情から滲み出ていた。

「了解した。では、彼女の身柄は今暫くこちらで預かろう。このビル内は、一種のパワースポットだからね。ここでなら、呪いの効果もいくらか緩和されるだろう」

九十九は梨花子の心情に配慮し、自ら衿那の保護を申し出る。

「……ええ、そうしてくれると助かるわ」

その気遣いに心から感謝し、梨花子は真摯に礼を述べるのであった。

「——さて、もうこんな時間か……そろそろ夕飯の支度をしなくては」

その後、蠱毒への今後の対処を検討する二人だったが、暫くして、九十九は腕時計の針に目をやりながら、席を立つ。既に日も暮れ、外もすっかり暗くなっていた。

「どうだい、梨花子君？ 久しぶりに食べていかないかい？ 何だつたらそのまま泊っていくといい。榎田さんの容体も、気になるところだろうからね」

キッチンに向かおうとした九十九は、そう梨花子へ声をかける。

「……そうね、せっかくだから、そうさせてもらいましょうか」

九十九の提案に少し考えてから、梨花子はそのように返答する。衿那の容体は勿論だが、これから家に帰り、一人夕食の用意をするのも面倒だ。久しぶりに九十九の料理を堪能し、明日以降の忙しい日々を乗り切ろうと、決意を新たにする梨花子。

「ん？ 失礼……もしもし……ああ、これは！ 先日はどうも！」

だが、二人で食堂へ行こうとしたところで、九十九の携帯に着信が入った。

九十九は足を止め、先に行くように梨花子に視線で促す。水晶球ではなく、通常の連絡手段であったことから、おそらくは森羅の会長としての仕事の話だろうと、梨花子は察する。

部外者である自分が聞くのも悪いと思い、大人しく退室しようとするのだが。

「……何？」

訝し気な九十九の声色に、ドアノブにかけていた梨花子の手が止まる。そして、続けて呟かれた物騒な単語の響きに、思わずその場を振り返っていた。

「――脱走？」

テツド&メリー

森羅本社ビル 大浴場

九十九明の居住区の一角。そこに様々なレジャー施設で埋まっている階層があった。室内プールに、運動場、トレーニング機材満載のスポーツジムなど。そして、この『大浴場』も九十九の趣味として設置された施設の一つである。

本格的なスパ施設などと比べれば、大した規模でもないが、それでも、昔ながらの銭湯くらいの広さがある。きっちり男湯と女湯で別れており、脱衣所には洗濯機や自動販売機、マッサージチェアなどもあつて、かなり至り尽くせりな内容の造りになっていた。

「……………はあ」

女湯の浴槽には、肩まで湯につかり、ポカンと宙を見上げる比佐命の姿があつた。

彼女の視線の先の壁には、銭湯の定番ともいえる富士山の壁画が描かれており、そして、背後の洗い場では――

「む、もう『しゃんぷー』とやらが切れてしまったぞ。メリーよ。そっちの取ってくれ」
「……………あまり無駄に消費しないで下さい。いちいち補充するのも面倒なので。……………どうぞ」

「うむ、ご苦労！ いやあ、これ泡立てるのが面白くてのう！ ついつい使い込んでしま
う！」

「……………泡が目に入って、涙ぐんでしまえばいい」

化け物の少女と、金髪碧眼の少女が、何やら楽しそう(?)にしている光景であった。
何故、こんな事態になっているのだろうか。

命は、湯気で曇る視界越しに富士山を見上げながら、ほんの少し前の記憶を掘り返す。

◇

夜の森羅本社内の廊下。命は憂鬱そうな表情で、長椅子に腰掛けていた。

先刻まで疲労で寝込んでいたものの、衿那とは違い、目立った外傷があるわけでも
ない彼女は、こうしてベッドから起き上がったも何の問題もなかった。しかし、健康的
な肉体とは違い心が、気持ちの方が未だ優れずにいた。

その原因の一つは親友である、櫛田衿那との距離感。

先ほどまで二人は同じ部屋、隣合わせのベッドで休んでいたのだが、どうにも声をか
けづらい。あの絶体絶命の最中。無我夢中だったとはいえ、ずっと胸の奥にため込んで
いた気持ちを吐露したのだ。話した側も、聞いた側も気恥ずかしさで視線を合わせづら
かった。

もう一つ、衿那を蝕んでいるという『呪い』の件だ。

衿那の捜索にあたる前、保健室で命は、呪いについての話を梨花子から聞かされていた。あのときは、親友を捜し出すことに頭が一杯で後回しにしていたのだが、今考えてみると、信じ難い話である。だが、衿那の不幸が呪いの影響であるならば、それを解く方法があると梨花子は言った。命たちではどうすることもできない今、その可能性に賭ける他なかった。

そして、最後。それこそある意味、もつとも命を悩ませていた要因なのかもしれない。

——……神宮寺さんは『鬼』、『化け物』……人間じゃない……。

昨日知り合ったばかりの少女、神宮寺鈴鹿。

すこし風変わりなところを除けば、自分たちと同年代の少女でしかなかった、彼女の正体。目を覚ましてすぐに梨花子から説明を受けたのだが、先に目覚めて話を聞いていた衿那も、どこか動揺した面持ちであった。

命も、ついさつきまで隣人だった鈴鹿が人ではないという事実には、少なからずショックを受けていた。この先、鈴鹿とどう接するべきか、どんな顔をして会えばいいというのか。

「……はあ」

心配事、悩み事ばかりが募っていき、自然とため息も増えていく。

「——おい」

「えっ?」

そんな、心身共に俯く自分へかけられる声。バクンと命の心臓の鼓動が高鳴る。顔を上げると、そこには首を傾げながら自分の顔を覗き込む、鬼——神宮寺鈴鹿がいた。彼女は刻印の制服ではなく、Tシャツに半ズボンと随分とラフな格好をしている。

その後ろには、控えるようにして立っている双子の兄妹、テッドとメリーの姿も見えた。

「どうした? 溜息なんで吐きおつて。何か嫌なことでもあつたのか?」

「……あ、いえ……その……」

鈴鹿は命の落ち込み具合を心配して、声をかけてくれたようだ。そんな彼女に向かって、「原因は貴方です」などとは言えず、命はただ取り乱すしかない。すると、何も言えないでいる命に気を利かせたのか、双子の片割れのテッドが二人の間に割って入る。

「す、鈴鹿さん。比佐さんは大変お疲れのご様子です。そつとしておいてあげましょう」
今の命にとつて、彼の提案は正直いってありがたかった。しかし——

「何、疲れておるだと? それはいかな! 聞けば貴様、昨日は一晩中、櫛田衿那の看病のために起きていたという話ではないか。我ら鬼とは違い、脆弱な人の身でよくもまあ……。しかし、体の方が持つまい。実は儂ら、これから風呂にでも入ろうかと思つておつてな……」

見れば鈴鹿も、双子の手にも、替えの着替えらしきものが握られている。「せっかくだ。貴様もひとつ風呂浴びて、その疲れた体を癒すがよい——」

◇

そうして、なし崩し的に鈴鹿に連れられ、命は森羅の大浴場に入ることとなった。

半ば、強引に拉致するような勢いで手を引かれ、思わず後ろの双子たちに、視線で助けを求めたが、二人とも心底同情するような目をするも、その瞳にどこか諦めたような空虚さをたたえており、首を揃って横に振るだけだった。

逃げ道を断たれ、観念するしかなかった。しかし、考えてみれば昨日も風呂などに入る機会はなかった。とりあえず、シャワーだけでも浴びておこうかと、ついていったのだが——

——それにしても……ビルの中に浴場だなんて……。

予想していた規模の浴槽とは、まるで違ったことに面を食らう。

このビルで目を覚ましてからというもの、基本的に衿那の看病か、睡眠で疲れをとっていたので、碌に部屋の外を出歩いたりもしなかった。しかし、こうして大浴場を、そこに行くまでに多くの施設、部屋数の多さを見せられ、まるで別世界にでも迷い込んだ錯覚を覚えてしまう。

——けど、私……こんなこととしていいのかな……。

湯船に肩まで浸かった彼女は、その湯加減と、それを享受していられる罪悪感に「はあ……」と、色々と複雑な気持ちがかもった吐息を漏らしていた。

自分がこうして、安寧な湯船に浸かっている間にも、衿那はベッドの上で怪我の痛みを苦しんでいるだろう。一緒に入ろうとも思ったが、今の彼女の怪我の具合では傷を悪化させるだけだと、双子の片割れのメリーに厳しく指摘されてしまった。

そういつた思いもあつてか、体の方はリフレッシュしたものの、気分の方はまだまだ本調子ではない。そうして思い詰める命。そんな彼女に声をかける者がいた。

「……貴方も災難でしたね」

洗い場で体を洗い終えたメリーだ。彼女は手拭いをちよこんと頭に乘せ、ゆつくりと湯船に浸かっていき、命の隣へと近づいてきた。

「……あの人に振り回されて、こんなところまで……心中お察しします」
「い、いえ……助けられたのも事実ですし……」

子供らしからぬ丁寧な口調、言葉遣いに、思わず命も畏まった返事で答えてしまう。

ちなみに、当の『あの人』は、未だに洗い場でシャンプーを泡立て「泡 泡」などと、ご機嫌な様子で、鼻歌混じりに髪などを洗っていた。その様子を無表情で眺めるメリー。そんなメリーの横顔を、ちらっと盗み見ながら、ふと命は疑問に思う。

彼女は——この双子たちはいったい何者だろう、と？

比佐命はこのビルで目覚めてから暫くして、衿那の見舞いに来てくれた双子たちと顔合わせをした。話を聞くとあの二人は、気絶した衿那と命を抱え途方に暮れていた鈴鹿を、このビルまで、人目につかぬように誘導してくれた本人たちだという。その事実にご感謝しつつも、命はやはり疑問を抱かずにはいられない。

既に命は、梨花子が陰陽師。この国に秘密裏に根づいてきた、術者の末裔であるという事実を聞かされている。そして鈴鹿が人間ではない、化け物であるという事実も。

では、そんな彼女たちと一緒にいる双子たちは——果たして、ただの人間なのだろうか。このビルの持ち主、九十九明という人の子供か。それとも梨花子と同じ、陰陽師の一員なのか。もしくは、神宮寺鈴鹿のような、人ではない魔性の化け物の類なのか。

「……………あ、あの……………」

いつそのこと聞いてみようかと、意外にも大胆な一手に出ようとする、比佐命。しかし、彼女が声をかけようとした直後、浴場内に電子音が鳴り響く。

「……………失礼」

それは、メリーのスマホの着信アラームだった。完全な防水加工が施されているのか、躊躇なく風呂場に持ち込んでいたそれをメリーは手に取る。どうやらメールだったようだ。その内容にさっと目を通すと、メリーの目が一瞬、鋭く釣り上がる。

「……………兄さんー！」

「うん——今上がる」

メリーは仕切の向こう、男湯で湯船につかっている兄テッドへ声を飛ばす。彼にも同じメールが届いていたのか、妹の意思を汲み取ったように、湯船から上がる気配がした。「ん？　なんだ、もう上がるのか？　何か用事でもできたのか？」

ちやうど髪を洗い終えた鈴鹿と、入れ替わる形でメリーも浴槽から立ち上がる。

「……ええ、少し問題が発生したようです」

すれ違う鈴鹿の問いに答えながら、メリーは脱衣所へと向かっていく。命は、「もしかして衿那の身に何かあったのでは？」と俄かに胸騒ぎを覚え、その後を追おうとするが、それを制するようにメリーは振り返る。

浴場に残る二人へ、一つの言葉を残していった。

「……ちよつと『一仕事』してきますので、お二人はごゆっくり……」

◇

十分後　森羅本社ビル　九十九明の執務室

「諸君、緊急事態だ」

集まった面々。ソファアに座るテッドとメリー、部屋の隅に背を預ける星野梨花子に、九十九明は開口一番、そのように話を切り出していた。

「今から十五分前。先日逮捕された強盗グループが、渋谷警察署より脱走。どうやら、速

捕された強盗犯たちを救うため、武装した仲間たちが襲撃した模様。脱走の際、警官隊と銃撃戦になり、警官、及び通行人に負傷者が出ている。犯人は現在品川方面を逃走中、車両は紺色のワゴン。機動隊が確保のために動いているが、犯人はかなりの興奮状態の上、機関銃や拳銃で武装しているため容易には近づけない。速やかな早期終結を求めたい——とのことだ」

内容だけを聞くなからかなり緊迫した状況のように思えるが、それを口にする九十九の調子がいつも通りに穏やかなためか、聞いている側の反応もやや鈍い。

「……あの、質問いいですか？」

数秒後、水を打ったような静けさの中、恐る恐るとテッドの手が上がる。

「何かな、テッド？ 状況が状況だからね、手短かに頼むよ」

できるだけ早く話を切り上げたいのか、急かすように催促する九十九だが、それにも動じずテッドはゆっくりと、重い口を開いていく。

「ええ……と、先日逮捕した強盗犯って……それはひよつとして、ひよつとしなくても……」

「君の考えている通りだ、テッド」

少年の抱いた疑問に、九十九は正直に答えた。

「逃走したのは先日、渋谷区内のファミレスで拘束された五人組の銀行強盗犯……鈴鹿

君がこの街に来て早々にぶちのめした。あの強盗犯たちだ……」

「やつぱりかいいいっ—!!」

予想通りの返答に、その場で叫び声を上げながら、テッドは頭を抱える。

「またか! またしても、あんたが元凶か!!」

鈴鹿の故郷から、この街へ辿り着くまでの道中。また、この街に来てから僅か数日。彼女を原因とした様々な騒動に、誰よりも振り回されてきたテッド。またしても、鈴鹿がきっかけとなって起きたトラブルに、腹の底から絞り出すような絶叫を轟かせる。

「……兄さん、流石にそれは飛躍しすぎでしょう」

だが、そんな恨み節全開のテッドを、冷静な態度でメリーがたしなめていた。

「……彼女が強盗犯を捕まえたことと、連中が脱走したことは、また別の問題です」

「いや、そりゃあ……そうなんだけどさ」

「……寧ろ、責められるべきは、性懲りもなく脱走を企てた強盗犯、そして、それを許した警察でしょう。……不甲斐ない」

メリーはメリーで呆れるように、脱走を許した警察への不満を溢している。

「まあ、君の言うことも尤もだ、メリー。だが、この強盗犯たちもかなりの曲者でね」

メリーの辛辣なコメントを宥めつつ、九十九は犯人たちに関する、詳細の情報を述べていく。

強盗犯のリーダー、梅咲輝美という男は、かなり用心深い性格だったらしい。

そもそも、銀行強盗という事業は、日本国内でも成功した例などほとんどなく、例え成功したとしても、警察に追われる逃亡生活を迎えるだけ。奪った金も大量に使えば足がつく。リスクに見合うだけのリターンもない、割に合わない仕事だ。

それでも、梅咲たちはこの銀行強盗を成功させるため、知恵を振り絞った。用意周到に作戦を立て、万が一失敗したときのために、『保険』までかけていたのだ。

「先ほど届いた情報によると、新たに判明した彼らの仲間が二人。前回捕まった五人を入れ、計七人。それが今回の銀行強盗事件を企てた、犯行グループの全貌だ」

その二人というのが今回、梅咲たちの脱走を手引きしたメンバーだ。

彼らは金を奪った梅咲たちがすぐに逃げられるように、沖合に密航船を手配し、そこから国外へ逃亡するつもりだったらしい。そのことを、仲間の一人が取り調べの際に仄めかしたため、より詳しく調べ上げようと、警視庁の方へ身柄を引き渡そうとしたのだが、その際、今回の脱走事件が起きてしまったのだ。

「前もって打ち合わせでもしていたのか、なかなか見事な手際だね」

「……しかし、それでも用心していれば、防げた事態です。仲間がいると知っていたな

ら、尚のこと……」

犯人側の動きを称賛する九十九だが、やはり非は警察側にあると、メリーは口を尖らせる。

すると、九十九は少し言いにくそうに頬を掻きながら、そつとつけ加えた。

「一応、渋谷署の警察官たちの名譽のために言わせてもらうんだが……彼らは前日まで、自分たちの目と鼻の先で起きた『地下崩壊』の一件で、てんてこまいでね……」

言うまでもなく、先日鈴鹿がぶち空けた、『例の大穴』のことである。

「その対応に追われ、警察官総出で駆り出されていたらしい。その混乱が収束した、その直後だよ。機関銃を持った犯人グループたちが襲撃してきたのは……いやあ、あれさえなければ、もう少しまともな対応ができたと思うよ?」

「……………」

沈黙——地獄のような沈黙で静まり返る九十九の執務室。暫しの静寂の後、テッドは息を大きく吸い込み、ありったけの思いの丈を、怒号と一緒に吐き出していた。

「——やっぱりなんもかんも、あんたが悪いんかいいいいっ——!!」

「——さて、少し話が脱線してしまったが、どうするか?」

「はあはあ……………」

あまりのストレスに、軽く錯乱状態になりかけたテッド。未だに大きく息を乱しながらも、ようやく怒りが沈静化し、そんなテッドと、メリーに向かって九十九は尋ねた。

「既に状況はオールレッドだ。このまま梅咲たちを逃がす——などという失態を警察が演じるとは思えないが、無傷での確保も難しいだろう……」

一度緩んだ場の空気を引き締め直すためか、真剣な面持ちで九十九は語る。

「幸い、今のところ死者こそ出てはいないが、この先も、そうだという保証はない。再び銃撃戦にでもなれば、周囲に多大な被害が発生するだろう。最悪、犯人たちが射殺されることで事態の解決が望まれるかもしれないが、それは大変よろしくないと、警視総監も仰っておられる。その上で君たちに問おう。——この『仕事』を受けるか否か？」

「……」

九十九の問いに、ここまでの会話に混じることなく、ずっと目を閉じたまま壁際で静観を決め込んでいた梨花子の目が、薄っすらと開かれる。

ここに至って尚、彼女が話に入ってくる気配はない。何故なら、その問いかけは自分ではなく、テッドとメリー。この双子の少年少女に向けられた言葉だと。わかっているからだ。

原則として、八咫鳥の陰陽師がこのような事態に首を突っ込むことはない。たとえば、どのような重大案件だろうと、術者や妖の類が関与しない限り、彼女のような陰陽師が、

そのような俗事に関わることは禁止されている。

九十九もそれを承知しているからこそ、その視線は常に子供たちの方へと向けられていた。

「そりゃあ、まあ……確かに道案内や、人探しよりは難易度の高いミッションですが……」

「……」

普通ならば無茶ぶりもいいところだろう。こんな危険な騒動の解決。まだ中学二年生である二人に、振るような話ではない。しかし、テッドは特に取り乱す様子もなく言葉を返し、メリーも兄に同意するように黙って頷く。

そして双子は互いに、己の得物を確認しながら、テッドが代表して答えるのだった。「まっ、『陰陽師』やら『化け物』やらを相手するよりは、ナンボかマシな仕事ですよ」

◇

東京都内 品川区周辺

「——くそ、もつとスピードは出ねえのか!？」

「無茶言うな、これで精一杯だ!」

「おい! 後ろ! パトカーがケツに張りついてんぞ!!」

渋谷警察署から逃走した強盗犯たちの乗る、紺色のワゴン車。男七人と狭苦しい車内

で仲間たちの切羽詰まった怒号が飛び交う中、リーダーである梅咲輝美は、熱が冷めたように黙りこくっている。

しかし、それは冷静さからくる沈黙ではない。寧ろ、この場にいる誰よりも、梅咲の心中は大時化の海原のように荒れ狂っていた。

——くそ、くそ、くそっ!! 何だってこんなことになっちまったん!?

完璧な計画だった。あらゆる不測の事態を想定し、練りに練った銀行襲撃のプラン。実際、金を奪い、銀行を立ち去るまでは全て上手くいっていた。後は警察が駆けつけるよりも先に姿を晦まし、埠頭で待機していた外の仲間と合流。そのまま、密航を手配した船で国外に逃亡し、得られた戦利品を眺めながら、仲間たちとほくそ笑む——そんな手筈であった。

だが、現実はどうだ?

万が一に備えて用意した脱走プランが功を奏し、何とか逃げ出すことはできたが、こうして無様に警察に追われる身の上となった。勿論、一銭の戦果もない。今も必死に追っ手をまこうと、死に物狂いで街中を疾走する始末。滑稽なピエロにでもなった、不快な気分だ。

——くそっ! 忌々しい! これも全部、あのクソガキのせいだ!

イライラが止まらない梅咲は、血走った眼で親指の爪を噛みしめ、自分たちが逮捕さ

れるきつかけとなった『クソガキ』——神宮寺鈴鹿への、憎しみを滾らせる。

——絶対に許さねえ！ 一家全員！ 一族郎党！ 皆殺しにしてやる！！

この窮地を脱し、真つ先にすべきこと。鈴鹿への復讐計画を頭の隅で練り上げながら、梅咲は命乞いをする彼女の姿を夢想する。それで少しは溜飲が下がったのか、そこでようやく、彼は意識を現実へと引き戻した。

そして、手下たちに何かしらの命令を飛ばそうと、顔を上げたところで——

「！ 馬鹿、そつちは——!?!」

梅咲は慌てふためいた様子で、声を荒げる。

「へっ?」

運転席の男を含め、手下たちが一斉に振り返るが、手遅れだった。梅咲の指摘とほぼ同時に、運転席の男がハンドルを切っており——インターチェンジ I Cの入口へと車を走らせていた。

「馬鹿野郎！ インターには入るなって、あれほど言つといただろうが!!」

「す、すみません。パトカーが急に横合いから……」

神妙な顔つきで頭を下げる運転席の部下の言葉に、梅咲は舌打ちする。

——ちっ！ 誘い込まれたか……。

逃走ルートを選ぶ際、自動車道や高速道路を用いるのは基本的に悪手である。

一見すると、信号もなく、障害物も少なく、スピードも出せて距離を稼げるように思

えるが、進行方向が一定なため、追う側としては行き先が予想しやすく、待ち伏せがしやすい。

ICの出入り口にでも検問、バリケードを張られれば、それで袋のネズミだ。

——クソ……やるしかねえな……。

いよいよもつて、後がなくなってきた。梅咲は、懐に忍ばせている拳銃を握りこむ。他の男たちも同じ装備を持ち、部下二人に至っては機関銃まで手にしていた。

それらの銃火器は、銀行強盗襲撃の際、装備がかさばるといふ理由から、アジトに置いてきたものだ。今回の脱走計画のため、外の部下が持ち出してきた。彼らにとって真正銘、最後の頼み、最後の武装というわけだ。

いざとなれば、この装備で警察との銃撃戦だと、各々が覚悟を決める。

「…………… あれ……………おかしいですよ、梅咲さん！」

「今度は何だ!？」

ふと、一番後ろの座席に座る仲間が、振り返りながら困惑気味に声を上げる。その男の呼びかけに、余裕のない梅咲は怒鳴り声で聞き返す。

「パトカーが……………いません」

「なんだと!？」

信じられない一言に、梅咲も思わず振り返る。すると部下の発した言葉どおり、つい

さつきまで自分たちを追い回していた、あの忌々しい白黒パンダの自動車が、影も形も見えなかった。

「まさか、諦めた……いや、そんな筈は……」

一瞬、願望とも呼べるそんな都合のいい考えがよぎるも、すぐにあり得ないと悟る。自分たちのような脱走した凶悪犯を、警察がそう簡単に諦めるわけがない。

—— いったい、どこに行きやがった？

きつとまだ近くにいると、梅咲は周りの道路状況を見回す。だが、その予想を裏切るかのように、近くを走るパトカーはいない。それどころか、梅咲たちのワゴンの周囲を走る、他の一般自動車の姿すらなかった。

—— ……？

その不自然な状況に、違和感を覚える梅咲だったが、それが意味するところを思索するよりも先に、彼らの耳にその音は聞こえてきた。

空気を切り裂く衝撃音と、自動車とは明らかに違う奇妙なエンジン音。

「ま……まさか!？」

日常的に聞くような音ではないが、それは万人の耳に、とある乗り物を連想させる音だった。

もしかやと思い、梅咲は車の窓を開け、そこから空を見上げる。すると、そこには——

漆黒の夜空を一機の回転翼機——ヘリコプターが、優雅に飛び回っていた。

突如、自分たちの頭上に現れた、そのヘリの存在に浮足立つ、梅咲率いる脱走犯たち。彼等とて、警察が航空隊を動員してくることは予測しなかったわけではないが、実際にすぐ間近を飛ぶ飛行機械の重圧には、流石に虚を突かれ、暫し啞然となる。だが、気を持ち直した男たちは、すぐに夜空の星々を見上げるのに無粋な鉄の塊の排除を試みる。

「くそー！ 邪魔だ！ あつち行きやがれ！」

男の一人が車窓から身を乗り出し、空に向かって機関銃を乱射する。撃ち落とせるなどとは思っていない。あくまで、牽制の意味合いが込められた銃撃だ。意図通り、ワゴンに追走するように飛んでいたヘリは、銃火を避けるようにふらりと、視界から遠ざかる。

喝采を上げる男たち。そんな中、梅咲一人だけがそのヘリに対し、違和感を覚えていた。

——今の、警察のヘリじゃなかったぞ？

あらかじめ、予備知識として詰め込んでいた警視庁のヘリは、青地にオレンジの帯が縦に入った、些か特徴的な色合いをしている。ところが、今しがた飛び去って行ったヘリは、全体が真っ黒に塗りつぶされた、巨大なカラスを彷彿とさせる、不吉さを全体に

纏っていた。

不審がる梅咲を尻目に、再びヘリの爆音は接近してくる。

次にヘリが現れたのは、爆走する男たちの乗ったワゴン車の——前方だった。先回りする形で前を飛んでいたヘリは、その場で旋回。真正面にワゴン車と向き合う形になり——サーチライトの光が照射された。

あまりの眩しさに、運転手が反射的にブレーキに足をかけ、車を減速させようとするが——次の瞬間「パン！」と風船が割れるような音がした。

「な、なに、いいい!?!」

不自然に揺れる車体に、梅咲の口から素つ頓狂な悲鳴が上がる。あきらかにバランスを失ったワゴンは二回、三回と360度のスピンを起こし、そのまま中央分離帯のフェンスに激突。当然、男七人でぎゅうぎゅうに敷き詰められた車内は大混乱だ。

梅咲の脳は激しく揺さぶれ——ほんの僅かな間、彼の意識は途絶えることとなる。

◇

「ボス……ボス！ くそ、ボスが殺られた!」

ぐったりと、動かなくなつた梅咲を見て、部下の一人が憤慨する。

実際のところ、少し打ち所が悪く、意識を失つただけなのだが、何故か死んだと早とちりする男たち。大将の弔い合戦だと、武器を片手に車内から飛び出していく。

外に出た彼らが真つ先に目にしたのは、スクラップと化したワゴン車だ。衝撃を吸収するバンパーを見事に凹ませ、タイヤの一つが完全にバーストしていた。

逃走手段を完全に失った男たちは、揃って青い顔になり、次にヘリの方へと目を向ける。

ヘリは、その場にホバリング状態で留まつており、ヘリのドアからは、身を乗り出すようにし、こちらに狙いを定める——狙撃手のライフルが向けられていた。

「あの狙撃手が車のタイヤを撃ち抜いたのか？」と、相手方の腕前に戦慄を覚える男たちだが、彼らの頭に降参の二文字は無い。親玉を殺られた（と思ひ込んでいる）彼らは、捕まるぐらいなら死んでやる——とまではいかないものの、それに近い精神状態で奮起していた。

これを鎮圧するのは、警察の特殊部隊といえども、難儀するだろうが、彼らにとって『幸運』か『不幸』か。そのヘリは警察の持ち物ではなかった。

さらにもつといえ、その狙撃手は——大人ですらなかつたのだが、そんな些細なことなどお構いなしに、男たちは一斉に拳銃、そして二丁の機関銃を狙撃手へと突きつける。

あわや銃撃戦になるかと思いきや、狙撃手の方がゆつくりと、ライフルの銃口を下ろす。その行動に意表を突かれる男たちだが、その狙撃手の後ろ——ヘリのドアから一つ

の人影が舞い降りたことで、彼らの混沌はさらに深まっていく。

地上に降り立つや、その人影は真つすぐ犯人グループへと歩き出す。右手に、何やら長い得物を握り締めているが、サーチライトの逆光のせいで詳しい容姿などもわからない。

だが、あきらかに成長途中の背丈に、丈の短いミニスカートの。その特徴的なシルエツトから、その人物が年端もいかないう子供——乙女であることが推察できる。

こんな殺伐とした場面に、似つかわしくない少女の登場に、ほんの僅かに動揺の色を見せる強盗犯たち。だが、警察に捕まっていた銀行強盗の実行犯たちは、その『少女』という存在にしてやられた苦い記憶を保持している。身長と髪型の違いから、あのときの少女ではないとわかり、ほつと安堵するも、すぐに臨戦態勢で銃を構える。

子供といえども油断はできない、と彼らは慢心を捨て去るのだが——その判断を下す、ほんの数秒の逡巡こそ。彼らにとって、何よりも致命的な誤算であった。

少女に気を取られた僅かの中に、ヘリから狙撃手が、道路へ筒状のものを投げ入れる。空き缶が転がるような乾いた音が響き、自然と男たちの視線が地面へと注がれ——。

直後——地面からものすごい勢いで、青い煙が噴き出していく。

「なっ!?!」

スモークグレネード。各国の軍隊でも、正式な装備として採用される特殊な装備だ。

本来であれば、室内の使用でこそ、その効力が活かされる武装だが、野外であっても、その真価を十分に發揮されていた。

「くそ、け、けむい！ 何も見えねえぞ！」

「このっ！ ガキが！ どこに行きやがったあつ!?」

瞬く間に広がったスモークが、強盗犯たちの視界を遮る。煙に巻かれ、彼らはこちらへ歩いてきた少女の姿を完全に見失ってしまった。独特の硝煙臭の不快感と苛立ちに、男たちは一斉に、少女やへりがあつた方角へと、出鱈目に銃を乱射し始める。

しかし、少女は彼らの射線上になど、立っていなかった。

回り込むような形で男たちに接近していた少女は、煙の中を咳き込むこともなく進み抜け、機関銃を乱射する一人の男の側まで近づき、己の得物を抜き放つ。

手にしていた長物は——日本刀。白刃煌めく刃で少女は、男の腕を斬りつけた。

「! ……いつてえええええ!!」

死角からの奇襲に、男の腕に焼けるような痛みが走り、思わず武器を手放す。彼の悲鳴を聞きつけ「どうした!？」と仲間たちから、心配する声上がる。その叫び声を目印に、少女は再び煙の中へ。巧みな足さばきで移動しながら、さらに別の男へ斬りかかっていく。

「ぐうっ!」「あぐあああつ!?」「痛てえ、痛てえよ……」

一人、また一人と順に、少女は容赦のない斬撃を浴びせていく。やがて、夜風が煙を溶かし、視界が回復する頃には、全ての男が彼女によって斬り傷を負わされていた。

だが、それで打ち止めだった。

痛みに腕を抑え、武器を取りこぼすも、男たちは未だに健在。全員が五体満足でその場に立っている。少女の腕前では、一撃で彼らを戦闘不能にすることなど、最初から不可能だった。

「ハ、このアマ……よ、よくもやってくれたな……へっ、だが、ここまでだー!」

「……………」

気がつけば、男たちは少女を四方から囲い込み、逆に追い詰める形となっていた。

「どいつもこいつも、散々引つ掻き回しやがって——死にやがれえッ!!」

そして、それまで受けた全ての仕打ちを、その少女にぶつけるように、男たちは銃を拾い上げ、トリガーに指を掛ける。だが、彼らは気づいていない。少女が既に刀を鞘に納めていたことに。

たつたの一撃。その一撃で、全ての決着がついていたということに。

「——がっ、があ、があっ、ががが?」

突然、過呼吸に陥ったように男の一人が胸を抑え、喘ぎだす。その症状は、伝染するようにならぬ全員に伝わり、さらに彼らの全身が小刻みに震える。

強烈な吐き気と眩暈が男たちを襲い、限界を迎えた肉体が次々に地べたへと横たわる。

その苦しみに、ギリギリまで抵抗しようとした男の一人が意識を失い、白目を剥いて痙攣する仲間の様子を見て、とある可能性を脳裏によぎらせる。

——ど、毒……。

見事正解に辿り着いたものの、最後には彼も仲間たち同様、その意識を手放していた。

◇

——なっ……なんだってんだ、ちくしようめ！

仲間たちが少女の足元に転がる光景を、意識を取り戻していた梅咲は、車の中からこっそりと覗き見ていた。彼が目を覚ました時点で、そのような図式ができ上がっていたため、そこに至るまでの過程を知らない梅咲は、その結果のみで少女の存在を脅威と判断する。

もはや梅咲に、少女や、あのヘリコプターに抗おうという気概はない。

自動車のドアを、音をたてぬようゆっくりと開く。息を潜めながら、頭を低く、地べたを這いずる様にその場から立ち去る。少女がこちらに気づいた様子はない。このまま無事に逃げ出せるかと、淡い期待を抱きかける梅咲だが——その進路を阻むように、その人影は降り立った。

「——おお！ 久方ぶりだのう。名も知れぬ、銀行強盗よ」

「ひいッ！ あ、あ、ああ、あああああつ!？」

そこには二日前。自分たちの企みを全てご破算にした、あのときの少女——神宮寺鈴鹿が、齒を剥き出しに、快活そうな笑みを浮かべながら、立ち塞がっていた。

つい先ほど、彼女への復讐を誓っていた梅咲だが、実際に目の当たりにすると、もはやそれどころではない。二日前と寸分たがわぬ、忍びのような恰好で現れた鈴鹿に、完全に腰を抜かし、悲鳴を上げ、その場にへたり込んだ。

「まさか、こうも早くに再開することになるとは、流石の儂も思いもよらなんだぞ、ん？」
何かしらを呟く鈴鹿だが、梅咲の頭には何も入ってこない。まだ懐に拳銃を忍ばせてはいるが、そんなものが通用するわけがないと、彼の本能が告げていた。

「しかし——罪の償いも終わらんうちから、脱走とは……貴様も懲りん男だ」

そして、呆れたように呟く鈴鹿の瞳に、冷たい色が宿る。

「どうやら、仕置きが足りんかったようだな。それが、貴様を調子づかせてしまったのであろう？ まあ、無理もない。あのとき、貴様らに振るって見せた儂の力は、ほんの一端。我ら『鬼神の眷属』にとって、それこそ赤子の手を捻る程度の力しか示せなかったのだからな」

「な……なにを、い、いって……?？」

「かくなる上は、見せつけてやるしかあるまい。儼ら鬼という存在が、どれだけ恐ろしいか！ 魂の奥底に刻みつけてやらねばなるまい！ お前たち人間がどれだけ矮小な存在なのか！」

徐々に語気を強めていく鈴鹿の言葉に、梅咲の震えが加速度的に増していく。

「光栄に思うがいい！ 本来であれば、貴様のような下郎に晒すべきではないかもしれないが、その愚劣さを正すため、特別に見せてやろう。我ら鬼神の眷属が誇る——真の姿を!!」

両手を広げながら声高らかに宣言するや、鈴鹿は自身のその姿を、異形へと変化させていく。

「あつ、あひやあああああつ!!」

先刻まで少女だったものが、突如として変貌していく様に、梅咲の口から、地獄の底で亡者が救いを求めるような阿鼻叫喚が放たれる。

タイミングが悪いことに、ヘリのサーチライトが、さらに鈴鹿の姿を鮮明に照らしていく。後方から照らされる光によって地面に差す、神宮寺鈴鹿の影。異形のその姿がシルエットとして浮かび上がり、その口元が——にたりと歪んだ。

それが限界だった。あまりの恐怖に、完全に精神が崩壊した梅咲。ズボンを生暖かいもので濡らしながら、泡を吹いて失神する。

最後に、たった一つの言葉を言い残しながら——
「ば、ばけ……もの……」

◇

日本刀を手にした少女——メリーが、強盗犯たちの最後の一人、梅咲が逃げようとしていたことに気づくのとほぼ同時に、へりから鈴鹿が飛び降り、彼の元へと舞い降りていた。

元々、今回の作戦に鈴鹿の参加は含まれていない。ミーティングが終わり、現場に赴こうとしたメリーたち一行と、風呂上がりの鈴鹿が鉢合わせ。強引にこちらの事情を聞き出すや、「儂もいくー」と遠足にでも行くようなテンションで、無理やり引つついてきたのだ。

一応、大人しくしているよう九十九に言われてはいたが、最後の最後に見知った顔を見つけ、たまらず飛び出し、首を突っ込んできた。

そうした、自由奔放な鈴鹿の行動には、流石にメリーも物申したい気分であった。

だが、そんな思考——化け物の正体を晒した鈴鹿の前に、全てが吹っ飛んでしまった。いた。

——……なるほど、彼女が鬼……『化け物』というのは、真実でしたか……。

正直なところ、メリーには鈴鹿が鬼であるという事実を、どこか疑う気持ちがあった。

今の今まで、メリーは鈴鹿の力を間近で見てこなかった。彼女が残してきた破壊の爪痕を目撃してきたが、それが本当に鈴鹿の仕業なのかと、若干の猜疑心を持つていた。

しかし、彼女が梅咲相手に見せつけた、その異形なる姿を前に、鈴鹿が人間ではなく、真正正銘の化け物だと、メリーは思い知らされる。

「まっ、まっまで脅しつけてやれば、もはや逃げ出そうなどとは考えんだろう……」

気絶した梅咲を見下ろす鈴鹿は、既に人の姿に戻っている。メリーは、そんな鈴鹿の背に、黙って視線を送る。努めて無表情を装っているが、彼女の両腕には鳥肌が立っていた。

鈴鹿の本性——鬼神の眷属とやらの真の姿は、確かに『鬼』と呼ばれるものに相応しく、男たちを一方的に斬り伏せたメリーに対しても、『恐怖』という感情を植えつけ——それとは別に、もつと違う感情を激しく揺り動かすものでもあった。

普段、感情表現が乏しいとよく言われるメリーですら、それを強く感じとった。その抱いた感情を表現すべき言葉が、メリーの口から、自然と漏れ出ようとする。

「二人とも！ そろそろ引き上げるから戻ってきてー！」

しかし、メリーがその感想を口にしようとしたところで、ヘリで待機していた、狙撃銃を肩に担いだテッドが、プロペラ音に負けずと、声を高く張り上げて二人を呼びつけ

る。

鈴鹿は「うむ、いま行く」と答え、自分が失禁させた梅咲の方を振り返りもせず、ヘリの元へと戻っていく。メリーは、やはりその背中を視線で追うが、己の抱いた感情を振り払うように首を振り、鈴鹿の後を黙ってついていった。

「ん？ ……おい、あやつら、あのまま放置してよいのか？」

二人が戻ると、ヘリはすぐさま現場から飛び去った。助手席から、離れていく地上を覗き込みながら、鈴鹿がそのように疑問を呈する。

「——ああ、問題ないよ」

彼女の問いに、操縦席に座る九十九明が答える。

「既に警察には通報済みさ。『人払い』の結果も解いたからね。あと数分もすれば、パトカーも駆けつけてくるだろう。後のことは彼らに任せよう」

九十九の言葉を証明するように、先ほどまで、どこか遠くに聞こえていたサイレンの音が響いてきた。見れば、強盗犯の乗っていたワゴンの周辺に、ランプの明かりが集まっている。

「ふむ、どうやら、そのようだな。しかし、罪人どもの脱走を許すとは……人間の獄卒も頼りにならないものだ。まったく情けない！ 弛んだるぞ！」

「七割方は、あんたのせいなんだよな……」

「……」

鈴鹿は、梅咲たちの逃亡を許した人間の警察に不満を溢す。それを聞き、ヘリの後部座席に座るテッドが小さい声でボソツと呟くのを、隣の席に座るメリーだけが聞いていた。

梅咲たちが脱走を成功させた理由の一つに、鈴鹿自身の起こした不手際が原因としてあるのだが、どうやら彼女は、そのことを知らされていない様子である。

「しかし、わからんな。何故、あのような輩相手にお前たちが出張る必要があるのだ？ これも八咫鳥の役割の内なのか？」

再び疑問を提示する鈴鹿。八咫鳥の存在のことは、彼女も知っているようだ。テッドとメリーも、八咫鳥という組織の大まかな概要は九十九から教えてもらっていた。

しかしながら、双子は——八咫鳥のメンバーではない。

「いや、この件に八咫鳥は関与していないよ。これはあくまで私個人……森羅の会長としてのお仕事だ」

「？」

「まっ……君には無縁な話かもしれないが、人間の社会というものは、多くのしがらみを抱えているものでね。そうした、しがらみの中、森羅という企業の成長、利益のために、様々な方面に貸しを作っておく必要があるんだ。この仕事も、その一環……という

わけさ」

「ほう！……？　よくわからんが、流石、九十九殿だな！」

あきらかに直接的な説明を避けた九十九に、鈴鹿は疑問符を浮かべながらも、感服したとばかりに首を頷かせている。

今回、九十九明が森羅の会長として秘密裏に受けたこの『仕事』によつて、果たしてどのような『利益』が発生したのか。テッドやメリーにも、詳細は何も知らされていない。詳しく問いただせば、九十九も何かしらの答えを返してくれるだろうが、そこまでして知ろうとも思わないし、二人も深く踏み込みはしない。

テッドとメリーにとつて、今回の『仕事』も、道案内や人探しといった前回の『仕事』と同じ。あくまで、『お使い』の延長のようなものだ。仕事を受け、成功させることで毎月、活動費という名目で一定額支払われるお小遣いの額に色がつく。その程度の認識だ。いや——その程度の認識で留めている。

自分たちの置かれている現在の環境が、明らかに普通とは異なることを、双子たちも当然理解はしている。しかし、今の環境にそれなりに居心地のよさを感じているため、それを進んで壊してまで、何かしようなどと考えたりはしない。

これでもし、九十九が大量殺戮や暗殺のような、あからさまにヤバイ命令を強制するような男ならば、双子たちも自身の身の振り方を真剣に考えるだろう。だが、現時点で

そのような振る舞いを、九十九が見せる兆しはない。

九十九は一人の人間として、テッドやメリーの人格を尊重し、対等な立場で接して行く。ときおり、保護者風を吹かせることもあるが、それは必要経費として我慢する。実際、衣食住など、彼の世話になっていることは事実なのだから。

「さあ、帰ったら夕食にしようか。何かリクエストはあるかい？」

ヘリコプターの進路を森羅ビルの方面へ取りながら、九十九がいつものように尋ねてくる。

「儂、肉！」「あつ、自分、刺身が食べたいです」「……野菜サラダ」

「……見事なまでにバラバラだね。まあいいさ。できる限り、その注文に応えるところ」

それぞれ三者三様に、好き勝手な答えが返ってくるが、九十九は特に気にした様子もなく。「腕が鳴るな」などと呟きながら、軽やかな操縦で森羅ビルへの帰路につくのであった。

そうして、森羅ビルに帰宅した九十九たち一行。

留守を任されていた梨花子と、居心地悪げに浴場の脱衣場でポツンとしていた命の二人を加え、食堂で遅めの夕食を取った。

衿那は、まだ安静にしておいた方がいいだろうという判断から部屋にいる。命も衿那に付き添おうと部屋にこもろうとしたが、それを鈴鹿が些か強引な形で食堂まで引つ張っていく一幕があつたりした。

やがて——夜も遅くなり、子供たちはいつもより早く床に就いていく。

◇

森羅本社ビル 深夜

仕事の疲れか、明日に備えてか。子供たちが深い眠りに寝静まった深夜の本社ビル。九十九明は一人、自身の私室で急ぎの仕事を片付けていた。ここ数日、忙しさと碌に睡眠もとっていないが、疲れた表情はなく、顔色一つ変えず、彼は黙々と書類を処理していく。

そんな九十九の元へ、来訪者を告げるノックの音が鳴り響く。

星野梨花子だった。彼女は九十九の返事を待たずして、彼の執務室へと入るや、手に持っていた銀製のティーポットから、二人分の紅茶をカップへと注いでいく。

その一つを自然な動作で九十九へと差し出し、もう一つを自分の方へ。九十九は、そのカップを当たり前のように受け取り、口へと含んでいった。

「うん、90点！ 昔に比べて、だいぶ腕を上げたようだね。梨花子君」

「そうね……誰かさんの駄目出しのおかげで、無駄に知識だけは増えていったから……」

そのような言葉を交わし合った直後、なにがおかしかったのか、二人は揃って小さな笑みを溢す。だが、すぐに九十九は表情を引き締め直し、梨花子と向き合った。

「——で？ 協議の結果はどうなった？ 上層部の意見は、ちゃんとまとまったのかな？」

「ええ……当初の予定通り。蠱毒の呪詛を通じて、メフィストへの探知術式を試みるわ」
「榎田さんにそのことは？」

「伝えたわ。そしたらあの子『私にこんなふざけた呪いをかけた糞野郎。ふんじばる手伝いができるなら、喜んで協力させてもらおう』って……」

「なるほど。彼女も彼女で、やる気に満ちているようだ。それは結構なことだが……」

榎田衿那に呪詛をかけたと目される人物、メフィストを捕らえるための作戦会議が、八咫鳥の本部である京都で行われ、その結果が梨花子の方まで水晶球で伝えられた。

梨花子には、作戦の要である探知から、協力者となる衿那の説得も含まれていたのだが、その第一段階である『衿那の説得』には、どうやら成功したらしい。

もつとも、成功させた本人からしてみれば、些か不本意な結果であったようだ。顔からこぼれ出る苦々しい表情が、梨花子の心情を如実に物語っていた。

「決行は明日の夜。それまでに各地に術者の配置を済ませ、すぐに動けるように体制を整えるそうよ……。メフィストがどこに潜んでいても、すぐに襲撃できるように、と」

「明日とは……それはまた、随分と急な話だね」

「ええ、あまり時間をかけていては、相手側に察知される恐れもあるから」

「ふむ、まあ、早めに解決するに越したことはないが……」

そのまま、作戦内容を説明していく梨花子だったが、九十九は少し言葉を濁していた。
「……何か気になることでも？」

言葉を詰まらせる九十九の態度に、梨花子が何の気もなしに問うのだが――

「実はつい先ほど――『土御門』の方々から連絡がきてね……」

「――」

「どうやら、鈴鹿君を里の外に出したことが、彼らの耳にも届いたらしい。「説明を求めると、呼び出しを受けてしまつてね。それが、ちょうど明日の夜なんだよ……」

珍しいことが起きた。それまで、どのように場合においても常に冷静さを保っていた星野梨花子が、九十九のその話を聞くと、体を怒りで震わせ、憤るように声を荒げたのだ。

「ほん――とに、空気が読めないわね！ あの時、時代遅れの『老害』どもはつ!!」

「落ち着いてくれ、梨花子君。子供たちが起きてしまうよ」

大声で怒りをあらわにする梨花子を、九十九がたしなめる。

「まあ、彼らも彼らなりに、世を思つての行為だ。そこに悪意はないと思うよ？」

「だからって、何もこんなタイミングに！　もう少し、時と場合を考えて欲しいわ！」

そうして、彼女が憤り続けること数分。ようやく荒い息を沈めた梨花子に、九十九が話の続きを口にしていく。

「そういうわけだ。悪いが、今回の作戦に私は立ち会うことができない。万が一のためにテッドとメリー、そして鈴鹿君を置いていく。話は通しておくから、何かあれば遠慮なく、あの子たちに頼ってくれ。……それでいいかな？」

「……ええ、そうさせてもらうわ」

未だに怒りを引きずっているのか、不承不承に返事をする梨花子に、九十九はやれやれと首を振る。

紅茶を片手に椅子から立ち上がり、窓の外に拡がる真つ黒な空を見上げながら、彼は一人呟いていた。

「明日か……。何事もなく終わってくれれば、それでいいのだが――」

その内側へと

翌日 刻印学院高校屋上 放課後

——いよいよ、今日……なんだ……。

放課後。日も沈み始め、グラウンドで部活動に励んでいた生徒たちが、用具の後片付けに動き回る光景を眺めつつ、比佐命は屋上で一人、物思いに耽っていた。

一年である命が刻印高校に入学してから、今日で三日目。通常授業が終わり、一年生はまだ部活動に入ることができないため、大半の新生は既に下校済みである。命がこんな時間まで校内に残っていたのは、二日目に学校を休み、健康診断を受けていなかったためだ。そのしわ寄せとして、今まで検査に時間を取られていた。

だが、それ以上に、彼女をこの地に足踏みさせている、相応の理由が別に存在していた。

——今日で終わるんだ。衿ちゃんの苦しみが……彼女の不幸が……。

今宵、八咫鳥という組織の陰陽師が、衿那の不幸の元凶である術者を捕らえる作戦を展開させるといふ話は、命の耳にも入っている。その黒幕さえ捕えれば、後は衿那の身を蝕む呪いを解呪するだけ。それで全ての片がつくと、梨花子が説明してくれていた。

——…私は…どうすればいいんだろう…。

そう、既に事態は命たちの手を離れ、彼ら陰陽師たちの手に委ねられた。専門家である彼らが事に当たると、命の出る幕などもうどこにもない。ならばこれ以上、自分が衿那の側にいる意味などないのではと、命はそんな風に考えてしまっていたのだ。

——きつと…私がいてもいなくても、結果は何も変わらないんだろうな…。

寧ろ、知恵もなく力もない。何一つ手助けできない自分の存在など、邪魔者でしかない。ネガティブな思考が悪い方向でループし、命はずんずんと気持ち沈ませていた。

そんな暗い雰囲気を纏う彼女の背に向かい、陽気に声をかける者がいた。

「——おお！ こんなところに居おったか！ 捜したぞ、比佐命よ！」

「!?」じ、神宮寺さん…。

神宮寺鈴鹿である。その口ぶりから、命のことをずっと捜していたのか。すぐ側まで歩み寄ってきた彼女は、そのまま命の隣に立ち、夕日を眺める。命はビクリと肩を震わせた。

実のところ、鈴鹿の存在もまた、命の足をこの場に縫いつけている原因の一つであった。

鬼神の眷属——神宮寺鈴鹿。

実際に、鈴鹿の力とその異形を間近で目撃してしまった命は、彼女に対する恐怖心を

ずっと胸に抱いている。正直、今すぐ悲鳴を上げて、逃げ出してもおかしくはないほどに怯えている。

それでも逃げ出さずにいるのは、生命いのちを救ってもらった恩義があるからに他ならない。恩人である鈴鹿を傷つけてはならないという想いが、命の理性を繋ぎ止めていた。

しかしその努力も空しく、体は正直なもの。耐えようと、耐えようとすればするほど、全身の震えが止まらず、緊張で頭が真っ白になっていく。

「むっ……どうした？ 顔色が悪いぞ」

そんな恐怖による体調の変化を、鈴鹿は目ざとく気づいてしまった。

「気分が悪いなら保健室に行こう。この時間なら、まだ梨花子がいる筈だ。それで——」

命の容体を気遣い、純粋な親切心から鈴鹿が手を伸ばしてくる。

次の瞬間——鈴鹿の化け物としての姿が、命の脳裏にフラッシュバックされる。

「——い、いや！ あっ……」

差し出されたその手を——拒絶の言葉と共に、命は無意識のうちに払ってしまった。

もはや言いつの余地もなく、やってしまったと己の行動を恥じる。助けてもらった恩を忘れての、この振る舞い。到底誤魔化しきれものではないだろう。

「……………怖いのか……………この儂が？」

嘲るようでも、見下すようでも、下卑た様子もない。上品とは程遠いものではあるが、鈴鹿の笑い声は清しいほど明るく、その表情は、親に手放して褒められた幼い子供のように満ち足りている。心の底から喜んで笑っているのが、よくよく伝わってくるほどの大笑い。

鈴鹿は口元をニンマリと吊り上げ、歯を剥き出しに叫ぶ。

「——安心したぞ！」

「……………えっ？」

その言葉の意味がわからず、呆然とする命を置きざりに、鈴鹿は声高らかに続けた。

「それだ！ お主のその恐怖と畏怖！ それこそ、人間が我ら鬼に対して抱くべき感情

！ 鬼と人との正しい関係性によって生じるものよ。それでこそ、わざわざこの地まで

訪れた甲斐があったというものだ。それでこそ、儂も『使命』を果たせるというものよ

！ はははっ！」

「……………し、使命……………つて？」

笑いながら嬉しそうに語る鈴鹿に絶句しながらも、命は反射的に聞き返していた。使

命——そういうえば以前にも彼女は言っていた。『やらねばならない使命』と。

その眩きが聞こえていたのか。鈴鹿はピタリと笑うのを止める。

「決まっておるだろう。我らは鬼ぞ？ いつの世も変わらぬ。我らが成すべき使命は一

つ……」

口を真一文字に結び、先ほどとは打って変わった真剣な目で、鈴鹿はその使命を口にする。

「お前たち人間を——恐怖のどん底に叩き落すことだ」

「——!？」

鈴鹿の口から放たれた、あまりに物騒な発言に命は息を呑む。しかし、不穏な響きの企みとは裏腹に、鈴鹿はとても穏やかな声音で、暮れる夕日に目を向けていた。

「刮目せよ、命よ！　もうすぐ日が沈む……。日の光がこの地上から消え失せ、夜が訪れる。夜は古来より、我ら鬼を含めた全ての化け物、魍魎ちみもうりよう魍魎あつきらせつ、悪鬼羅刹ちようりようぼつこが跳梁跋扈する刻だ！」

「……」

「なの……どうだ？　我々闇の住人が少し目を離れた隙に、人間は滑稽な篝火を焚き、我らが支配する領分に片足を突っ込み、そのまま、我が物顔で昼と夜の狭間を行き来しておる」

鈴鹿の口調は、怒るようであり、嘆くようであり、そして——悲しむようであった。

「拳句の果てに、人間は我々の存在をただの伝承に陥れ、過去の遺物として置き去りにしようとしている。我らに対する畏敬の念を、恐怖を捨て去ろうとしているのだ！　……」

だがな、命。恐れを忘れた人間は質が悪いぞ？ 自らを戒めることを忘れれば、奴らはどこまでもつけ上がる。その増長の果てが、あの強盗犯やメフィストのような愚か者たちであろう？」

ここ最近で感じられた例を幾つか上げるも、それでも足らぬと、鈴鹿はさらに捲し立てる。

「いや、奴等だけではない。今の人間共は皆そうだ。己の領分を弁えず、謙虚に生きることを忘れている。故に、思い知らせてやらねばならない！ 今一度恐怖を！ 闇に息づく我らの偉大さを！ それが、今を生き残りし怪異たる、儂ら鬼の成すべき使命なのだから……」

——……………？ これって……

ときおり、憤慨するように声を荒げる鈴鹿に怯えつつも、命は考える。鈴鹿の言い分、その内容、そこに間違ったことなど、何も含まれていないのではないかと。

確かに現代の自分たちにとって、鬼だの化け物だのは、空想の産物でしかない。

今の人間が恐れるものは、そのような曖昧なものではない。戦争や犯罪などといった、同じ人間の起こす悪行。人為的災害を何よりも恐れるようになった。自然災害などの天災も、それはそれで恐ろしいが、より身近にあるのは、やはり前者だろう。

だからこそ、命は鈴鹿が言わんとしていることを、ぼんやりとだが理解できた。

『必要悪』という考え方があつた。組織や社会の運営上、やむを得ず必要とされてしまふ『悪』。

彼女はまさに、それに成ろうとしているのではないか？

化け物である自分たちが『悪』となることで、人間たちの慎み深さや、結束を促そうと。

もし、その予想が正しいのであれば——それは、なんて悲しい生き方なのだろう。

命は胸の内の恐怖心に、僅かな同情を宿らせる。人の恐れを、憎しみを一手に引きつけようとしているのなら、それはとてもつらいことなのではないかと、そう感じたからだ。

だが——そんな心配は杞憂であると、他でもない鈴鹿が否定するように叫んでいた。

「その点、貴様はいい！ 実にいい謙虚な態度だ、比佐命よ！ 貴様には正しく伝わつたようだ、儂の偉大さが！ 儂が怖いのか？ 恐ろしいか？ 恥じることはない、それは当然の感情だ。儂を前にすれば、どのような虚勢も張り子の虎も同然。気丈に耐える必要はない。逃げ出したければ逃げればいい。悲鳴を上げたければ上げるがいいぞ！ 存分に、なっ!!」

心底嬉しそうに破顔する。そこには、自分が必要悪として犠牲になつていふという、悲壮感など微塵も見受けられない。さらに、鈴鹿は思い出したかのように付け加えた。

「……しかし、あまりに恐怖しすぎて何もできなくなるようでは本末転倒というもの……」

気のせいかな、ほんの少し声音に優しい色を着色しながら――。

「そんなときこそ、独りで怯えず、親しき者と、愛しき者と、恐怖を分け合えばよい。それで、少しはマシになるだろうさ……」

「……………」

またも絶句する、比佐命。しかし、そこにあるのは恐怖ではない。

夕日をバックに、こちらを振り返った鈴鹿の表情は――とても穏やかなものだった。

それまでの大笑いや、好戦的な笑みとはまるで違う。優し気に細められた目に、慈しむような微笑み。命はその微笑みに思わず、息をするのも忘れて魅入ってしまった。た。

「むっ……少し話し込み過ぎたな。例の作戦まであまり時間がない。行くぞ、命！」

「……………えっ? あっ……………で、でも私がいても、足手まといにしか……………」

呆然とした状態で、動けないでいる命の手を、鈴鹿が引つ張っていく。今度はその手を振り払うようなことはしなかったが、やはりその場で躊躇いを覚えてしまう。どうせ力にはなれない。だがそんな命に対し、鈴鹿は呆れた顔つきで言った。

「命よ。お主は衿那の力になりたい。その想い一つで、奴を追ってここまで来たので

あろう？」

「えっ……え、ええ……」

「ならば今更、引き返す道などあると思うな。ここまでできた以上、最後まで見届けよ。それが奴の友として、貴様が果たさなければならぬ義務である」

「……うん。そうだね。そうかもしれない……」

己の迷いを、あつさりと一刀両断する神宮寺鈴鹿の言葉に、命は静かに同意する。

確かに鈴鹿の言うとおりだ。親友の力になりたい。その想い一つで、自分は望まれもしないのに、こんなところまで着いてきたのだ。この期に及んで力になれないなどと、どの口が言えたのだろうか。

そう考えると、さつきまでうじうじと悩んでいたのが、心底馬鹿らしく思えてしまう。命は——覚悟を決めることにした。

最後まで見届ける。たとえその先に、どのような結末が待ち構えていようと。

◇

数時間後 夜 森羅本社ビル 食堂

新参者の鈴鹿にとつても、すっかり憩いの場として定着しつつある食堂だが、くつろぎの場として開かれている筈のその空間は現在、張り詰めるような緊張感に包まれていた。

整然と並べられていた机や椅子は壁際に追いやられ、テレビやホワイトボードなどの邪魔な小道具の一切が片付けられている。がらんとした部屋の中央の床には、何かしらの文字が円に沿うような形で刻まれており、その中心点に椅子が一つ、鎮座していた。

「……ねえ、まだなの？ やるなら、とつとと始めなさいよね」

櫛田衿那はその椅子にもたれかかり、そこに座る様に指示を出した目の前の陰陽師——星野梨花子へ、苛立ちを隠そうともしない無然とした態度で、彼女を睨みつけていた。「そんなに慌てないで。あつち側の準備が整うまで、まだ少し時間があるわ……」

梨花子の方かというと、そんな衿那の苛立ちを涼しい顔で受け流している。八咫鳥本部と打ち合わせしていた作戦開始時刻まで、まだ間がある。今から肩に力を入れたところで、どうにかなるわけでもないのだと、それを自らが示すかのように、あくまで自然体を装っていた。

しかし彼女たちの周囲、円の外側で待機している面々は、表情を強張らせている。祈るように両手を合わせる命も、各々の装備、拳銃や日本刀の手入れを行っているテッドとメリーも、あの鈴鹿ですら、ずつと口を閉じたまま、拳を握る動作を繰り返している。——少し、空気が張り詰め過ぎね……。

梨花子にとってこの状況は好ましくない。これから行う儀式は、衿那自身の精神状態が大きく左右される。あまり頑なになられると、それだけ儀式の方にも、悪影響が出て

くる可能性が高いのだ。まずはこの緊張をほぐそうと、梨花子は柔らかな口調で衿那に語りかけた。

「そう固くならないで、榎田さん。貴方はただ座ってくれていいだけではないんだから。何なら終わるまで居眠りしても構わないのよ？」

「……美容院じゃないんだから。こんな状況でそんなこと、できるわけないでしょ……」
「まっ、実際、散髪するよりは早く済むわ。それこそ、寝ている間もなくね。……そうね、おさらいを兼ねて、これから行う儀式について、再度確認でもしておきましょう」

にっこりと笑顔を浮かべながら、梨花子はもう何度目になるか、その説明を繰り返した。

「これから私は——貴方の内側へと入り込みます」

「……」

「分かり易く言えば……『精神世界』というやつかしらね。ある術式を使って、私が貴方の精神世界に侵入する。そして、その精神を通じて、心の奥底に潜む呪詛の本体に触れるわ。そこから、『縁』を辿って、蠱毒の呪いを放った術者本人を追跡。上手く対象の居場所を探知できれば、外で待機している他の陰陽師たちが奴の確保に動く……そういう手筈よ。尚、探知を試みるのは、初めの一回だけ。術者の捕縛の成否にかかわらず、貴方にかけてられた呪いは、私が責任を持って解呪します……ここまではいいかしら？」

探知は一回だけ。これは梨花子が、衿那の協力を仰ぐ際に上層部に突きつけた条件だ。自分たちの都合に必要な以上に衿那を振り回さないためにと、上と交渉した結果の妥協点であつた。

「ええ……わかつてる。もう耳にたこができるくらい聞かされたわよ。そんなことは……」

その説明も、何度も繰り返されてきたせい、うんざりするように衿那は口を尖らせる。そんな投げやりな態度の衿那に、梨花子の声音に徐々に真剣味が帯びていく。

「そうね。でも——しつかり聞いておきなさい。貴方にとつて、ここからが大事なのだから」

「……」

その言葉に諭されるように、衿那も己の気持ちを改め直し、梨花子へと向き直つた。「呪詛の本体に触れる……それを行うためには、必ず対象の精神を経由する必要があるの。その過程で、私の中には否が応でも、櫛田衿那という人間の人格と記憶が流れ込んでくるわ。……そのことを、貴方にはきちんと自覚してもらいたいのよ」

それもまた、前もって聞かされていたことだが、いい加減な気持ちで領けるような事実ではなかつた。人格と記憶が流れ込む——つまりそれは、この星野梨花子という、ただ出会つて間もないような女性に、自分の何もかもが知られるということだ。

これまで衿那が生きてきた人生。秘め隠しにしておきたい、自身の感情や趣味嗜好。また、自分ですら把握しきれしていない、目を逸らしたくなるような、醜い脆弱な部分まで。

その全てを、赤の他人である相手に、赤裸々に覗き見られるということだ。そこに不快感を抱かない人間などいはいはないだろう。だが、それでも——

「……わかつてる。全部、わかつてる。……だから、さつさと終わらせなさいよ！」

それら全てを承知した上で、自分はここにいるのだと。揺るぎなき瞳で、衿那は梨花子を見据えていた。その瞳と真正面から向かい合い、梨花子は息をつく。

「……そうね。愚問だったかもしれないわ」

衿那は何もかも承知済みだ。全てを正しく理解した上で、彼女は今ここにいる。

ならば、これ以上の念押しは不要だと、梨花子も余計なことを口にするのではなくなった。

そしてそのまま、時間は流れていき——やがて、刻限が訪れる。

「では——始めるわ」

その言葉を合図に、周囲の者たちに緊張が走る。

梨花子は、衿那を取り囲むサークルの文字に手を当てながら、その口から何かしらの

呪文を紡ぐ。その囁きに呼応するかのように、刻まれた文字列が妖しい輝きに満ちていく。

そこに問題がないことを見届けながら、梨花子はそつと目を閉じていった――。

◇ ???

水面に投げ出されるような感覚が、星野梨花子を襲う。

まるで、高度一万メートルを飛翔する飛行機から、大海原へと叩きつけられるような痛みを錯覚させる衝撃。そのまま、梨花子の意識は水底に沈んでいくように落ちていく。

――何度やっても、この感覚には慣れないわね……。

他者の精神にダイブする際は、いつも似たような感覚に襲われる。梨花子は、己の意識をはっきりと認識するや、自らの意思で、さらに深奥まで体を沈ませていった。

水の中を泳ぐような感覚。息苦しさまで現実味を帯びてくる。だが、窒息しそうになる感覚に耐えながら、梨花子はさらに奥へ、もつと奥へと、潜航していく。

やがて、何もない暗闇の深海の奥に、一筋の光が差し込めるのが見えた。

梨花子はその光へと手を伸ばし――見える景色が一変する。

◇

梨花子の目の前に広がる光景は、櫛田衿那という少女の歩んできた、軌跡そのものだった。

病院で多くの人々に祝福されながら、この世に生を受けた少女は、一番に抱っこされた母親から『衿那』という名を授けられた。

女の子ながらも、勝気に育っていく衿那。幼い頃から、同い年の男の子に混じって遊びまわる姿を、少し困ったように父親と母親が、優しく微笑みながら見守っている。

さらに数年後。母のお腹の中に、新しい生命が宿る。家族が増えると聞かされ、初めの頃は純粹に喜ぶ衿那だったが、弟——実際に翔くんが生まれてからが大変だった。

まだ赤ちやんで、手足もおぼつかない翔くんを必死に面倒を見る両親に、自分が蔑ろにされていると感じたのか、彼女は生まれて初めて、嫉妬心というものを抱いてしまう。だが、そんな弟へのわだかまりもすぐに消える。衿那の気持ちを察した母親が、優しく、謝る様に諭すことで、衿那は姉としての自覚を持ち、新しい家族を受け入れていった。

——……………ふふふ。

それらの過去の記憶に目を通しながら、梨花子は口元を自然と緩ませていた。僅かな断片に触れただけでも理解できる。衿那が、愛されて育っていることが——。それは何も特別なことではない。全ての子供たちが、当たり前のように享受すべきも

のだ。現在の世では、その愛を得ることができない子供たちが多くなつたと聞くが、少なくとも櫛田衿那という少女は、そんな殺伐とした環境とは、無縁な暮らしをしてきている。

本当に、恵まれた子だと梨花子は思った——次に相まみえる、地獄を見るまでは。

瞬きする間に——見える景色は変わり果てていた。

『疫病神』『人殺し』。謂れのない誹謗中傷の文字で埋まる、机や教科書。悲鳴や嘲るような笑い声と共に、自身や家に向かって投げ込まれる石礫の雨。陰湿な嫌がらせに夢中なる子供たち。無責任な大人たちはそれを見て見ぬふり。

——……酷いものね。

それらは、蠱毒の呪いによって引き寄せられる、直接的な被害ではない。衿那の不幸体質によって発生した、二次災害——人の醜悪さが集束された、人間の手による地獄であつた。

それこそが、櫛田衿那がこの三年間に体験した、『不幸』そのものである。

梨花子も、ある程度の覚悟をしてきたつもりだったが、話を聞くのと、実際に記憶として体験するのでは、こみ上げてくる胸糞の悪さに明確な違いがあつた。衿那を取り巻く鬼畜共全員に向かつて、簡易的な呪詛を叩きつけてやりたい衝動に駆られる。

しかし、そんな鬼畜外道な所業に晒されて尚、記憶にある衿那は笑っていられた。

それは、強がりを取り繕った笑みでしかなかったが、それでも、少なくとも弟の事故がある前まで、衿那は笑顔でいられたのだ。彼女をそうさせていたのは、他でもない。多くの人々が掌を返す中で、たった一人、彼女の側に居続けた親友の存在。

その親友がいたからこそ、衿那は絶望の中でも一筋の希望を信じられた。真の地獄は、その親友を守るため、あえて遠ざけてしまつてからの半年間。その間、櫛田衿那という少女の胸の内から、あらゆる望みが絶たれていた。よくぞ今日まで、耐えてこられたものだ。

——……これは、責任重大ね……。

梨花子は改めて心に誓う。

一人の大人として、守り人である陰陽師として、生徒たちを導く教師として。

絶対に彼女を、彼女たちを救わねばと、強く決意させられていた。

◇

よき思い出や、苦痛な記憶とも別れを告げ、梨花子はさらに奥への侵入を試みる。

ここまで来ると、もはや衿那本人の意思すら介在しない、完全な無意識下だ。何も映らない闇の中を、ただひたすらかきわけて進んでいく。

そしてついに旅の終着点。その深淵へと梨花子はたどり着く。

——…いた、アイツだ！

深海の底に棲むと伝説にある、海クラークンの魔物のように、『それ』はそこで息を潜めていた。黒い大きな塊。周囲の闇と同化するように鎮座していたため、その輪郭をはつきりと視認することはできないが、おそらくこの怪物こそが、蠱毒の核——衿那を苦しめていた元凶だ。

こちらの侵入に気づいていないのか、それとも端から眼中にないのか。怪物は眠る様に静まつており、そこから動く気配がない。どちらにせよ、梨花子にとっては好都合である。

逸る気持ちを抑えながら、ゆっくりと怪物へと接近する。一旦深呼吸して息を整え、そのまま黒い塊、蠱毒の本体へと手を伸ばした。

瞬間——途方もない負の感情が、一気に梨花子へと流れ込んできた。

それは、櫛田衿那という人間の記憶ではない。蠱毒の依り代とされた、贄たちの記憶だ。媒介となった動物たちの怨念。蠱毒を製造する過程で、殺し合わされた彼らの、無念、生への執着、暖かい血の通う生者への嫉妬。

——邪魔よ!!

濁流のように流れ込んでくるそれらの怨念を、梨花子は意志の力で払いのける。怨嗟は、生者である梨花子を責め立てるように絶え間なく響いてくるが、そのくらいで根を

上げるほど、梨花子は陰陽師としても、人間としてもヤワではない。彼女は、あらかじめ練り上げていた探知術式を打ち込み、術者への追跡を開始する。呪いを通して繋がる、術者——メフィストへの悪縁を手繰り寄せるために。

——……………きた！

途切れることのない恨み言に晒されながら待つこと、数十秒。術式が効力を発揮したのか、一つの映像が梨花子の視界に映し出された。

窓もないような、薄暗い物置のような場所。ロウソクの灯りだけが、かすかに室内を照らしている。部屋の中には、黒い外套を纏った男が一人、椅子に腰掛けていた。

この映像こそ、現在のメフィストの状況を、リアルタイムで映し出すものだ。後は詳しい位置を特定するだけ。そのために、いくばくかの時間が必要になる。その位置の逆探知まで、秒読み段階に入った——まさに、その刹那だった。

こちらへ、背を向けていた外套の人物が——ぐるりと、首を回す。映像越しで人相などわからなかったが、その口元が、はつきりと動いているのが見えた。

「——誰だ？ 覗き見ているな？」

刹那の全身に悪寒が走る。

——勘づかれた!!

相手方にこちらの動きが知られた。直感で不味いと悟った梨花子は、急ぎ探知を中

断。慌てて己の意識を浮上させるため、蠱毒から距離をとろうと飛びすさる。だが――

足元から――黒い触手のような靄が飛び出し、梨花子の意識を絡めとる。

――し、しまっ……。

イレギュラーな事態に、梨花子の思考が一瞬の空白を生んだ、その直後――

――

眠っていた筈の化け物の双眸が――ゆっくりと開かれていった。

◇

一方の現実世界でも、その異変は起きていた。

「――衿ちゃん!?!」

比佐命の悲痛な叫び声が、静寂を保っていた食堂内に木霊する。

梨花子が櫛田衿那の精神世界に侵入する際、周りの者たちに特に注意したのが、「余計な手出しをしない」という一点であった。

儀式の最中、梨花子の意識は衿那の精神世界に入り込み、外部からの衝撃に、完全に無防備となる。その状態で、下手に危害を加えてしまえば、その時点で探知は失敗だ。

故に、よっぽどのがなければ、外部からの干渉はしないようにと、梨花子は強く言い含めておいたのだが――この状況が異常事態であることは、誰の目からも明らかだった。

「う……うあああ……!!? くあ、うわあああああつ……!!」

中央の椅子に鎮座したまま、白目を剥き、榎田衿那が苦痛に悶えだす。衿那が苦しみ出すのと同時に、星野梨花子も地面に倒れ伏し、動かなくなってしまった。

事前にくいつかのトラブルをシミュレートしていたが、これは些か想定外の状況だ。

この事態を前に、テッドとメリーが武装に手を伸ばす。だが、どう対処すべきかわからず、その場で踏み止まってしまふ。そんな中、親友の苦しむ姿に、ついに我慢しきれなくなったのか、命が弾かれるように飛び出していく。

衿那の元へ駆け寄ろうと、円の内側に足を踏み入れようとした——その刹那だった。

「……っ！ 下がれ！」

鈴鹿が制止の声と共に、走り出そうとした命の後ろ袖を掴み、思いつきり引つ張った。命の体は抵抗もできず引き戻され、その勢いのまま、地べたに尻もちを突く。

「痛っ！ 神宮寺さん！ 何で——えっ?」

お尻をさすりながら異議を唱える命。しかし、転倒した彼女のすぐ目の前を、真っ黒い『なにか』が、重機が通り過ぎるような轟音を立てながら、目にも止まらぬ速度で通過していく。

そして、その『なにか』が通り過ぎた地面が——歪な形で抉り取られていた。

「——っ」

あと一步。鈴鹿が制止するのが遅ければ、そこに踏み込んでいたであろう命は抗議の言葉を飲み込み、冷や汗を流す。いったい何がと困惑する彼女の耳に、鋭い声が響き渡る。

「……兄さん、あれを！」

メリーが愛用の日本刀に手をかけながら、声を張り上げる。警戒心を全開に身構える彼女を見た後、命は再び視線を前に、苦悶の表情を浮かべる親友の背後へと向ける。

そこで比佐命は見た。

衿那の真後ろ。彼女の影から、這い出るようにして飛び出してきた、真つ黒い塊を――

まるで、意思を持つているかのように蠢き、背後霊のように衿那の側に居座っている。影は徐々にその存在感を増していき、その姿を、意味のある形へと変化させていく。

ただの黒い塊でしかなかった『それ』が造りあげた姿。

それは、部屋の天井にまで届きそうなほどに、巨大な漆黒の大蛇――『蛇^{へびみど}蠱』。蠱毒の依り代となった、動物としての根源へと、その姿を回帰させたのだ。

その覚悟のほどを

東京某所 夜 とある山中の境内

俗人の目に触れられぬよう、嚴重に不可侵の結界が張られた神聖な神社。一般人にはその存在すら知られていないだろうが、陰陽師たちにとって、その場所は非常に重要な意味合いを持つ。

その神社を管理する者たちの名は——『土御門家』。

かの天才陰陽師、阿部清明の末裔にして、陰陽術という名の神秘を現代に至るまで継承してきた、由緒正しき陰陽師の一派。

ここは、その土御門の総本山だ。陰陽師として日々研鑽に励んでいる者たちにとって、まさに『聖地』といっても過言ではない、歴史ある土地なのである。

しかし、昨今。土御門家の者たちは、自らの血統への自負と、己の秘術を秘匿することに執着するあまり、世俗との繋がりや断つ傾向を強めるようになってきた。

呪術で苦しむ人々を放置し、ただひたすら引きこもり、研鑽に励むだけの日々。偉大な先祖の血を絶やさぬよう、血を色濃く残そうと歪な近親婚を繰り返す。

その偏屈ぶりは、身内からも離反者が出るほど。彼らの先見のなさに、見切りをつけ

た者が一人、また一人と、土御門の家々を後にする。

かつての威光は途絶え、土御門家は確実に、緩やかな衰退の一途を辿っていた。

土御門家が管理するこの地の一角に、その洞窟は存在する。

山の中にできた空洞を、さらに広げて作られた暗闇の世界。日の光が当たることのないその空間を、物々しい篝火が煌々と照らす。洞窟内の開けた場所には五つの柱が配置されており、その柱と柱を線でつなぐことで、地面には五芒星が浮かび上がる。

柱の上の台座にはそれぞれ、現在の土御門を代表する長老たちが鎮座している。

彼等こそ、今の土御門を実質的に取り締まる最高権力者。

各々が土御門の秘伝をその身に納めた『継承者』であり、現在の土御門の衰退を担った『老害』でもある。

彼らは、土御門の陰陽師としての絶対性を信じて疑わない。「自分たち以外の陰陽術など、全て亜流に過ぎない」と、同じ陰陽師の一派として双壁を成す、八咫鳥ですら見下している。

傲慢と偏見に満ちた長老たち——だが、そんな彼らが今、極度の緊張の中にあつた。

「——さて、それで？ 今日はいつたい、どのような用件かな、長老方？」

五芒星の中心に立った、スーツ姿にハンチング帽を目深く被った男が口を開く。

「……………」

男の何でもない言葉に、思わず委縮して押し黙る長老たち。台座の上から男を見下ろす位置に座つてはいるが、彼らの表情は一樣に優れない。その顔には敬意、怯え、畏怖。そういった感情が見え隠れし、複雑に揺れ動いている。

土御門家の長老たちが、そういった表情を見せるのは彼——九十九明ただ一人。彼の前では老人たちも、日頃から大つぴらにしている傲慢さを、引つ込めざるを得なかった。「……………既にお伝えしたとおりです、九十九殿。例の『鬼』の小娘についてでございます」

九十九に委縮し誰もが沈黙する中、意を決した長老の一人が、冷や汗を流しながら、恐る恐ると口火を切る。

「単刀直入に聞きます。……………何故、あやつめを人の世に招き寄せたのです?」

その言葉に同意するよう、他の長老たちが一斉に頷いていく。

鬼の小娘。それは言うまでもなく彼女——神宮寺鈴鹿のことである。

土御門に限らず、陰陽師にとつて人外の存在。妖怪や怪異といった化け物の類は、滅ぼすべき悪、というのが共通の認識だ。鬼神の眷属を名乗る彼の者たちも、例外ではない。

ところが、彼ら鬼たちの隠れ潜む里の位置を正確に把握していながらも、土御門はこれまで、彼らに手を出すことができずにいた。

「お言いつけどおり。我々土御門は奴らと敵対することなく、今日に至っております」
「貴方様が奴らを押さえつけているからこそ、我々も余計な手出しを控えてきたのです」
「それを何故……わざわざ自らの膝元へ、呼び寄せるような真似をなさるのです？」
「左様……。あのような化け物ども、一生結界の中に閉じ込めておけばよいのです！」

最初の発言者を皮切りに、次々と言葉を発していく長老たち。誰もが注意深く言葉を
選びながらも、腹の内に溜め込んだ不満を吐露していく。

土御門家が、鬼神の眷属討伐に乗り出せない最大の理由。それは、九十九明の存在が
大きく関係している。

鬼神の眷属と九十九は個人的に親しい関係を築いている。そのため、彼らと敵対しな
いようにと、九十九自身が強く厳命していた。彼に頭が上がらない土御門としては、そ
の言を無視するわけにもいかず、彼らは鬼の存在を認知していながらも、手を出さずに
いた。

だが、鬼が一匹でも里の外に出るともなれば話は別。九十九の考えを改めさせよう
と、さらに言葉を重ねる長老たち。その忠告も、段々と熱を帯びて展開されていく。

「……ふむ、なるほど。君たちの意見も尤もだ。しかし——」

ようやくと、長老たちが言葉を出し尽くしたタイミングを見計い、九十九は改めて口
を開く。だがその言葉が、洞窟内に反響した鳥の羽ばたき音によって中断を余儀なくさ

れた。

「ん、なんだ……カラス？ 使い魔か」

「誰だ！ 話が終わるまで、何人たりとも立ち入るなど、言いつけておいた筈だぞ!!」

洞窟の広間に現れたのは一羽のカラス。それを陰陽師が使役する使い魔だと一目で見抜き、長老の一人が憤りをあらわにする。九十九との会合が終わるまで、洞窟内には決して踏み入るなど、下の者たちに言いつけておいただけに、その苛立ちは当然のもの。

しかし、顔を真っ赤にする長老を、九十九が手で制止する。そこに、九十九は何の力も込めていなかったが、老人は気圧され、己の怒気を引っ込める。

カラスは、洞窟上空を二度、三度と旋回した後、九十九の肩に止まった。

「どうしたんだい？ あちらの方で何か動きでもあったのかな……捜し屋」

カラスに向かい九十九が問いかけると、彼の言葉に反応し、長老たちが俄かに騒ぎ出す。

「……捜し屋？ あの鴉羽家の『墮ちた神童』か!？」

「京都を追放され、九十九殿の管理下に入ったと聞くが……」

「不遜な小僧め！ ここは貴様が来るようなところではないぞ!!」

見下すように、蔑むように口々に叫ぶ老人たち。九十九が相手のときとは、えらく対応に違いがあるが、これが彼らの本質。現在の土御門の腐敗を招いた、彼らの慢心その

ものだ。

カラスは、そんな老害たちの相手を一切することなく、九十九に向かって語りかける。
『ちよつちね……だいぶ、ややこしいことになってるみたいだよ』

それは、セキセイインコなどが、ただ人の声を真似するような声音ではない。人間の声帯と寸分たがわぬ、はつきりとした口調で、カラスは洞窟内にその声を響かせる。

「ほう……？」

捜し屋の報告を聞き、九十九は興味深げに呟く。彼は懐から水晶球を取り出すと、それをそつと地面へと置いた。その水晶球の上に、捜し屋の使役するカラスが飛び乗る。水晶球が妖しい輝きに満ちていくと、その輝きに呼応するかのようになり、カラスの目から放射線状の光が放たれる。

カラスが視線を上へと向けると、洞窟の天井に巨大なスクリーン映像が映し出された。

「これは……いったい？」

プロジェクターさながらの機能に、土御門の長老たちも天上を見上げる。

映像は、ここから数十キロと離れた、森羅ビルの食堂を映していた。九十九馴染みの食堂では、巨大な黒い蛇の怪物を前に、子供たちが混乱と戸惑いの表情を浮かべている。

「おやおや、これはまた派手にやっているようだね……しかし——」

九十九は映像の中、何一つ揺るぐことのない意志で、怪物と対峙している少女を見つけた。

彼女へと視線を向けながら、土御門の長老たちへと、彼は呼びかけていた。

「せっかくだ。君たちも見届けるといい。鬼たる彼女の実力、その真価のほどを——」

◇

同時刻 榎田衿那の精神世界

「ちっ！ 不味いわね……」

精神世界の意識の底。星野梨花子は己の犯した失態に、苛立ちげに舌打ちする。

眠っていた筈の蠱毒の核、その意識が突如として目覚め活動を開始した。覚醒した蠱毒は梨花子など見向きもせず、水底から海面を目指すかのように浮上していく。

——あれが外に出てしまつたら、榎田さんの肉体は……!!

あの化け物の意識が表層化することによつて発生する悪影響を予測し、梨花子は早急に手を打たなければと、慌てて後を追いかける。

「邪魔よ！ いつまでも、纏わりつくくんじやない!!」

そのために、まず目の前の障害を排除する必要があつた。自分をこの地に縫いつける、黒い靄。梨花子の意識を浮上させまいと、鬱陶しく絡みつくそれに、不快感をあらわに叫ぶ。

次の瞬間、梨花子の全身から烈火が迸り、蔦のように絡みつく靄を焼き払う。

ここは精神世界。術具の類を持ち込むことはできないが、精神力と意思の力さえ健在であれば、現実世界と同じように術を行使することが可能だ。浄化の炎で灰となった燃えカスを払い落とし、梨花子はすぐにここから立ち去ろうとした。

『——そう簡単に、立ち去れると思わないでもらおうか』

しかし——その行く手を阻もうと、梨花子の進路に黒い人影が現れる。

人影は、全身が黒い霧のようなもので構築されていた。形としては酷く不安定なものだが、感じるプレッシャーは、蠱毒本体に勝るとも劣らぬものがあつた。

梨花子は足を止め、数秒ほど思案を巡らす。その影の正体を冷静に分析し、対応を練るため。やがて、答えを導き出した彼女は、警戒しながら影に問う。

「貴方は……さしずめ、術式を管理するために配置された、疑似人格といったところかしらっ。」

『一目でそれを見抜くか。ここまで侵入してきただけのことはあるな』

影は感心するような言葉を吐くが、そこには一切の感情の揺れ動きがなかった。

『いかにも。私はメフィストより生み出された仮初の意思。創造主たる彼に代わり、この呪いを維持、管理するために存在する、彼の者の代弁者……『端末』のようなものだ』
「そんなものまで……随分と凝り性みたいね、貴方のご主人様は……」

わざわざそんなものまで用意しているとは。一個人を呪うための呪術にしては、あまりにも用意周到だ。その手際に感心しながらも、若干呆れ気味に梨花子は頭を抱える。「でも、その維持すべき呪いの核がどっか行っちゃったみたいだけど、追わなくていいの？」

梨花子は、あえて挑発気味な台詞を吐いて動揺を誘う。相手の隙を伺い、早急に逃走を図ろうと試みる。しかし、影は特に取り乱した様子もなく、平坦な口調で答えた。

『お前が介入してこようが、しまいが、どの道私の役目は終わっていた。既に宿主に残された時間も残り僅かだ。ならば最後まで、好きに暴れさせても構わないだろう』

どうやら梨花子たちが予想していたとおり、呪いの進行は末期だったようだ。宿主たる絆那が死を迎えれば、当然のように端末も用済み。己の終焉を、彼は淡々とした口ぶりで語る。

そして、そんな平坦な口調のまま、影は梨花子を見据えて言った。

『だが、僅かでも障害となる可能性のある者を放置はできない。覚悟してもらおう』

もうすぐ消え去る運命とはいえ、まだ役割は果たすつもりのようなのだ。異物である梨花子を排除しようと、人型を保っていた影はその姿を膨らませ、戦闘態勢へと移行していく。

「……………一つ、聞いてもいいかしら？」

ふと、梨花子は影に向かって問いを投げかける。悠長に言葉など交わしている暇などないのだろうか、一つだけ。これだけは、どうしても尋ねておきたかった。

『なんだろうか』

影は意外にも動きを止め、彼女の疑問に答える姿勢を見せた。その律義さに苦笑しつつ、梨花子は改めて問う。ある程度、答えが予想できているその問いを――。

「メフィストはどうして、榎田衿那さんに呪いをかけたのかしら？ 彼女に恨みでもあつた？ それとも彼女の家族、或いはその先祖にでも、何か因縁があつたのかしら？」

『——その疑問、創造主に代わって答えよう』

彼女の問いに、代弁者たる端末は即答する。

『この宿主、榎田衿那という人間を狙った理由——そんなもの最初から存在していない』

「――」

返答を聞くや、梨花子の纏う空気が一気に冷え込む。それにも構わず、影は淡々と口にする。

『メフィストにとつて、この個体は数多くいる被検体の一人に過ぎない。彼が目指そうとしている、魔道の極み。この世界に隠された秘密、真理への探究。全ては、その答えを得るための糧だ。榎田衿那という人間の生命も、私という端末の存在も、全てはメフィストの知的好奇心を満たすための——単なる過程に過ぎない』

「……そう」

八咫鳥本部の報告に上がっていた、メフィストの手当たり次第のやり口から、その答えは予想できていたが、直に聞くことで、梨花子の中にふつつつと怒りがこみ上げてる。

『付け加えるのであれば、選定の基準として、一定の幸福度に満ちている者を選んでいくようだ。そこからの落差が、どの程度のものかを知りたかったらしい。また、呪術の構築には、彼個人の趣向も含まれている。私という人格を生み出したのも、ひとえに――』

「――わかった。もういいわ」

尚も淡々とした口調で続ける端末に、梨花子は黙るように言う。

『そうか。では、他に聞くべきことがないのであれば、排除に当たらせてもうおう』

影は再び、その姿を大きく広げ、黒い霧となって空間全体を包み込んでいく。

「……ごめんなさいね」

その霧の侵食に呑み込まれながら、梨花子は謝罪の言葉を口にしていった。

「貴方に恨みはないんだけど……私、今の話を聞いて、すつごく機嫌が悪くなっちゃったの！」

ただの管理者として生み出された端末相手に、怒りなど抱きはしない。

だが、梨花子はこの胸の内に渦巻くどす黒い感情を、発露せずにはいられなかった。「だから……ここから先は全部、私の身勝手。完全に、ただの八つ当たりよ!」

梨花子は己の内側で術式を練り上げる。浄化の炎が彼女の全身から吹きあがり、焔は巨大な獣の顎となりて、立ち込める濃霧を迎え撃つ。精神世界の奥底で、一人孤高なる彼女の戦いが始まる。

そして、時を同じくして――。

現実世界でもまた、とある少年少女たちの戦いの火蓋が切られようとしていた。

◇

森羅本社ビル 食堂

呪術の核となった蠱毒の意思『蛇蠱』は、梨花子の懸念したとおり、精神世界から飛び出し、現実世界に顕現した。巨大な漆黒の大蛇として、現世へとその姿を現したのだ。「……ちよ、ちよ、ちよ、ちよ! なんですか! アレ!」

突如として出現した、身の丈四メートルは越える巨大な大蛇の前に、テッドは狼狽する。目の前に現れた怪物が、いったい何なのか。専門家でもない彼には、正確に推し量ることができない。即座に距離を取り、臨戦態勢に入ってはいるものの、その表情は困惑に彩られていた。

怪物は、櫛田衿那という人間の影を水面に、その巨体を覗かせている。頭部から胴体

半分までが地上に這い出ており、未だにその全容を晒してはいない。だが、特徴的な鱗模様や、舌を出し入れする仕草、爬虫類独特の瞳孔の開きなど。その全てが、万人に対し、それが『蛇』であるという事実を強制的に理解させていた。

「う……………つ、うああ……………」

蠱毒がその形を明確にする一方で、櫛田衿那の意識は朦朧としている。彼女は、自身のすぐ背後に、化け物が忍び寄っていないながら、逃げる様子もなく、項垂れるように椅子に倒れこんでいた。大蛇に意識を向ける余裕さえないほどに、衰弱しきっていたのだ。

「衿ちゃん!？」

命が悲鳴を上げる。今すぐにも親友の側に駆け寄って、介抱してやりたいのだろうか、その動きを、鈴鹿が制する。彼女は、命を背に庇いながら、巨大な大蛇を見上げる。その眼光には一切の油断がない。その真剣な面持ちは、鈴鹿が眼前の大蛇を、完全に『敵』として認めていることが、明確に伝わってくるものであった。

「まったく……………こういうのを相手取るのは、僕たちの専門じゃないんですけど、ね!」

愚痴っぽい言動と共に、テッドの二挺の自動式拳銃が火を吹いた。

未だに疑問や、驚きを引きずってはいるが、素早く気持ちの切り替えを済ませ、彼は誰よりも先んじて、攻撃を開始。正確な射撃は大蛇の胴体に向かい、一直線に突き抜け

ていく。

しかし、目玉などの急所と思しき箇所は何発か撃ち込んでみたが、ビクともしない。「……はっ！」

テッドの行動に合わせ、呼応するように駆け出していたメリーが刀を振り下ろす。狙いは胴体。衿那の影から、大蛇を切り離そうと試みる。しかし、彼女の腕前ではその頑強な外皮に傷一つつけられず、その弾力に体ごと弾かれてしまった。人間相手に使用する、メリー特製の神経毒も効力を発揮した様子がない。

——これは………無理だな………。

その短い攻防でテッドはあっさり認められた。この大蛇は、今の自分とメリーでは手に余る。少なくとも、拳銃や日本刀程度の装備で、どうにかなるような相手ではない、と。

——！！

テッドとメリーの猛攻が途切れるや、ターン交代とばかりに、大蛇はその牙を剥き出しにして——吼えた。大蛇にとってその雄叫びは、ただの威嚇に過ぎない。だが、その叫びには、ただの蛇には絶対に持ちえない『負の感情』が内包されていた。

「ぐぐ………!!?」「………!!?」

聞くもの全ての心胆を寒からしめる喚き声に、テッドたちはたまらず耳を塞ぐ。その衝撃だけでも、十分な威力を持っていたが、当然それだけでは終わらない。次の瞬間、衿

那の足元の影がさらに膨らみ、残りの身体の部位——『尻尾』が新たに顕現する。蠱毒はその黒い尻尾を、ぶんと無造作に振り下ろす。

「——あつ!?!」

テッドは目を見張る。尻尾が振り下ろされる先には、未だ目を覚まさず、無防備に床に倒れ伏す梨花子がいたのだ。先ほど床を抉り取ったのもきつと、あの尻尾の一撃だ。それを直に叩き込まれようものなら、人間の肉体など、物言わぬ肉塊と化してしまう。テッドもメリーも命も、大蛇の威嚇行動に動きを阻害され、反応が遅れてしまっている。

間に合わない——誰もがそう思う中、その一撃に割って入る者が、一人だけ存在した。
「ふっ——」

神宮寺鈴鹿だった。誰もが蠱毒の威圧感を前に動けないでいる中、彼女一人は何の影響も受けていないのか、威風堂々たる貫禄で、その一撃を真っ向から受け止める。

「!……ほう………思ったより、力があるではないか、やるな、蛇よ!」

鬼の怪力は見事、大蛇の攻撃を喰いとめた。だが、鈴鹿は蠱毒の凶体を、払い除けることができずにいた。両者の力が——拮抗していたのだ。

鈴鹿は、そんな大蛇の力を素直に賞賛しつつ、視線をテッドたちへと向ける。

「おい、貴様ら、いつまでぼさつとしておる!」

「えっ……あ、は、はい!」

体を竦ませる彼らに、叱りつけるように激を飛ばす。その叱咤によって、テッドはハツと我に返り、同じように我を取り戻したメリーを伴い、二人係で梨花子を運び出す。そのまま、化け物の間合いの外まで移動し、テッドたちは彼女のバイタルを確認した。

「脈拍、呼吸、体温、異常なし!」

「……心音も正常、どうやら、眠っているだけのようですが……」

生命活動に支障がないことを確認し、一先ず安堵する。だが、梨花子は死んだような深い眠りについており、一向に目を覚ます気配がない。あの謎の化け物に対して、陰陽師の彼女ならば、何か有効的な手段を取れるのだろうか、これではこちらの戦力低下は否めない。

彼女が動けない以上、今いるこの面子だけで、この局面を乗り切る必要がある。

果たして、それでこの窮地を切り抜けられるか——と、思案を巡らせるテッド。だが、考えに浸る間もなく、戦況は刻一刻と変化していく。

テッドが大蛇を見やると、視線の先で、守りの姿勢をとっている鈴鹿を、蠱毒が激しく攻め立てていた。執拗に、狂ったように、大蛇の尻尾が無茶苦茶に振り回される。

「ぐっ……ぐっ……!」

反撃の隙間さえ突けないほどの猛攻。しかし、一方的な攻勢に晒されながらも、鈴鹿

の表情には余裕があつた。攻撃を受けるたびに、皮膚が赤く染まり、切り傷などの血を流しているが、それでも、彼女の口元には、常に不敵な笑みが浮かべられている。

ところが、そんな鈴鹿の余裕の笑みが、思わぬところで陰りを見せることとなる。

「……！　鈴鹿さん、足元を！」

「なんだ、メリー！　今取り込み中で……足元？」

最初にその亀裂に気づいたメリーが、鈴鹿に向かって注意喚起を促す。メリーの警告に、鈴鹿の意識が一瞬、床下へと注がれる。

そこへ、すかさず振り下ろされる、一際強烈な大蛇の一撃。不意を突いたその攻撃を、鈴鹿は難なく受け止めるが、その衝撃により——足元の床が崩れ落ちた。

「のわあっ!？」

鈴鹿の口から素つ頓狂な声上がる。度重なる大蛇の猛襲に、建物の方が先に限界を向かえてしまったのだ。さしもの鈴鹿といえども、足場が無ければ、踏ん張りをきかせることもできない。抜け落ちた床下から、彼女の体が重力に身を任せ、落下していく。

大蛇の両目がギラリと光った。またも尻尾が大きく振り上げられ、崩れる足元に意識を割かれ、まともに防御すらとつていない鈴鹿へ、その痛烈な一撃が叩き込まれる。

「——っ！」

鈴鹿の体は、ピンボールのような勢いで弾き飛ばされ、そのまま真下の部屋の床すら

も突き破って、さらに下層へと墜落していく。先日、渋谷を襲った局地的地震にもビクともしなかつた森羅ビル内部を、爆発するような振動が駆け抜けた。

食堂から下の階層がまとめて吹き抜けとなり、窓という窓が割れ、至る所に亀裂が走り、ビル全体が悲鳴を上げていく。

「うわあ……酷いな、コレ……。鈴鹿さん！ 生きてますか!？」

甚大な被害に顔を青くするテッド。ポツカリと空いてしまった風穴を覗き込みながら、下のフロアへと落下していった鈴鹿へ、その安否を問うた。

だが、テッドの狙撃手としての視力を以ってしても、鈴鹿の姿は確認できず、返事も無い。吹き抜けの底は、瓦礫の山で埋め尽くされている。そこに生き埋めとなつてしまったのか。

それを確認する間もなく、さらに事態は急変していく。一番厄介な邪魔者を片付け調子づいたのか、大蛇はその場からゆっくりと動き始める。

「つう……!？」

すると、蛇の動きに連動するかのようになり、気を失い、床に伏していた衿那の体も引きずられる。影を通して繋がっている衿那の肉体が、彼女の意思に反して、引っ張られていく。

「衿ちゃん!？」

無残に引きずり回される親友の姿に、命の口から悲鳴が上がる。テッドとメリーもそれに気づいたのか、武器を構え直し、大蛇への攻撃を再開しようとするのだが——それに先んじて大蛇が動いた。

——！！

雄叫びを上げながら大蛇が、テッド達に向かつて、猛牛のように突っ込んできたのだ。

「——つくー！」

「……っ！！」

「きゃあ!?!」

その巨体によるぶちかましに、咄嗟に回避行動を取るテッド。メリーも呆然と立ち尽くす命を伴い、横へと飛んだ。そして、大蛇は先ほどまでテッド達がいたところを通り過ぎ、その後方にあつた壁をぶち壊す。

「ああ……しよ、食堂が……」

馴染みの場所が音を立てて崩れ落ちていく様子に、さらに顔色を悪くするテッド。大蛇はそのまま、自らが空けた穴を通じて、食堂の外へと飛び出していった。

「ま、待って!?!」

命を先頭に、一同は急いで後を追う。廊下を出ると、そこには大蛇の通り過ぎた痕跡が残されていた。その巨体を引きずって通過した道筋が、階段を通じ上の階へと続いて

いる。

比佐命は、一切の迷いも、躊躇いも見せず、大蛇と共に引きずられていった衿那を追いかけてようと、階段を駆け上がる。その後をわずかに遅れて、メリーが追う。

「え、ええと……」

一人出遅れて、その場に残されたテッドは、その場で暫し考え込む。

鈴鹿の安否を確認するため下へ降りるか。食堂に留まり、梨花子が目覚めるのを待つか。

「うーん、……………ごめんない!!」

悩んだ末、彼は階段を駆け上る。

その場を放置して、とある場所へと駆け出していった。

◇

「……………そこまでです。比佐命」

「……………」

階段の踊り場。メリーは命の腕を掴み取り、その動きを止めることができた。命よりメリーの方が年下ではあるものの、握られた手のひらから感じる力は強く、命はメリーの手を振り払うことができずにいた。

「離して……………」

「……そんな非力な身の上で、何ができるといいますか?」

泣きそうな声で懇願する命に、メリーは現実を直視させるために言い聞かせる。

「……あの化け物相手に、貴方に何ができますか? 大人しく、部屋に戻っていただきます」

鈴鹿との攻防、食堂で暴れまわった破壊の痕跡を見れば一目瞭然だろう。ただの人間にあれと対峙して、抗う術など、ある筈もないのだということだ。

「……我々も、今の装備では心許ない。一旦態勢を立て直さなければ……」

テッドとメリーの現装備が通じないのも、実証済みだ。ここはすぐには追いかけて、武装を改めて挑む必要があった。おそらく、兄もそのために武器庫へ向かっているだろうと、その動きを正確に読んだ上で、メリーは命に進言する。だが――

「立て直す? そんな余裕があるの? そんな時間……衿ちゃんに残されているの?」

間髪入れずに返ってきた命の言葉に、メリーは咄嗟に視線を反らし、辺りを見渡す。

階段の至る所に残された、大蛇が通過した痕跡の跡には、所々血の跡も残されている。言うまでもなく、榎田衿那のものに違いはない。大蛇に繋がれたまま引きずられていった、彼女の生々しい傷痕。この足跡を辿るだけでも、衿那の苦痛を想像するのは容易だった。

「これ以上、衿ちゃんを苦しめたくないの。ただでさえ私は、ここに来るまで『二度』彼

女の手を振り払ったんだから……」

命は、親友を一刻も早く苦しみから解放したいのだろう。しかし、それだけではない。彼女にはこれ以上、逃げられぬ理由があった。

「二度目は、弟さんの事故の後。もう誰も巻き込みたくないって、自分の不幸で傷つけないって、そんな衿ちゃんの決意に沿うためだって……私は逃げたんだ……」

命の口から零れ落ちる声音からは、強い後悔の念がヒシヒシと伝わってくる。

「二度目は、再開のすぐ後。今度こそは力になるうって決めたのに、衿ちゃんの涙に怖気づいて、一人駆け出していく彼女の手を、私は引き留めることができなかつた……」

自らの罪を悔いるような面持ちだが、当然命に非などない。寧ろ、彼女はよく頑張つた方だ。陰陽師でも、鬼でもない。メリーやテッドのように荒事に慣れている身でもない。只の人の身で、よくぞここまで諦めずに食らいついてくれたものだ。

だが、そんな上辺だけの賛辞、他でもない彼女自身が望んでなどいない。

「ここでもまた逃げたら……私はもう二度と、衿ちゃんの隣を歩けなくなるよ……」

命が望むのはただ一つ。もう一度、親友と笑いあう未来だけだ。そのためにここまで来た。ようやく、その未来に手が届くところまで来たのだ。

「だからお願い……最後まで見届けさせて！ 元々これは、私たちが乗り越えるべき『不幸』なんだから!!」

「……」

命の決意を前に、メリーは彼女の腕から手を放し、もう片方の手で触れていた刀からも手を放す。

いざとなれば、この愛刀で命を斬りつけ、塗りつけられた毒で身動きをとれなくすることもできた。しかし、それで命を黙らせようとも、彼女は地を這ってでも進みそうな気迫でこちらを睨んでくる。メリーは僅かに逡巡し、諦めたように小さく息を吐いた。

「……決して無理はしないことです、いいですね？」

「ありがとう」

メリーの了承に命は未だ影があるものの、確かな笑顔で応える。

「……そうと決まれば急ぎましょう、どの道、今から引き返す余裕もなさそうです」

一度は引き返すことも考えたメリーだったが、辺り一帯に飛び散った血痕や、蛇が顕現した際の衿那の体調の変化を鑑みるに、悠長に装備を整えている暇もなさそうだ。助けるのが遅ければ、その分だけ手遅れになる可能性も高くなる。

二人の少女は大蛇の後を追い、二段、三段と飛ばし飛ばしで急ぎ階段を駆け上る。

そして——たどり着いた先。屋上へと続く扉へ手をかけ、比佐命は親友の名を叫んでいた。

「衿ちゃん!!」

その呼び声に応える者

榎田衿那の精神世界

『——すさまじい。たいしたものだな、陰陽師』

衿那の深層意識。一つの戦いが今、決着を迎えようとしていた。

『よもや、これほどの力の差があるとは。完全に想定外だったよ』

「……」

陰陽師たる星野梨花子と、呪詛の管理者たる端末との戦い。

視界を覆っていた濃霧は晴れ渡り、己の形状を黒い霧と化していた端末の意識も、ほんの一欠が残存するのみ。その残った意識体を、梨花子が何の感慨もない表情で見下ろしている。

どちらが勝者で、どちらが敗者なのかは明らかだ。

端末とて、されるがまま蹂躪されていたわけではない。ここは元より、呪いの苗床となっていた蠱毒の領域。侵入者を撃退する、数多の手練手管が用意されていた。

しかし、梨花子はその全てを、真正面からねじ伏せた。繰り出される攻撃を、迫りくる脅威を。何一つ臆することなく、全てを焼き尽くし、意志の力で跳ね除けた。

結果、梨花子はかすり傷一つ負うことなく、この戦いに勝利した。そして、勝利の余韻に浸る間もなく、衣服についた敵の焼けカスを払い落とし、彼女はその場を立ち去ろうとする。

その背中に向かって、端末は最後に忠告を言い残す。

『これで、済むと思わない方がいい。この状況は、我が目を通して、メフィストにも、伝わっている。遠からず、報復のため、刺客を送ってくるだろう。いや、それ以前に、果たしてお前に帰還すべき肉体が、残っているかどうか』

自身の消滅の間際まで、淡々とした口調で端末は梨花子へと語りかけていた。

『蠱毒の意識は覚醒し、今頃は現世にてその暴威を振るっていることだろう。もし、その暴力の渦に、巻き込まれ、肉体が損失するようなことがあればお前の意識は永遠に、この虚から抜け出せなくなる。この私が、そうであったように、な——』

最後の最後、端末は僅かに己の感情らしきものを垣間見せ——そして、消滅した。

「……」

さらさらと、砂のように散っていく相手の影に、梨花子は数秒ほど目を止める。だが、すぐに意識を上へと向け、その体を浮上させていく。既に頭の中では、現実に残してきた子供たちのことを考えている。

—— 榎田さん、早まらないですよ！

戦いの最中も、梨花子は特に衿那のことを気にかけていた。

蠱毒の意識が表に出るともなれば、衿那に掛かる負荷は、今以上のものになるだろう。ただでさえ、長年苦しめられてきた呪いのせいでも、衿那の心は不安定になっているのだ。もし、これ以上追い詰められ、彼女の疲弊しきった精神が限界を向かえるようなことになれば。最悪彼女は、自らの意思で最後の一线を越えてしまいかねない。

そんな結末を回避するためにも、一刻も早く、現実への帰還を果たさなければならなかった。

ちなみに——端末の言っていた、「自分の肉体が今頃どうなっているか？」という点についてだが。そちらに関して、梨花子はそこまで深刻に考えてはいない。

彼女は、正しく理解し、信用していたからだ。

現世へ残してきた、彼女の力を——あの化け物に秘められし、その実力のほどを。

顕現した蠱毒が、どのような形態で、どのような力を行使しようとも、関係ない。少なくとも、物理的な脅威を前に、アレが膝をつく姿など、梨花子には想像ができない。

古より、この国の人々から『鬼』と恐れられし、あの少女の敗北する姿など——

そして、そんな梨花子の予想したとおり。

「……………」

◇ 瓦礫の山に埋もれていた化け物が——今まさに、目覚めようとしていた。

森羅本社ビル 屋上

比佐命とメリーが屋上に踏み入れると——そこは炎に包まれていた。

森羅ビルの屋上にはヘリポートがある。昨夜も脱走した銀行強盗犯たちを追って、十九自らが乗り込んだ彼個人が所有するヘリの発着所。

そのヘリが蠱毒——大蛇によつて完膚までに叩き潰され、黒い煙を上げて炎上していった。

煌々と燃え盛る炎の中、夜の闇と同化するような漆黒を携えて、大蛇は天に向かって吼え猛つている。

放たれているのは、生きとし生けるもの全てを呪う叫び。

生き物の本能そのものに訴えかける雄叫びに、ほんの僅かでも知性がある生き物ならば、そこに込められている憎悪にたどり着き、その絶望にあらゆる生者が震え上がるだろう

「衿ちゃん!!」

だが、命は逃げなかった。足はがくがくと震え、今にも倒れてしまいそうなほどに顔面が蒼白だが、彼女は逃げずに、大蛇と向き合った。その近くで息絶え絶えと蹲る、親友へ——榊田衿那と声を荒げる。

「……」

その呼びかけに衿那は無反応だった。気を失っているのか、その場から動こうとしない。一応、かすかに胸が上下しているため、息はしているのだろうが、それも時間の問題に思える。

早く病院に運んで手当しなければ、最悪取り返しのつかない事態になりかねない。

「……」

しかし、そんな危機的状況の中でもメリーは迂闊には飛び込めない。悪戯に大蛇を刺激すれば、その分、繋がれている衿那の体が無為に振り回されることになるのだ。ある種の確実性があるまで、下手に手を出さず、メリーは静かに深呼吸してその時を待ち続ける。

そして——

「お、お待ちせ……はあ、はあ……」

「……遅いですよ。兄さん」

彼女が待っていたものの、実の兄であるテッドが遅ればせながらも屋上に顔を出した。

彼は自分の身長より幾分か大きめのギターケースのようなものを抱えながら息を切らせてやってきた。

「はあはあ……ここ、これでも急いできたんだからね……ああ、しんどい……」

「……鈴鹿さんと、梨花子さんは？」

遅れてきたテッドに文句を言いながら、メリーは後の二人。鈴鹿と梨花子の安否を問う。

「梨花子さんはあのまま安全なところに置いてきたよ。鈴鹿さんは……わかんない。正直そこまで確認してる余裕もなくてね」

「……そうでしょうね」

テッドは手短かに妹の質問に答え、メリーも彼の返答に特に深く踏み込まず、巨大な大蛇に向き直った。

他二人が動けない以上、現状でアレに立ち向かえる戦力はテッドとメリーの二人だけだ。メリーは改めて刀を構え直し、兄に告げる。

「……私があいつの動きを引きつけます。その隙に、兄さんはそれで、あの化け物を……」

「それしかなさそうだね……。仕方ない。出来るだけやってみようか」

テッドが渋々とそのような返事をした直後、メリーは愛刀を抜き放った。

そして、余計な打ち合わせなど不要とばかりにメリーは単騎で駆ける。

大蛇に向かつてたった一人、無謀ともとれる蛮勇を示していく。

◇

「大丈夫なの!!? あの子一人で!!」

たった一人で大蛇に立ち向かっていくメリーに、命は声を上げる。

メリーがその至近距離に入るや、大蛇は漆黒の尾を物凄い勢いで振り回す。その攻撃を紙一重、ギリギリのところまで回避しながら、メリーは器用に間合いを測っていた。衿那の身を気遣ってか、大蛇の体を大きく揺り動かさないように相手の注意を引くメリーは、いつ大蛇から致命的な攻撃を喰らってもおかしくない位置取りで必死に肉体を行使していた。その涙ぐましい戦いに、命の胸の奥が熱くなる。

一歩で、兄である筈のテッドは命の横で何かしらの作業に没頭している。どうやら、ギターケースから取り出した『何か』を組み立てているらしい。双子の妹に危険な戦いを強いらせておいて、いつたいに何をやっているのかと、疑問に思いながらそんな彼の行動に首を傾げる命であった、が――

「……………えっ?」

彼が組み立てている物が形なるうとした段階で、命は呆気にとられて、絶句する。

ここに至るまで、命は二人の少年少女が刀や銃で蠱毒と戦う場面を目撃していた。しかし、鈴鹿の『化け物』としての本性や、巨蛇として顕現した蠱毒のせいでも、それらの武器に対する忌避感というものが極端に鈍くなっていた。また親友の危機ということもあり、そちらに意識を割くことができず、あえて何も言わずに黙認していたのだが、そんな思考が吹き飛ぶほどの衝撃を——それは持ち合わせていた。

テッドが構えたもの『武器』を通り越して、もはや『兵器』だった

黒光りする攻撃的なフォルムこそ、拳銃と同じだったが、その大きさがまるで違う。命はその兵器をテレビなどの画面越しに見たことはあつたも、決してその正式な呼称を知らない。

その兵器の名称は——対物狙撃ライフル。戦車やヘリコプターなどを破壊するため
の大型の銃器。

それは戦場で使われる、人を殺傷するどころか、その肉片すらも粉々にする威力を秘めた兵器であつた。

テッドは組み立て終わったその兵器を、慣れた動作で立ち上げると、地面に伏せ、低い姿勢から銃口を蠱毒がいる方角へと向けた。その先には当然、戦っているメリーがおり、倒れ伏している衿那がいる。

「ちよ、ちよつと待つ——」

「あつ、耳は塞いどいてくださいねー」

命は咄嗟にテッドを止めようと彼に呼びかける。だが、彼女の呼びかけに答えることなく、テッドは軽い調子で命に耳を塞ぐように促し、そのままライフルのトリガーに指を掛けた。

◇

轟音。

そうとしか表現しようのない爆発音に、衿那は目を覚ます。

「……………ん」

今の彼女に、その音の正体は何なのかはつきりと確かめる余裕などないが、何とかして視線だけを大蛇へと向けると、視界の先には——漆黒の大蛇の胴体部分がぼつかりと、どデカい穴が空いている光景があった。

「よし、命中!!」

「……………お見事です、兄さん」

衿那の耳にテッドとメリーのものと思しき喝采が聞こえてくる。きつと二人が何かしたのだから、生憎と今の衿那にそれを理解する思考力も残されていない。蠱毒が顕現したときから、彼女の肉体には強い疲労感、目を開くことすら億劫になるほどの強烈な倦怠感が絶えず襲いかかっていたからだ。

——……くつ、また!?

初めて蠱毒が顕現したときのような、疲労感が再び衿那に襲いかかると。

衿那の視界では大蛇がその全身をプルプルと震わし、胴体はそのまま膨れ上がり、欠損した部分を補填しようと蠢き始めた。

次の瞬間——胴体が一際大きく震えだしたと思えば、体が、くり貫かれた筈の胴体が瞬く間に再生した。

「さ、再生した……」

誰かの絶望する呟きが聞こえ、自身の復活を知らしめるように大蛇は咆哮を上げる。反対に、衿那はさらに体力を消耗し、地面に力なく項垂れる。

これは、蠱毒が実体化に必要な力や傷を癒す力を、衿那から直接吸い上げているからだ。本来であれば衿那の深層、心の奥底で眠り続ける筈の蠱毒。だが、梨花子が接触を図ったことを察知したメフィストの手によって、蠱毒は外敵を排除するための『システム』として機能し始めた。

そして蛇は、具現化するために必要なエネルギー、体力、精神力を、宿主である衿那から拝借している。当然、その総量にも限界があるのだが、それでも蠱毒は際限なく力を吸い上げ続けるだろう。衿那の身など、一切気遣うことなく。彼女の肉体からは、水気のない雑巾から、さらに水分を搾り取られるかのように、力が、生気が抜け落ちてゆ

く。

どうしようもない喪失感をその身で味わいながら、衿那は成す術もなく横たわっていた。

——……どうすれば……良かったのよ？

どうして、自分はこんなところまで来てしまったのだろうか？

ただ、普通に生きてきた筈だ。

仲睦まじい夫婦の元に生を受け、ごく当たり前のような幸せな家庭で育ってきた。

幼い頃から勝気で、いじつぱりで、素直になれない生意気な部分があったかもしれない。

思春期を迎えた頃には、ちよつぱり両親に反抗的になつていたかもしれない。

弟とも些細なことで喧嘩して、下らないことに意地を張つたこともあったかもしれない。

それが——そんなこれまでの全てが、間違つていたとでもいうのだろうか？

それとも、どこかで選択肢を間違えたのか？

もつとうまく立ち回れば、もつと別の未来があり得たのではないのだろうか。

それが意味のないことだと理解していながらも、そう考えずにはいられない。

どうすれば、この苦しみから逃れることができたのだろうか？

どうすれば、こんなところまで追い詰められずに済んだのだろうか？

どうすれば、家族に辛い思いをさせずに済んだのだろうか？

どうすれば——良かったのだろうか。

衿那は考えた。考えて、考えて、考えて、ひたすらに考え続けて

——あつ……。

そこで——榊田衿那の脳裏に、とある一つの結論が生まれた。

蠱毒に生きる氣力を奪われ、本当に追い込まれた今だからこそ、浮かんできた答え。

「ははは……」

衿那の口から、乾いた笑い声が漏れだす。

——そうよ……

——簡単なことじゃない。

——私が………死ねばいいだけのことじゃない……。

ああ、そうだ。なんで今まで、こんな簡単なことに気づかなかったのだろうか？

最初から、そうしていれば良かったのだ。

自分さえいなければ、皆がこんな目に遭うこともなかった。

父も母も弟も、誰一人悲しむ必要もなかった。

こんな苦しい思いもせずに済んだ。自責の念に苛まれることもなかったのだ。

なのに、それなのに自分は生き続けた。みつともなく、生にしがみついてしまつていた。

「生きているだけで、周囲に不幸を撒き散らすだけの存在だというのに——

もつと早い段階で、この答えに行き着くべきだったのだ、決断すべきだったのだ。

「……………ん」

衿那は残る気力を振り絞り、懐からあるものを取り出す。

護身用に、常に肌身離さず持ち歩くように心掛けていた、カッターナイフ。催涙スプレーやスタンガン。同じ護身用なら、もつと便利で簡単なものがあるのに、何故こんなものを持ち歩くようになったのか。その意味が、ここに来てようやくわかった。

——きつと……こうするためだった。

衿那は、カッターの刃をそつと手首へと押し当てる。ひんやりとした感触が、心地よく伝わってきた。あとはこのまま力を込め、刃をゆっくりと引くだけ、それで終れる。

この刃を引けば、死ぬる。

それが今の衿那自身にとつての救いだと信じて——

それが彼女の願いを叶える最善だと信じ——

そんな決意を胸に、握る手に力を込め——

「——えりちやああああああんつ!!」

——……………ああ……………まただ。また、あの声だ……………。

衿那のやけつぱちな決意を制止するように、比佐命の声が、その虚ろな胸に届いた。その声に、あのととき、あの地下で交わした、あのやり取りが思い出される。

『——卑怯だよ、衿ちゃん……………』

『——悲劇のヒロイン気取って言い訳して』

『——不幸に怯えるだけの臆病者で終わっていいの!?!』

『——だったら——戦ってよ』

『——戦ってよ……………』

『う、ううう……………うわあああああつ!!』

次の瞬間——榊田衿那は握りしめていたナイフを、渾身の力を込めて振り下ろしていた。た。

◇

「……………なっ」

静寂が訪れる。誰もが榊田衿那の行動に絶句し、息を呑んだ。

誰よりも彼女の身を案じる命も、感情表現に乏しいメリーも、つい先ほど、新たな装備を取りに遅れて屋上に参上したテッドも、そして——それまで彼女のことなど、視界にも入れずに暴れていた蠱毒ですらも、その双眸を衿那に向けていた。

衿那の握るカッターナイフが、影から飛び出る大蛇の根本に振り下ろされていった。衿那が渾身の力を込めて刃を——その手に持つ武器を、蠱毒に向かって突き刺していたのだ。

「はあ、はあ……」

息も絶え絶えだった衿那は、目に怒りを宿して大蛇を睨みつけていた。

「ふざけん……じゃない……」

腹の底から吐き出すようにして、彼女は言葉を絞り出していた。

「ふざけんじゃないわよ！ このドクサレ爬虫類があつ!!」

そして——衿那は立ち上がった。

とつくに限界を迎えたボロボロの体に鞭を打ち、その両足を地につける。痛みを歯を食いしばりながら、残る力で、あらん限りの力で、蠱毒に向かって叫んでいた。

「調子に……のんじゃ……ない!」

「え、衿ちゃん……」

痛々しい体で果敢に大蛇へと挑む。そんな衿那の姿に、命は涙混じりに目を見張る。

「いつまでも……私の体で……好き勝手やってんじやないわよ。いい加減……私の中から……出ていきなさいよ!!」

さらに衿那は刃を大蛇から引き抜き、もう一度振り下ろそうと振りかぶる。矮小な己

自身の身を張って、彼女は蠱毒と戦う道を選んだ。

生きる——という選択肢を、櫛田衿那は選び取ったのだ。

だが、大蛇が軽く身体をゆり動かす。

「——かはっ!?!」

それだけで衿那の体は宙を舞い、背中から地面に叩きつけられる。

肺の空気が一気に持つて行かれ、体がバラバラに引き裂かれるような激痛が彼女を襲う。

「衿ちゃん!」

悲痛な命の叫びも虚しく、再び地に伏せる衿那に、立ち上がる力など残されていない。

だが、肉体の痛みなど、今の衿那にとってはどうでもいいことのように思えてしまう。

「なん……でよ……」

変わりに感じたのは圧倒的な無力感、そして、この理不尽に対する怒りと悔しさだった。

何故、自分がこんな苦しい思いをしなくてはならない。

こんな痛い目にあい、こんな屈辱に身を震わせなければならぬ。

何故、身に覚えのない相手からの、呪いなんてモノに、苦しまなければならぬのか。

それが——たまたまなく悔しかったのだ。

「誰か……助けてよ……」

衿那の瞳から悔し涙が流れるのは、こんなところで終わりたくないという気持ちの表れ。

彼女の生きたいという、偽りなき想いが、自然とその言葉を紡がせていた。

「この苦しみを、『不幸』を……誰か……誰か……誰か、終わらせてよ……」

残る気力を振り絞って出した声は、あまりにも小さな呟きだった。雀のさえずりにも等しいその言葉が、誰かの耳に届くことなど、ついぞなかった。

しかし、その心からの悲鳴に応じるように——その叫び声は轟き渡った。

【オオオオオオオオオオオオオオオオ——！！】

聞き覚えのある、咆哮。下の階層から響いてくる声の主は、ビル全体を震わせながら、徐々に近づいてくる。進路上の全てを粉碎しているのか、絶えず破壊音を鳴り響かせながら。

轟音は、屋上のすぐ真下まで迫りくるや、そこでピタリで鳴り止んだ。しかし、それは一呼吸置いただけに過ぎない。刹那の静寂を即座に打ち破り、屋上の地面が——爆ぜる。

火山の噴火を想起させる爆発。マグマと火山灰の代わりに噴き出す、瓦礫の雨に混じって、その『化け物』は、穴の底から飛び出してきた。

「——そこにいたか、蛇め……」

その化け物——神宮寺鈴鹿が、大蛇の真ん前に仁王立ちして、その巨体を睨み上げていた。

既にその形を、普段の『人』としての仮初から、『鬼』としての本性へと変貌させている。

見るもの全てを威圧する、その魂を震え上がらせる、異形なる風貌。

その恐ろしげな姿を、おぼろげな視界越しに、衿那は目視した。

そこには抗えない恐怖心があった。震えるような畏敬の念があった。

だが何故だろう。

——……ああ……良かった。

それ以上に、その威風堂々たる姿に、その雄々しい勇姿に、謎の安堵感を抱きつつ。榎田衿那はその意識を、穏やかに閉じていった。

化け物は激突する

比佐命は、その光景に視線を釘付けにされていた。

つい先ほどまで、彼女の視線は、常に衿那へと向けられていた。蠱毒に翻弄され、その生命を脅かされ続ける親友。今も彼女を想い、心配する気持ちに心変わりなど、あろう筈もない。

しかし、この瞬きの間だけ。命は親友の存在を、意識の外に置いてしまっていた。それほどまでに、命の心が惹きつけられ、魅入られていたのだ。

彼女の視線の先で対峙する、二匹の化け物たちに――。

一匹は巨大な大蛇――『蛇蠱』。

榊田衿那を苦しめる元凶。古式呪術『蠱毒』。その呪術の核たる、漆黒の大蛇。

既に、完全に現実世界への実体化を果たした蠱毒は、そのおどろおどろしい全体像を、命（みこと）たちの前に晒していた。食堂で出現したときよりも、さらにその巨体を大きく見せ、自分以外の全てを、憎しみのこもった瞳で、傲然と見下ろしている。

そして、大蛇の向かい側に立つ、もう一匹の化け物――『鬼神の眷属』神宮寺鈴鹿。一度は下層へと叩き落された彼女だったが、屋上へと連なる、全ての部屋の天井を順

番にぶち壊しながら、ここまで一気に這い上がってきた。

そんな常識の埒外にある行動に、一同嘩然としていたが、そんな些細な困惑も、穴底から飛び出してきた鈴鹿の姿に——全ての戸惑いが凍えるように、停止していた。

そう、屋上に現れた神宮寺鈴鹿は、その姿を『鬼』のそれへと変貌させていた。

その人ならざる異形を目に焼きつけながら、命は改めて思うのだ。

その姿は、息を呑むほど恐ろしく、

——ああ……そうだ、やっぱり。すつごく……綺麗だ。

息を呑むほど美しい、と。

命が鈴鹿のその姿を見るのは二度目だ。一度目はあの地下通路で。崩壊する地下から、自分たちを助けるため、鈴鹿はその真なる姿を、命たちの前に垣間見せていた。

異形と言つても、基本は人型だ。彼女自身の体格が大きく変わるわけではない。

しかし——頭部から生える、二本の角が、彼女が人間ではないということを、何よりも証明する印であった。邪悪で、禍々しく、刺々しい突起物。ひとたび、そのシルエツトが夜の闇に浮かび上がれば、見る者全てを無条件で震え上がらせることだろう。

だがそれ以上に——命に別種の感動を抱かせるものが、その立ち姿にはあった。

ポニーテールで結ばれていた、鈴鹿の漆黒の黒髪が、銀一色に染まっている。

ぱつちりと見開かれた、大きな黒い瞳の双眸が、輝くような黄金色へと変質している。

眩い金の眼光と、闇夜に映える銀の髪。その二つが、恐ろしさ以上に、全身から、何とも言えぬ神々しさを醸し出していた。

蠱毒とは真逆。負と穢れの塊というべき大蛇と対峙するその姿は、化物同士の闘争というより、まるで天の使いの加護を受けた戦士が、怪物を倒す神話の情景を描いているようだった。

その姿に、その神々しさに、命は感動に打ち震え、己が魂を強烈に揺さぶられていた。当然、その姿は憎悪にまみれた大蛇の血走った目すらも釘付けにする。最大限の警戒心を剥き出しに、蠱毒は姿を変じた鈴鹿へと咆哮を叩きつける。

「わあっー!」……くっ!」

その雄叫びに、鈴鹿のすぐ後方で、彼女を援護しようとする身構えていたテッドとメリーの動きが止まる。クジラの鳴き声のように雄大かつ、スピーカーがハウリングするような不快さをたたえた音響に、生理的嫌悪から耳を塞ぐ。

ところが、至近距離から放たれたその叫びを、鈴鹿はそよ風のように受け流す。

そして、彼女はすかさず、大蛇に向かって——吠え返した。

「ワッ——!!」

それは、先ほどのような周囲一帯に轟き渡るような、咆哮ではなかった。鈴鹿の腹の底から放たれたその吠えは、ビル全体を突風の様に駆け抜け、一瞬で消えていく。その

遠吠えには、蠱毒の雄叫びのような憎悪も、怒りも込められてはいない。それどころか、威嚇ですらない。吠えられたから、吠え返した。そんな、犬のような行動原理に基づく行為。

しかし、そのたつたの一吠えで——蠱毒は押し黙った。

その遠吠えに込められていた、圧力に押しされ、呪いは——自らその口を噤んだのだ。

大蛇の怯んだ様子に鈴鹿は、「してやったり！」と、悪戯を成功させた子供の様な笑みを浮かべ、散歩でもするような気軽さで、蠱毒に向かって一歩、足を踏み出した。

気圧されていた蠱毒は、鈴鹿の接近を前に僅かに反応が遅れる。だが、すぐに防衛本能が働いたのか、近づくと彼女に対し、すぐさま迎撃行動に入った。

鈴鹿が間合いに入るや、大蛇は先制攻撃をお見舞いする。食堂のときよりも長く、太く、重くなった尻尾の一撃が、鈴鹿の脳天目掛け、吸い込まれるように振り落とされていく。

人間ならば、原型すら残らなくなるような質量がこめられていたその一撃を前に、鈴鹿はそつと片腕を上げ——蠅でも払うような仕草で腕を振るう。

鬼へと変じる前は、両腕で受け止めるのが精一杯だった一撃が、それだけでのことで、あつさりとは打ち払われた。鈴鹿の足元に衝撃を伝えることもできず、大蛇の攻撃が無力

化される。

自身の攻撃があらわれた蠱毒だが、それにも負けずと、さらに攻撃を加えていく。真つ赤な目をより血走らせ、さらに猛烈な勢いで大蛇は尻尾を振るわせる。

さらにスピードが増し、鞭のように振るわれる大蛇の連撃。固唾を呑んで見守るしかできなくなつた人間たちでは、もはや目で追うことすらできない速度に達しているが、鈴鹿の驚異的な動体視力は、その全てを正確に捉えていた。

一つ一つを正確に、拳で、足で、頭突きで。払い落とし、受け止め、撃ち落としとしていく。その中に、『受け流す』という技術的な要素は一切ない。全ては力尽く。鈴鹿の鬼の膂力が、大蛇の攻撃を問答無用で蹴散らしていった。

その上で、鈴鹿の足は止まらない。嵐のような大蛇の猛追に晒されながら、前進していく。

あと数メートル。いよいよ鈴鹿が眼前まで進み出たところで、業を煮やしたのか、大蛇はその巨大な牙を剥き出しに、彼女へと飛びかかった。人間など、一口で飲み込んでしまえそうなほどに口を広げて、彼女を捕食しようと襲いかかったのだ。

「——ふっ！」

されども、それを待っていたとばかりに鈴鹿は口元を釣り上げ、跳び上がった。接近する大蛇の顔面に向かって放たれる、彼女の飛び膝蹴り。

完璧なタイミング、カウンター気味に炸裂するその一撃が——
果汁がびっしりと詰まった新鮮な果実のように、大蛇の頭部を無残に爆散させる。

◇

「……………すげーっ」

引きつった笑みを浮かばせ、二体の化け物が対峙した結果にテッドは目を見張る。

正直なところ、彼は鈴鹿がもう少し苦戦するものかと思っていた。鬼という化け物かどうかのようなものであれ、所詮は人の姿をした存在。もう一方の化け物である大蛇とは、リーチや重量の差で完全に劣っている。だからこそ、もしもの場合に備え、武器庫まで立ち寄って、装備を整えてきたのだ。

しかし、そんな彼の心配が、完全に余計なお節介であったことが、ここに明らかとなる。

大蛇の巨体から振るわれた尾も、鋭利な牙も、鬼神の眷属たる彼女には通用しなかった。

しかし——これで終わりでないことを、テッドたちは身をもって知っている。

「……………まだです！　まだっ、終わっていない!!」

勝ち誇る鈴鹿にメリーの警告が飛ぶ。彼女の言葉通り、大蛇は再び体を震わせて、再生を始める。先ほどのように潰された頭部が、瞬く間に復活を果たした。

「ほう……」

そんな大蛇相手に、一人鈴鹿は感嘆の声を上げる。観察するように大蛇を眺めて、その視線を、そのまま足元へと持っていく。その先に彼女が見据えていたのは、既に意識などない衿那だった。その容態は、あきらかに先刻以上に悪く、息も微かなものだった。再度視線を戻し、大蛇を睨みつけながら、鈴鹿は少し残念そうに呟く。

「ふむ、もう少し相手をしてやっても良かったが……仕方あるまいてー」

鈴鹿は再生したばかりの大蛇へと手を伸ばす。抱きかかえるよう、がっしりとその胴体を掴み、おもいつきりその体を引っ張った。

メリメリ、と蛇の胴体が軋みを発する。大蛇はその痛みに身悶えながら、尾で後ろから鈴鹿の体を引っ叩く。だが、彼女はそれすらも平気な顔で耐えきり、より一層腕に力を込める。

衿那の影から這い出ていた大蛇の体が、ずるずると引き上げられる。無理やり巣穴から引きずり出されるのを、嫌がるように身悶えする大蛇だが、その抵抗も虚しく、蠱毒の本体が見る見るうちに地上へと引っ張り出される。

そのまま、鈴鹿の怪力が蛇の上半身を衿那の影から引き離し——引き裂く。

——！！

絶叫——今宵一番の絶叫が、化け物たるものの口から狂ったように吐き出される。常

人であれば耳を覆わずにはいられないその絶叫にも、やはり鈴鹿は揺るぐことがなく、自らの手でねじ切った大蛇の胴体を無造作に投げ捨てた。陸に水揚げされた魚のように、大蛇はビチビチと力なく跳ね上がる。

——……ど、どうだ。今度は……。

鈴鹿の思い切った行動に表情を引きつかせながら、テッドは事の推移を見守る。このまま消滅するか、それともまだ再生するか、油断なく身構える。すると、ちぎられた大蛇の肉体が、燃え尽きた灰のように霧散していった。

——……終わりか？

その光景に、もはや再生する余力も残っていないなかったのだろうと、テッドも警戒を解く。

それは鈴鹿も同じらしく、変化を解き、角を引っ込め、髪と瞳が黒一色へと戻っていった。

「これで……終わりか……」

そして、そのまま鈴鹿が崩れ去っていく蛇から背を向けた——

その一瞬の隙を突くように——『それ』は飛びだしてきた。

「——なに!？」

蛇の残骸——

今まさに灰となつて消え去ろうとしていたその中から、一匹の蛇が飛び出したのだ。大蛇よりも遥かに小さな、それこそ、普通の蛇と寸分たがわぬ大きさの黒い蛇。完全に無防備となつていた鈴鹿は、咄嗟に腕を振り、その蛇を払い落とそうとするも、その腕を掻い潜り、

蛇は——まるで水面に飛び込むかのように、鈴鹿の体へと溶けていく。

「なっ！」「……鈴鹿さん！」「神宮寺さん！」

三人の悲鳴が虚しく夜空の下に木霊するが、鈴鹿の耳にその声が届いた様子はなかった。

彼女の瞳から、急速に光が失われていく。

蛇の——蠱毒の呪いとしての核は、あくまで小さい蛇の方にあつた。

鈴鹿が打ち倒したのは、衿那の精神力などを糧に作られた擬態に過ぎない。本体は常に宿主の奥底に潜んでおり、たとえ擬態の方を千切られたとしても、体内に残留することもできた。

だが、衿那の生命は風前の灯。これ以上留まっても、宿主と運命を共にするしかなくなる。

それを『蛇』としての、生存本能がよしとしなかつた。故に、蠱毒はあえて千切られる際に本体を胴体部分へと移動させ、息を潜めて待っていたのだ。

より強く、新鮮な、新しい固体に寄生するためのチャンスを一

◇ ???

「ん、……………は……………どこかのう?」

神宮寺鈴鹿は見知らぬ場所に、一人ポツンと突っ立っていた。

そこには白——どこまでも続く、果たしてない白のみの地平が広がっている。

「……………はて?」

不可思議な現状の前に、彼女は首を傾げる。自分は今いる空間とは似ても似つかない、夜の闇の中で大蛇との闘争に興じ、それを制した筈だ。しかし、周囲には衿那も命も双子たちもおらず、ようやく少しは見慣れてきた街並みの風景が、どこにも存在していなかった。

「? うゝむ……………」

本格的に自分の身に何が起こったのかわからず、さらに首を捻って鈴鹿は頭を悩ませる。

「……………ん?」

そこで、ふと足元に目が向く。

白一色に染まる世界に、いつのまにか自分を覆いつくす、巨大で朧げな影が揺らめい

ていたのだ。その影の存在に反射的に振り向き、その先で——巨大な一匹の大蛇が天高くから、こちらを見下ろしている姿を、鈴鹿は目の当たりにする。それこそ山ほどの大ききの、それこそ神話の世界にでも登場しそうなほどの、雄大な大蛇。

漂う気配自体、さきほど鈴鹿が打ち倒した蠱毒のそれではあったものの、その大ききから感じるプレッシャー、絶望感はその比ではなかった。

◇

この特異な白い空間内は、鈴鹿自身の精神世界だ。

呪う対象者に接触した蠱毒は、まずこの場所へと侵入してくる。そして、その人間の核と呼ぶべき意識を飲み込み、そこに居座るようになるのだ。

かつて、衿那もこの場所まで蠱毒に侵入され、なす術もなく大蛇に飲み込まれた。当時の記憶を衿那は保有していない。あまりの恐怖に、心が記憶を閉ざしてしまっていたのだ。

もし、このまま鈴鹿の意識が大蛇に飲み込まれれば、彼女も衿那のような『不幸』に陥るだろう。当然、蠱毒もそうするつもりで、鈴鹿の心の内へ侵入してきたのだから。

——！！

付け加えるのであれば、今の蠱毒は無理やり引き？がされたことに、怒り狂っていた。自分を雑に扱った、目の前の人間の少女へ怒りを、己が憎しみの全てを向ける。

「そうか、貴様が……」

ふと、眼前の少女が、何かしらの言葉を呟く。

呪いの核が、ただの蛇でしかない蛇蠱に、その言葉の意味を理解することはできない。これが犬やら、猫ならば、まだ雰囲気や口調で少女の言葉の意味を、何となく理解できていただろう。だからこそ、蠱毒は少女の戯言など無視して、己の呪術としての意思に従い、目の前の少女に憑依しようとした。

「貴様が元凶か……」

しかし、少女と目が合った瞬間——憎しみや、怒りといった感情しか持たぬ筈の蠱毒の中を、まったく別の『なにか』が駆け巡る。

「貴様が！ あの娘にとり憑いた呪いの本体か!!」

さらに甲高い声で吼える少女に、蠱毒の中を駆け巡った『なにか』は、さらに速度を上げる。蛇は、その感情を無視し、なりふり構わず少女に向って襲いかかろうとする。

しかし、蛇は動かない——いや、動けずにいた。

蛇でありながら、蛇に睨まれた蛙のように固まってしまった。

それは——生物としての本能。

呪いとなったことで、忘れ去ったと思っていた筈のものだった。

ただの蛇として生きていた頃、天敵に対して常に抱いていた感情——

それこそが、恐怖だ。

捕食者たちと相対した際の戦慄、圧倒的な絶望。

その感情を今、自分の口で丸呑みできるほどの大きさの、ただの人間の少女に感じている。

いや、違う——蠱毒は確かに見た。

少女の後方に浮き出た影を——山ほどの大きさの蛇と、同等の巨大さを持つその影の姿を。

どんな強固なものでも噛み砕けそうな鋭利な牙。

目につくもの、全てを威圧するような眼力。

蛇の牙など、ものともしない分厚い皮膚。

そして——猛々しくそびえ立つ、二本の角。

もし、蛇が人間ほどの知識を持っていれば、その姿を見て、あるものを連想できただろう。

——『鬼』——

人間から、ときに恐れられ、ときに敬われる、人ならざるもの。影はまさに、鬼そのものの姿をしていたのだ。

だが、蛇にそんなこと理解できるわけもなく、ただ己の理解を超える巨大な存在を前

に、怯え戸惑うのみ。そして、その戸惑いが——この二体の化け物の勝敗を決定づけた。ここは精神世界。質量やエネルギー、大きさといった概念は、ほとんど意味を成さない。何よりも重要視されるのが、精神力や信念といった、強靱な『意思の強さ』だ。鬼の存在に恐れをなし、怖気づいてしまった時点で、蠱毒の立ち位置は確たるものとなった。

気がつけば——蠱毒は鬼の掌の上で、縮こまるだけの哀れな小動物と化していた。さながら、釈迦の掌で踊る孫悟空のように。

自身の身に何が起きたのか理解することもできず、蛇はオロオロと取り乱す。

無力な存在と成り果てた蠱毒を相手に、鬼は一片の慈悲も、微塵の躊躇も見せず。不動明王の如き容赦のなさにて、ゆっくりと拳は閉じられていき。

◆ 哀れ蠱毒は、その最後を誰にも見届けられることもなく、握りつぶされ——消滅した。

森羅本社ビル 屋上

それは時間にして、数十秒にも満たなかった。鈴鹿本人の体感時間で数分はあったのだろうが、実際の現実世界では、その程度の時間しか経過していない。

その間、テッドたちは静まり返る屋上で、立ったまま硬直する鈴鹿に視線を送ってい

た。

そして、たまたらず誰かが彼女の元へ駆け寄り寄ろうとした、まさにそのタイミングで——
「——ぷはっ！」

神宮寺鈴鹿は、現実世界へと帰還を果たした。

「鈴鹿さん、ご無事でしたか！」

止まっていた時間が動き出す。テッドが鈴鹿の元へと駆けつけ、彼女へ声をかけた。

「うむ……大事ない」

「何が起こったんですか？ あの蛇は、いったいどこへ？」

精神世界で起きた事の顛末は、外の世界にいた彼等では知る由もない。当然のように鈴鹿へ説明を求めるテッドだが、その問いに彼女は頭を悩ませる。

「うむ……なんと説明すればよいか……正直、儂にもよくわからんのだ」

彼女としては、特にこれといって特別なことをした覚えはない。ただ、怒りのままに蠱毒を脅しつけ、それに怯んだ蛇が、勝手に自滅した。鈴鹿からすれば、そんな感覚だった。

その理屈を説明する知識も語彙も、残念ながら鈴鹿は持ち合わせてはいない。

「は、はあ……う？」

陰陽師たる梨花子ならば、状況から分析して、何かしらを推測することができたのだろ

うが、素人のテッドでは、それすらままならない。鈴鹿と一緒にあって、ただ首を傾げるばかり。

だが、いつまでもそんな考えに、時間を割いている場合ではなかった。

「……兄さん！」

メリーが兄を呼ぶ。蠱毒の呪縛から解放された、榎田衿那の元に、メリーと命の二人が駆け寄っていた。衿那の消耗は激しく、容態は深刻だ。急ぎ応急手当てを施し、早々に専門の機関へ搬送する必要があった。

「メリー！ 救急箱持ってきて！ それから、比佐さんは病院に連絡を！」

「……了解です！」

「う、うん！」

テッドは的確かつ、素早く指示を送り、屋上は一気に慌ただしくなっていく。

「鈴鹿さん！ 榎田さんを下まで運びます。お願いできますか!？」

「ん？ ああ、承知した！」

鈴鹿もまた、テッドの呼びかけに応じ、黙々と彼らの手伝いに奔走するようになった。

◇

同時刻 土御門家総本山の洞窟

鬼神の眷属たる神宮寺鈴鹿と、蠱毒の化身たる蛇蠱。

捜し屋の使い魔を経由し、洞窟の天井に映し出されていた両者の戦いが、こうして決着と相成った。映像はそこで一旦途切れると、水晶球も光を失う。役目を終えた水晶球を拾い上げ、九十九明と一緒に両者の戦いを見届けた、観戦者たちへ声をかける。

「さて……いかがだっただろうか、諸君？」

九十九の言葉に、ハツと我に返る土御門の長老たち。彼らは、鈴鹿たちの戦いに時が経過するのも忘れ、見入ってしまった。九十九に感想を尋ねられて、ようやく意識を現実へと引き戻す。そして、静寂だった洞窟内が、老人たちの騒めきで満たされていく。

「悪鬼め！ よもや、これほどとは！」

「……直接精神に干渉した呪詛の類すら、その内側で殺しきってみせたぞ……」

「それにしても……星野家の娘。何とも無様な醜態を晒しおったな。恥さらしめ!!」

「分家とはいえ、土御門の血筋であろうに、所詮は外界に下った俗人か……」

「やはり、鬼は侮れぬ！ 結界の外になど、解き放つべきではないぞ！」

口々に、好き勝手な言葉を並び立てる老人たち。その内容の大半は鬼である鈴鹿への悪態。蠱毒の対処に失敗した、梨花子への罵倒など。

大蛇が打倒されたことにより、救われた少女がいることを、彼らは気にもかけていない。

『やれやれ、老害共がうるさいね……』

長老たちの狼狽する様に、映写機の機能を果たしていた、捜し屋の鳥が肩を竦める。九十九の肩に止まり、彼にだけ聞こえるような音量で、老人たちを嘲る言葉を吐き捨てる。

浮足立った老人たちの議論は、さらに白熱していき、一向に収まる気配を見せない。その討論を、暫く黙って見守っていた九十九だったが——次に彼が放つ、力のある一言が、そんな不毛な言い合い、一瞬で終わらせることとなる。

『——静まりなさい』

「」

一声。九十九の鶴の一声で、その場が嘘のように静まり返る。

九十九が用いた『言霊』の威力は、老人たちに、呻き声一つ上げることすら許さなかった。

静寂は数秒ほど続き、唐突に途切れる。

術の効力が切れたことにより、長老たちは思い出したかのように空気を求め、息を荒げる。

忙しなく息をつく彼らに目を向けながら、九十九は話の続きを口にしていく。

「さて……先ほどの戦いを見て、各々思うところがあるようだが、彼女の処遇については

引き続き、私の方に一任させてもらいたい。なに、君たちに迷惑をかけるつもりは毛頭ないよ」

「はあはあ……いい、いえ……しかし、それは！」

その申し出に、呼吸を乱しながらも、長老の一人が異議を唱える。ここで折れてしまえば、それこそ本末転倒。何のために、九十九をここまで呼び出したのか。彼等は、何とか九十九に思い止まって貰おうと、さらなる説得を試みようとする。

しかし、それに先んじて、九十九は口を開いていた。

「もしも、だ……」

鮮明な彼の言葉が洞窟内に反響する。

その声に、先ほどのような言霊は込められていない。だが、その声には、今までの会話の中にはなかった、低く、強く、重苦しい重圧のようなものが込められていた。

「もしも、彼女——神宮寺鈴鹿が人間にとって、脅威でしかないのであれば……真に害ある悪鬼でしかないのであれば……そのときは——私自身の手で始末をつけよう」

『!?!』

「そ、それは真ですか?」

どよめきが起きる。捜し屋の使い魔からも、驚いた気配が伝わってきた。それほどまでに、土御門家にとって、彼の申し出は意外だった。九十九が『鬼』に対して、どこか

甘い意識を持つていると考えていただけに、その衝撃はより大きなものとして広がりを見せる。

再び騒めき出し、互いに言葉を交わす土御門の長老たち。そんな彼らに、声のトーンを元に戻し、九十九は穏やかに問いかける。

「それとも、私では鬼たちを相手取るのに力不足かな？」

「い、いえ！ そのようなことは決して！」

「しかし、本当によろしいのですか？ 貴方にとって、彼らは——」

長老の一人が何かを言わんとする。だが、その言葉を押し止め、九十九は真剣な面持ちで答えた。

「勿論さ。これは私が受け持つべき当然の義務だ。もしものときは、その義務を果たすだけ」

そこに、冗談やおどけた様子は見受けられない。そんな九十九の態度に後押しされ、腹を括った、土御門家一行。彼等は無言で視線を交わし、頷き合った。

「……わかりました。そこまでおっしゃるのであれば、これ以上、我々から言うべきことはございません。全て……貴方に一任致します」

最後に、土御門の長老たちは台座の上から、平伏するように九十九に頭を垂れる。

「くれぐれも、油断、手心のないようお願い致しますよ。九十九殿……いや——」

中央の台座の老人が代表し、彼の名を、その真の名を告げながら――。

「――安部清明様」

こうして、『鬼神の眷属』神宮寺鈴鹿の処遇をめぐる討論が、本人の一切関わらぬところで、締めくくられることとなったのである。

エピソード　　化け物は笑う

渋谷中央病院

「……………またか」

病院の一室で、櫛田衿那は目を覚ました。

幾度となく経験した、気絶してからの意識の覚醒という感覚に少々うんざりしながらも、体を動かし、周囲を見渡しながら、自身の調子を確かめる。体中に包帯が巻かれ、点滴まで受ける身でありながら、衿那の心身は不思議と軽い。

自分の体を縛りつけていた枷や鎖が外れたかのような、ずっと全身にこびりついていた何かが、剥がれ落ちたかのような開放感。窓から差し込む眩い光が、カーテンを揺らす穏やかな風が、それらの気分をより爽やかなものにしてきている。

「……………いま……………何時かしら……………」

個室の壁にかけられている時計に目をやる。針は丁度、正午を指し示していた。側にあるテーブルに花やら、果物やらと、見舞いの品々が置かれているが、誰か来ていたのだろうか。

「命は……………いないか……………」

だが、肝心の見舞客はおらず、親友の姿がないことに、衿那は少し落胆する。

「——あら、おはよう。ようやくお目覚めね……」

丁度そのとき、病室に星野梨花子が入室してきた。普段通りの白衣姿。女医と勘違いするほどに病室に溶け込む彼女を見て、衿那が最初に感じたのは『安堵』だった。

梨花子はいつになく優しい声音で、目覚めたばかりの衿那へ微笑みかける。

「調子はどう？ まだ色々と痛むと思うけど……」

「……平気よ。少し頭がぼうつとするけど……むしろ、清々しい気分だわ」

強がりなどではない。今の自分の心情を、正直な気持ちとして吐露する。

そんな衿那の気持ち伝わったのか、梨花子も心地よく表情を緩めた。

「そう……なら、良かった」

「……………ねえ。あれからどうなったの。私はいつたい？ 命は？ あの化け物は？」

自分が氣を失ってから、いったいその後どうなったのか。ようやく頭に血が巡ってきただけで、衿那は思ひ出すように問いかける。

「そうね……説明しなくてはならないことが山積みだけど……いい？ 落ち着いて聞いてね？」

梨花子は、その質問に答えるため、ベッド脇の椅子に腰掛ける。

そしてゆつくりと、衿那に事の顛末を語っていった。



いくつかの報告を、衿那はひととおり聞き終える。まず、自分が三日もの間、病院のベッドで眠り続けていたという事実には驚く。

あの屋上での巨大な大蛇との激闘の末、彼女はすぐさま病院まで運ばれた。一度はかなり危険な状態までいったという話に背筋をヒヤリとさせたが、今こうしていられるということは、どうやら無事に乗り越えられたようだ。

そして、目覚めるまでの三日間。多くの人が見舞いに来ていたという。一日目は命がつきつきりでいてくれたらしいが、入学も間もない高校生を、これ以上休ませるわけにもいかないと、梨花子が説得したらしく、今は学校だ。

その梨花子を初め、鈴鹿や双子の兄妹も何度か顔を出してくれたらしい。

さらには衿那の両親——彼らもまた、娘の入院を聞き、実家からすつ飛んで来たという。

自分が病院に担ぎ込まれるなど、そう珍しくもないというのに、両親の過剰な心配に呆れつつ、どこか有難いと思う気持ちも、彼女の胸の内を満たしていく。

だが、それよりも、何よりも彼女を驚愕させた事実がそこにはあった。

「……消えた？」

「ええ、『不幸』の原因である呪術……その核となっていた蠱毒は、鈴鹿ちゃんが引き剥

がしたわ。これ以上、貴方が理不尽な不運に振り回されることはなくなったの。安心しなさい」

「……………」

「腑に落ちないって顔ね…………まあ、無理もないか…………」

しかし、その吉報を聞かされて尚、衿那の表情が特別晴れるようなことはなかった。

本当に呪いが消えたのか。ずっと気絶していた衿那には、それを実感として受け取ることができない。確かに心身共に軽くなったような気分だが、それだけだ。

故に、衿那がそのような浮かない表情をするのは、仕方がないことだった。

「でも…………確かに、貴方の心配は間違ったものではないわ」

梨花子の口調が、どこか暗く、寂し気なものに変わる。

「呪いは消えた。それは確かな事実よ。けどね…………貴方の身から、不幸そのものが失われたわけじゃない。寧ろ、これからは「呪いのせい」…………何て、言い訳もきかなくなる」

そう、呪術がなくなったからといって、不幸そのものがなくなったわけではない。

「本来、人の運勢なんてものは、人の手によってどうにかなるものじゃない。人を不幸に陥れる呪術ですら、貴方の身から完全に幸運を奪えなかったように、ね」

もし、衿那が真に不幸だったというのなら、彼女はここまで辿り着けずに終わっていた。

「忘れないで、櫛田衿那。貴方は一人ではない。貴方の周りには、常に誰かがいた筈よ……」

きつと、衿那一人なら早々に押し潰されていただろう。衿那の精神に直に触れ、その記憶を追体験した梨花子だからこそ、それがはつきりと理解できる。

「この先もきつと、貴方にはいくつもの試練が待ち構えている。今以上の『不幸』が、何の脈絡もなく降りかかるかもしれない。だからこそ、今度こそ、無理に一人で抱えようとせず、周りに相談しなさい。きつと、力になってくれるわ……」

「……」

「誰だっでもいいのよ。命ちゃんは当然として、両親に相談するのもいい。鈴鹿ちゃんに力を貸して貰ってもいいし、勿論、私に頼ってくれてもいいの。それでも養護教諭だからね。いつでも保健室で待ってるわ。きつと——目を覚ました弟さんも、力になってくれるから」

「そうね………えっ?」

養護教諭からのアドバイスに素直に頷く衿那だったが、最後に出てきた人物に、彼女の思考は完全に停止する。そして、顔を上げた衿那の表情は、戸惑いと驚愕に染まっていた。

「………いま………なんて?」

震える声で、衿那は問いかける。

「そういえば、伝えるのが遅くなったわね……二日前のことよ」

梨花子は少し悪戯っぽく、それでいて、慈愛に満ちた微笑みを浮かべ、言った。

「ご両親から直接聞いたのよ。貴方の弟さん、翔くんが——目を覚ました、と」

「……………」

「まだ貴方と同じで、本調子じゃないようだけど、医者の話によればもう心配はないそうよ」

「……………」

「だから貴方も、しっかりと怪我を直して……櫛田さん？」

「……………」

衿那は——自身の視界がぼやけ、目に涙を貯めていることに気づけずにいた。

涙声を上げていることにも、胸を満たすこの気持ちにも。

ただ一つ、梨花子の言葉の意味を理解することで、悟ることができた。

かけられた呪いが、自身を取り巻く理不尽な不幸が今、ようやく終わりを迎えたことに。



その後、衿那が泣き止むのを待つてから、担当医を呼んでくると告げ、梨花子は病室を後にする。部屋を出るまで、梨花子は優しい表情を崩さなかつた。しかし、廊下を歩き始めた彼女は、部屋にいたときとは異なり、ぶすつとした無表情で不機嫌を貫いている。すれ違う入院患者も、看護師たちも、彼女を避けるように道を譲っていく。

「——まだ、気にしているのかい？」

恐れ知らずにも、そんな彼女を呼び止める男がいた。九十九明だ。

「今回の一件、君一人の落ち度ではない。寧ろよくやった方さ。限られた時間の中で、よくぞここまで……だが、今回は相手が悪かつた。あのメフィスト相手に、こんな短期間で探知を試みようなどと。そんな無謀を提案した、八咫鳥の上層部こそ、責任を問われて然るべきだ」

「いいえ……全ては私の未熟さが招いたこと。言い訳の余地もないわ……」

梨花子が抱く感情は怒り。そして、その矛先は他でもない、自分自身に向けられていた。

当初の目的だったメフィストの探知にも失敗し、あまつさえ、蠱毒を目覚めさせるきっかけを作り、衿那たちを危険に晒してしまったことを、彼女はずつと後悔していたのだ。

「ここ最近、陰陽師として活動してなかったから……少し平和ボケしてたわ……」

窓の外を見やりながら、梨花子は自虐的な笑みを浮かべる。

「平和ボケ？ いいじゃないか！ 何事も平和であることに越したことはないさ」

だが、彼女の言葉を聞き、九十九は声を弾ませた。

「それに……私は君が陰陽師として研鑽に励むより、一教師として、子供たちの相談に親身になっている方が性に合っていると、今の君を見てそう思うんだ」

「……………」

「さあ、もう学校へ戻りなさい。榎田さんが心配だったのもわかるが、悩みを抱えた生徒は彼女一人じゃない。影武者代わりの式神に、生身の傷の手当はできても、心の傷を癒すことはできない。我が校の養護教諭は……君しかないのだからね」

すれ違いざま、九十九は梨花子の頭をそつと撫で、その場から立ち去っていく。

セクハラ——もとい、幼い子供をあやすかのようなその仕草に、梨花子は不快感を示すことなく、彼の背を見送りながら、心から感謝と敬意を込めて頭を下げていた。

「ありがとうございます……師匠」

◇

4月下旬 刻印学院高校 一年A組

朝のHR前の一年A組の教室。ごくありふれた日常風景がそこにはあった。大多数

の生徒がクラス内に集まり、とりとめもない雑談に耽っている。

ここ数日の彼らのもつぱらの話題は、例の『渋谷の街中に発生した巨大な大穴』について。

自分たちの通う高校の同区内で起きた驚愕のニュースに、不安半分、興味本位半分で様々な憶測を熱く語り合っている。ある程度時間が過ぎたこともあり、その話題もいくらか下火になりつつあるが、やはりあれだけの大事件、そうそう収まるものでもなかった。

もつとも、それは何も知らない部外者たちの声。その現場に居合わせた当事者である二人の少女からすれば、既に終わったことであり、周りとの温度差を感じられるほどに穏やかな声音で、少女たち——神宮寺鈴鹿と比佐命は他愛もない世間話に花を咲かせていた。

「命よ、お主のクラス、一限目はなんだ？」

「国語だよ。鈴鹿ちゃんは？」

「……………こちらの一時間目は英語の授業よ。あんな奇奇怪怪な言語が朝っぱらから教室内を飛び交うかと思うと、今から憂鬱な気分になるわ……………」

「ははは、それは……………大変だね……………」

そう愚痴りながら、自分の机に頭をこすりつけ、鈴鹿はうな垂れる。命（みこと）は

生暖かい眼差しで鈴鹿のことを見守りながら、苦笑いを浮かべた。鈴鹿はA組、命（みこと）はB組と、それぞれ別々のクラスであつたが、暇さえあれば二人はこうして言葉を交わし、親交を深めていた。

しかし、彼女たちの会話はまだ少しきこちなく、どこか途切れ途切れだ。

それは、命がときより、鈴鹿の隣——誰も座っていない空席に目を向け、寂しげな表情を浮かべるなど、心ここにあらずといったことが、多々あつたからだ。

「……ときに命よ、お主は良かったのか？」

「え？」

「あやつに——榎田衿那に、ついて行ってやらなくて？」

榎田衿那は退院後、実家のある故郷の町へ、大急ぎで帰郷した。半年間、意識不明のまま昏睡状態だつた、弟の翔くんが目を覚ましたのだ。それは当然のことであつただらう。

しかし——それ以降、衿那からの連絡はない。

「お主は、あやつのためにわざわざ故郷を離れ、この地に來たのであろう？ だったら、お主も一緒について行ってやるのが道理ではなかつたのか？」

衿那が病院にいる間、命も何度か見舞いで訪れはしたのだが、あまりにも久しぶり過

ぎる穏やかな時間に、何を話していいのかわからず、微妙に距離感を掴み損ねてしまっていた。

結局、衿那とは退院祝いからそれつきりだ。ひよつとしたら、このまま刻院を退学し、実家から通える高校に転校するかもしれない。だが――

「鈴鹿ちゃん……私が衿ちゃんを追ってきたのは、彼女を一人ぼつちにしないためだったの。自身の不幸に、誰も巻き込みたくないって、家族から離れていった彼女が、孤独に押しつぶされないうよう、私が……衿ちゃんを支えてあげたかった。けどね、今の彼女はもう不幸なんかじゃない。支えてくれる家族と一緒に居られる。だから……これで良かったんだよ」

「……」

「それに、私の家って結構貧乏でね。両親にだいぶ無理を言つてこの学校に通わせてもらってるから、今更別の学校に移るなんて……言えないよ」

「ふくん、そういうもんかのう」

その言い分に鈴鹿は納得し切れていないようだが、特にそれ以上、何かを言ってくる素振りはない。そんな、鈴鹿の気遣いに感謝し、命は「ありがとう」と自然に礼を述べた。

すると、何故か鈴鹿は顔を顰めた。

「……のう、命よ。前々から気になっておったのだが……」

「なに？ 鈴鹿ちゃん」

「……最近のお主は——なんだか、ちよつと馴れ馴れしくないか？」

「へ……？」

思つてもみない鈴鹿の言葉に、命はきよとんと目を丸くする。

その反応の鈍さに、鈴鹿はさらに口を尖らせ、不満をあらわにする。彼女は大仰な仕事で腕を組み、思いつき椅子にふんぞり返りながら息巻いた。

「あの屋上でも言ったと思うが、儂は『鬼』である！ 貴様ら人間とは一線を画した、恐怖の象徴、真正の化け物よ！ その化け物に向かつて、こうも軽々しく礼を述べるなど

——

「……………」

「そもそも、なんだ？ 鈴鹿「ちゃん」などと、小つ恥ずかしい敬称までつけおつて！

そこは、もつとこう……威厳のある呼び名をつけるだの、工夫をしてだな——」

「……………」

「感謝など最小限でよいのだ。貴様はもつと恐怖し、怯え震え上がるべきなのだ。我ら鬼神の眷属の威光を前に、己が無力さに打ちひしがれ、平伏するべきであつてだな——」

「ふふ……」

「な、なにが可笑しいのだ！」

「ごめんなさい……でも、ふふふ……」

鈴鹿が自らの恐ろしさを説くその途中で、思わず命は笑いを溢してしまっていた。

確かに鈴鹿の言うとおり。命も最初の頃は彼女が怖かった。

鬼として覚醒した鈴鹿の姿は美しくもあり、やはり、恐怖を感じるものでもあった。

しかし、鈴鹿は蠱毒と戦い、衿那を救ってくれた立役者だ。その事実をないがしろにして、鈴鹿をただ怖がるだけなど、やはり命にはできなかつた。

それに、ここ数日間、鈴鹿の学園生活を見ていて思ったことなのだが。

鈴鹿は、おそらく初めてなのだろう。慣れない学校生活に、四苦八苦していた。人間的な集団生活になかなか馴染めず、苦手な勉強に頭を悩ませていた。クラスの違う命からでも、合同授業や噂などで、その様子が伝わってくるほどだ。

そんな拙い鈴鹿を見て、命は自然と、彼女の力になってあげたいと、手を伸ばしていた。そこに恐怖の色はなく、手のかかる妹を世話する、姉のような気分にさせられていた。

何より——命は思うのだ。

あの放課後の屋上で見た、あの笑顔を思い出しながら。

あの日、優しさに満ちた笑顔で、命を見つめていた鈴鹿の表情を——
あんな優しい微笑みができる彼女が、あんな優しい声をかけてくれた彼女が——
物語に登場するような、ただ悪辣に人々を襲うような悪鬼ではない、と。
命に、そう確信させるだけの、『なにか』を、心に抱かせたのだ。
だからこそ、命は鈴鹿のことを、必要以上に恐れないと決めた。
一人の友人として鈴鹿に寄り添おう、そう心に誓ったのである。

「……まったく、最初の頃の殊勝な態度はどこへいったのやら……ん？」

命（みこと）の自分に対する扱いに不満を愚痴りながら、鈴鹿は教室の時計に目をやる。命も同じように時計に目をやり、そろそろH R ルームが始まる時刻だと知る。鈴鹿との会話を打ち切り、自分の教室に戻らねばと、名残惜しげにそう思った。

そんな矢先——教室のドアがゆっくりと開かれる。

数人の生徒たちが反射的にそちらに目をやり、見知らぬ女生徒の姿に疑問符を浮かべた。

「？ 誰だ」

鈴鹿もそれが誰だったかわからなかったのか、目をぱちくりさせる。

ただ一人——他でもない命（みこと）だけが、それが誰なのかすぐに理解し、その名

を呼んだ。

「—— 衿ちゃん」

「む、櫛田衿那だと？ ……おお、言われてみれば！」

確かに、そこにいたのは櫛田衿那その人だった。

すぐにわからなかったのは、ツインテールの髪がバツサリと切られ、ボーイッシュなショートヘアに変わっていたからだ。また、登校初日に放っていた、どこか周囲を遠ざける危険なオーラも鳴りを潜め、少し強気な顔立ちこそ相変わらずだったが、表情そのものがどこか晴れ晴れとしていた。それこそが、櫛田衿那という少女、本来の姿だったのだろう。

「え、衿ちゃん……どうして？」

迷いない動作でこちらまで歩いてくる衿那に、命は思わず問いかける。

「ああ、この髪？ ただの気分転換……いや、自分なりのけじめつてやつかもね。何でも一人で抱え込もうとした、馬鹿な自分に対しての……」

「そ、そうじゃなくて……どうして？ 親御さん、弟さんは？ 一緒にやなくていいの？」

どうして戻ってきたのか。髪もそうだが、何よりそれを聞きたかった。

せつかく呪いも解けて、理不尽な不幸も終わりを告げた。弟の翔くんも目を覚まし

て、再び家族との絆を取り戻したのだ。なればこそ、もつと家族との時間を共有してしかるべきではないのか。少なくとも命（みこと）はそう思っていた。

「ああ？ アンタこそ何言ってるのよ！ せつかくの学生ライフなんだから、満喫しなきゃ損よ！ こっちは一度、親に「進学のために上京したい！」って啖呵切ってるんだから、今更撤回するわけにもいかないでしょ？」

「え？」

「今から転校手続きなんて面倒じゃない！ マンションの家賃だって、一年分、前払いで済ませちゃったし！ 私が使ってるやんなきや空き部屋よ、空き部屋！ 勿体ない！」

「え、ええええ!？」

「別に、会おうと思えばいつでも会えるんだから、無理に帰る必要もないわよ！ それに——」

奇妙なほどのハイテンションから一転、櫛田衿那は照れくさそうに、頬を赤く染めていた。

「こっちは……アンタだって……いるしね」

「……衿ちゃん！」

「……………ふっ」

そんな二人の『人間の少女』の微笑ましいやり取り。

それを『化け物たる少女』が、穏やかな笑みを浮かべて見つめていた。

鬼たる自身を誇るための、傲岸不遜な笑みでもなければ――

敵対者を圧倒するために浮かべる、獐猛な笑みでもなければ――

跪かせた他者を見下す、嘲笑うような嘲笑でもなければ――

刃物のように冷たく、誰かの傷口を抉る冷笑でもない――

苦しみを誤魔化すための、無理やりな作り笑いとも違う――

二人の友の再会を心から祝福し――

二人の未来へと、その先に思いを馳せた優しい笑顔で――

化け物は笑っていた――